

器の酒を持來り此酒爛めて進らせ度思ひはべれど年木の用意さへなければと最耻らひつゝ云に
 一休四邊を見廻し給ひかしこに能薪ありと宣ひつゝ釣佛檀に安じたる木佛を取給ひ老女が携へ
 來りし斧を以て木佛を二つにさつと打破て圍爐裏に投入給ひければ亦六夫婦小山三等は唯呆れ
 てぞ居たりける時に一休微笑して宣はく汝等我舉動を訝はうべなり昔丹霞と云ふ和尚大悟し寒
 天に惠林寺の木佛を焼たる事あり我今百魔山姥提婆仁三郎と云二軀の眞の佛を作らんと思へば
 争か假の木佛を惜まんや佛も下駄も同木の切にあらずや疾々爛せよといそがし給へば止事を得
 ず於三輪自在竹に陶器を縛付かの木佛を薪となしけるに一休は木佛の燃るを見給ひ掌を打て大
 に笑ひ給ひけり時に彼雉竹林の裏より飛出來りて一休の衣の袖に鬚線谷口呱と云て片目に涙を
 流れれば一休手を以て雉の脊を搔撫給ひ汝も二軀の佛を羨み成佛を願ふかと宣て又於三輪に向
 ひて宣はく此雉は乃ち是汝が父竹齋が再生なり片盲たるは其證ぞかし亦六が爲に雉と見違へら
 れて非業に死せし因果に因て雉に生孫杉太郎が小蛇の難を救ひ此家の廻りを離れず汝等母子に
 馴親む事子や孫を可愛と思ふ深き迷ひの故なるはと宣へば於三輪は哀さ限りなく此世に在して
 初孫の生立顔を見給はば嘸な喜び給ふべきに思へば痛はしやと云つゝ雉を抱しめて前後不
 覺に泣倒れければ亦六は膽を裂るゝ思ひにて共に落涙したりけり一休又宣はく砂石集と云書に
 もさる例あり皆是前生の宿因なれば如何共すべからずと宣ふ中に酒の爛出來ければ大盃に受て

數盃を傾け給ひ舌打しつゝあな愉快く宣ひて十分の酒氣を帯給ひ亦六が髭を剃たる剃刀の
 ありけるを取上て老女の死骸に向ひ給ひ汝を弟子となす志るしに剃度の剃刀を與ふべしとて
 白髮の髻を根よりふつと斬給ひ扇の端に結付て假の拂子となし給ひこれを持って眼々踏々として
 提婆が首に立向ひて黙し給へば三人の者等は引導の語は何成事をか授給ふと耳を傾て聞居たる
 に暫しさてかの拂子を打振給ひ
 極樂をいづくの程と思ひしに杉葉立たる亦六が門
 と高かに宣ひ喝と一聲叫び給ひ拂子を以てかの首を打給へば不思議なる哉首の皮肉朝霜の消る
 如くに解流て忽ち一ツの髑髏となりかの雉は身より光明を放ち虚空をさして飛去ぬ斯る折し
 も鶏は東天光と數鳴て鳥は空を鳴渡る聲に明れば元旦の東に昇る初日の出十方世界に輝きて彌
 陀三尊の來迎を目前に見る心地すれば提婆が惡も觀音の慈悲に解脱やなしぬらん一休重て宣は
 く我は此髑髏を以て世の人に無常迅速の理を示し彼等母子が罪障消滅の便とすべし老女が亡骸
 は能に葬り得させよと宣ひつゝ彼髑髏を杖の頭に掛給ひ見よや人々一夜明は元旦とて又晦日の
 來べき心もなく玉椿の八千代を祝て目出度と書けども朝顔の日蔭待間も定なき身とは思ふ萬の
 事を思恐れ蝸牛の角に名を争ひ蠅子の頭の利を貪り身を秋風の心は露ばかりもなき思さよ此如
 く目出て穴のみ残りしをこそ目出たしとは云なれ門松は冥途の旅の一里塚めでたくいはふ人の

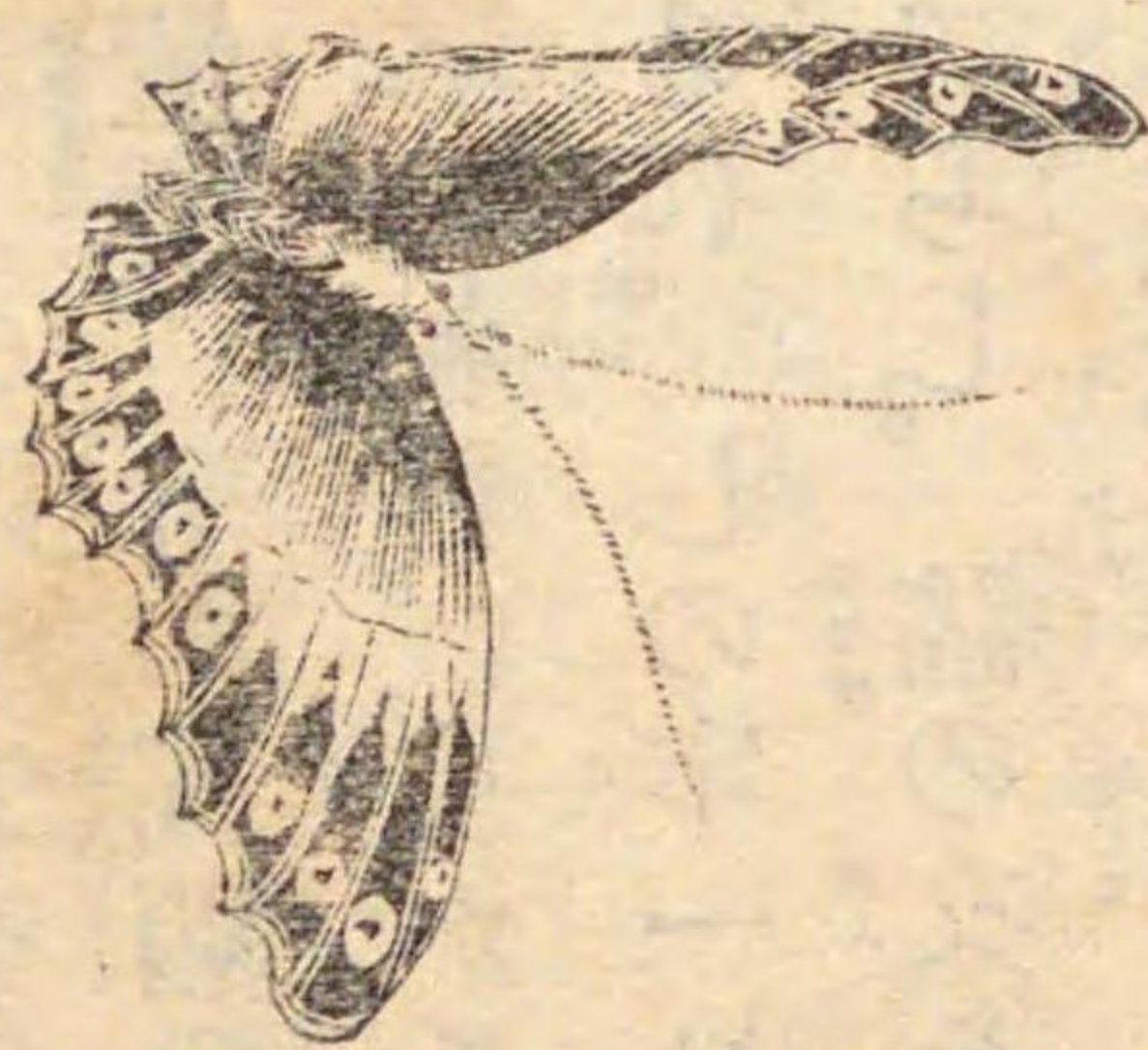
あろかさ

御用心ごようじん

と宣のたまひつゝ、飄々として亦六が家を立出給ふに明行空の氣色は昨日に替りたりとは見えぬぞ引替
て珍めづしき心地し大路の様松立渡して花やかに嬉しげなる人の交如扇々と呼福神双六寶船を召ず
やと云て賣歩うりあるき千町萬町の鳥追が参りしと唄へば千秋萬歲徳若と打囃し傀儡師猿曳の類ひ禮者
に混りて賑かなる往來の中を一休はかの髑髏を携帶て猶御用心ごようじんと宣ひつゝ、庵を指て歸り給
ひぬ皆人は是を忌しとて門閉籠て居けるより今に正月三日の間門戸を閉と云傳ふ斯て後かの雉一
休の庵の前に落て死ければ一休是を取給ひ提婆が髑髏とにも埋て一ツの塚となし杉立る門と
云る歌の意を以て三株の杉を植て塚印となし給ふ當國片野郡の中甲斐田と片針村の間にある三
本杉雉子塚と云は是にや諸亦六は老女の死骸を山城河内の堺洞嶺に葬る後に其所を姥が懐と
云又彼亦助が笈を野外に埋て卒都婆を建は一ツには亦助が菩提の爲め二ツにはかの雌雄の雁の
爲めなるべし中野村の雁卒都婆と云は是にや

古今雜錄 本朝醉菩提大尾

三洞
待華日久
見華終
雨無風浪意
閑一夢沉
亭下宴春魂
化蝶又飛來
天隱詩



意杜
林甫
陳齊外

壬申蒲月

山東京山録



雙蝶記自序

此物語稿をばりて。人に叙を乞んとおもへど。かゝる拙作なれば。讀てくれる人もあるまじと。たのまぬ前からさきぐりをして。自緒をどかんとおもふに。これを漢文にのぶれば。之乎者也の置所。酢の蒟蒻のど面倒なり。書得所が餅屋の餅にあらず。素人ごしらへの柏餅。皮があつくて味なしといはむか。これを和文にしるさんとするに。しの字一ツを論ずるさへ。過去未來現在など。三世因果の業をさらし。謠の文を淨瑠璃節に語るやうにて。かたばらいたき事おほし。と僕が不文を譏ならん。蟹は甲に似せて穴うるさき世間舅やおもふにつけ。舅といふ字を縁にして。此草紙を婿をたづぬる婿にたとへて見るに。繪は則顔姿なり。作は則意氣なり。板木彫は紅白粉なり。摺仕立は婿入衣裳なり。板元は親里なり。讀てくださる御方様は婿君なり。貸本屋様はお媒人なり。さて顔容にたとふる繪は歌川豊國の筆なればまうしおんなし。板木彫の小刀にて紅白粉の化粧もよく。摺仕立の婿入衣裳も不足なく。板元の親里も欲をばなれて。随分安賣の婿なれど。肝要の意氣にたとふる作が愚にて。しかも田舎言の其うち。都言を横らばへにいひませせて。聞ぐるしきこととおほければ。讀てくださる婿君のお氣にいらぬがちなるべし。所を貸本屋様方のお媒人口にて。かやうくの娘がござる。顔かたはいひおんなし。心はへはすこしおろかなな生れなれど。其かはりにば。舅姑のことはを背ず。婿君を大事にして。律義一べん所帯形氣の娘でござる。先見合をして見給へど。拙をおほひ。あしきをよきにとりなして。すゝめこんでくださらば。縁どほき此娘も。よき婿君にありつくべし。野猪も

里なり。讀てくださる御方様は婿君なり。貸本屋様はお媒人なり。さて顔容にたとふる繪は歌川豊國の筆なればまうしおんなし。板木彫の小刀にて紅白粉の化粧もよく。摺仕立の婿入衣裳も不足なく。板元の親里も欲をばなれて。随分安賣の婿なれど。肝要の意氣にたとふる作が愚にて。しかも田舎言の其うち。都言を横らばへにいひませせて。聞ぐるしきこととおほければ。讀てくださる婿君のお氣にいらぬがちなるべし。所を貸本屋様方のお媒人口にて。かやうくの娘がござる。顔かたはいひおんなし。心はへはすこしおろかなな生れなれど。其かはりにば。舅姑のことはを背ず。婿君を大事にして。律義一べん所帯形氣の娘でござる。先見合をして見給へど。拙をおほひ。あしきをよきにとりなして。すゝめこんでくださらば。縁どほき此娘も。よき婿君にありつくべし。野猪も

伏猪といへばやさしく。馬鹿も結構人といへば聞えがよし。是則力とたのみ奉るお媒人の貸本屋様のいひなしによる所なり。然則板元の親里の喜びおほく。祝儀の小謠千秋萬歳の千箱の玉をしこためて。追摺の御注文。冊々の聲をたのしむに至るべし。かくおもふ所を。ありのまゝにしるして以て。是を序とし。物前に残り本のかへるといふは忌詞。大福帳をおめでたうひらきますといふ

文化十年癸酉春二月

醒醒齋京傳識

附ていふ

書名を雙蝶記と號ゆゑは。二ツ蝶々といふ傀儡の戯曲にもとづきてつくればなり。志るせる事のさだかならぬは。霧の籬のうちを行雁の音をのみ聞て。かたちを見ざるが如くなれば。またの名をまかよべるなり。常言に。そら言に似たる實はいふとも。實に似たるそら言はいふべからずといへるも。人を誣をいとふなるべし。此草紙に志るせる地名年月日時人の姓名のたぐひ。都てそらごとにて。あながちに實をもとめず。たま〜古人の名に似かよへるもあれど。そは唯假用するのみなれば。實記にくらべてはたがふ事おほかり。見む人これをいぶかることなけれ。素童をなぐさむるのみなれば。俗耳にとほき雅言を好ず。無下にいやしき言をもて志るし。語勢をまはらんとすれば。てにはを誤つことおほかり。たま〜耳なれたる雅言をもちうるは。戯曲の文をまぬかれん爲なり。唯勸懲の意旨をうしなはざるを微意とするのみ

○燈臺鬼

源平盛衰記十卷之云。昔輕大臣の遣唐使に渡されて。形を他州にやつされ燈臺鬼となされつゝ、歸事を得ざりけり。子息彌宰相其向後の覺束なさに。大唐國に渡つて。たづぬれどもく。目の前に有ながら明すものこそなかりけれ。父は子を見知つゝ、斯といはまほしけれども。物いはぬ藥をのませ症になされたりければ、そも叶はず。額に燈械を打れつゝ、宰相に向て只泣より外の事なし。宰相はやつれたる父なれば、面を並て去らざりけり。燈臺鬼涙を流しつゝ。指端を食切て其血を以て宰相が前に斯ぞ書連ける。

我元日本華京客

汝是一家同姓人

爲子爲爺前世契

隔山隔海戀情辛

經年流淚蓬蒿宿

逐日馳思蘭菊親

形破他鄉一作燈臺鬼

爭歸舊里一寄此身

と書あらはしたりけるにこそ。宰相は我父の輕大臣共知けれ云々

是正史實錄に見えずといへども。盛衰記。下學集等に載たれば。ふるくいひ傳たる事なるべし。

和漢三才圖會に。此故事を記て大臣の歌を載す。

燈の影恥しき身なれども子を思ふやみのかなしかりけり

大臣の子の名一決せず。時代も詳ならず。然とも河州古市郡に輕之墓あり。和州高市郡に法輕寺あり。丹波の桑田郡に輕神社あり。皆輕の大臣の名を立り。但皇極帝の弟宮に輕皇子あり。是乃孝德天皇也。其外輕と稱る名を聞ず。以上和漢三才

此双蝶記卷之第四。右燈臺鬼の故事に據て作れり。故に左に其圖を出せり。大臣の子を少

年の兒姿と畫たるは。はかなきそらごとなり





雙蝶記總目錄

卷之一	一	夏草やつはきのどもの
	二	むざんやな兜の下の
	三	蛇くふと聞ばおそろし
卷之二	四	かえ駕籠に夢をとられて
	五	五月雨やある夜ひそかに
卷之三	六	陽炎としきりに狂ふ
	七	木枯の果はありけり
	八	我雪とおもへばかろし
卷之四	九	葉屑に花を見捨てし
	十	白露や無分別なる
	十一	紫の蜘蛛もありけり
卷之五	十二	窓鏡のうき世をはなす
	十三	さられたる夢はまことか

茂主池性胡身記杜遊身老亡夢
 林人邊命蝶受念丹偵賣女者路
 のののののののののののの
 聞合盜質狂千竹睡曲愁懺計落
 打力人物亂金刀猫者歎悔略人

總目錄終

卷之六	十四	蟋蟀まくらも床も
	十五	宿かして名をなのらす
	十六	おもしろうて願て悲しき
	十七	鶴をりて日こそおほきに

通計十七回

和鴉化野
 睦養石宿
 のののの
 酒腹鍋妖
 宴切蓋怪

雙蝶記一名霧籬物語卷之一

江戸 山東庵京傳編

(一)夏草や兵どもの夢路の落人

往時元弘三年。夏草の露と消にし夢の跡。憂世語を殘したる。相摸入道宗盛が二男。相摸次郎時行は。一家亡し後は。天高しといへども。踞。地廣しといへども。踳して。一身をおくに安きどころもなかりしかば。信濃國に隱遁し。深山幽谷のうちに蟄して。再天日を見る代もがなと。時節を待て居たりしが。頃日南北兩朝に別れ給ふと聞て。ひそかに使者を吉野の皇居にまゐらせて奏しけるは。亡親高時臣たる道を辨ずして。つひに滅亡を勅勘の下に得たりといへども。天誅の理にあたるゆゑを存するに依て。時行一塵も君を恨み奉る處を存候はず。天鑿あきらかに下情を照したまひ。枉て勅免をかうふらしめたまはし。宜官軍の義戦を扶け。皇統の大化をあふぎ候べし。と委細に奏聞したりければ。主上これを聞し召れ。不義の父を誅し。忠功の子を召仕。例なきにしもあらず。罰其罪にあたり。賞其功に感ずるは。善政の最たりとて。則恩免の綸旨の文を。日月打たる錦の御旗の裏にまゐりてぞたまはりける。かくて延文

四年二月のはじめ。時行信濃國管形の城にたてこもり。此彼に身をひそめ居たる平家の餘類を催促したりけるに。去る年箱根の水飲峠の合戦に。父を打れ子を打れて仇をふくむ兵等。宿望たちまちひらけぬと喜び。日をおひて馳集る兵凡七千餘騎ときこえければ。鎌倉に急を告る早馬。磯打波のひまなきが如く。礎打手のまげきに似たり。これによりて鎌倉の管領。諸將に對して軍略いかにと議せられけるに。これより逆寄して其不意を攻。銳氣を挫き荒肝を抜に志かじ。と軍議已に決し。月影ヶ谷の判官照影を大將として。鎌倉勢一萬三千餘騎。日あらず信濃國管形に馳着。戦騎前にすゝんで蹄をそろへ。勇騎後に隊して轡をひかへ。軍旗を翻し。金鼓をならして。鬨を喧とぞつくりける。城中には敵不意の逆寄に。軍慮をこらし。術計いまだ十分にといのはずといへども。累年憤積して。義心金鐵の如き兵どもなれば。更に臆する氣色もなく。變に應じて進退度を失はず。おめき叫びて攻戦ひ。射ちがふる箭は夕立の刺端をすぐる音よりも猶志げく。打合太刀の鏗音はそらに應る山彦の。鳴やむ隙もなかりけり。爰に故相摸入道の家臣に。大佛九郎貞直といふものあり。前年敵をあざむきて。一旦鎌倉をのがれ出。相摸次郎をもちりそだて。始終はなれず。今はすでに年五十歳に過ぬれども。力量武藝ますく減ぜず。なほ當城にありけるが。此とき唯一騎城を遠くはなれて。敵陣に馬をすゝめ。鎌倉勢の總大將。月影ヶ谷判官をえらみ打にせばやとこゝろざしけるは。大膽不敵のふるま

ひなり。敵兵にまぎればやど。兜をば着ず。白綾の鉢巻して。亂髪を顔に颯と振かけ。白糸威の鎧のうへに。雲鶴の地紋ある。丹地の錦の陣羽織を着し。青鈍の大口をはき。貝鏑の太刀に豹の皮の尻鞘かけたる。金作の小太刀を帶副。大長刀を右の小脇に引そばめて。白瓦毛なる馬の太。逞に。螺鈿の鞍を置。燃立ばかりなる厚總の鞆をかけてぞ乗たりける。かくて鎌倉勢のむらがる中へまぎれ入り。東西をはらひ。南北へ追まはし。黒煙を立て切てまはるに。寄手大勢なりといへども。唯一騎に切立られて。四方へ颯と引けるが。さすが大將のほどりへはちかづくとあたはざれば。むなしくおのれも知具麻川のこなたまで引退き。手綱かひくりつゝ。早咲の藤波のかゝれる松蔭に汗馬をよせて息をやすめ。亂れたる髪を押あげて。城の方をかへりみるに。むかふの山間に白旗赤旗いろくくの旗。春風にひるがへりて。雲より落る花の波霞にまがひてすさまじく。貝鐘太鼓鮑波。いどかまびすく聞へけり。扱は敵。城邊ちかく寄たりとちぼえたり。あな氣づかはしとおもふをりしも。雑兵二人。貞直が妻女更級といふにつきそひ。此どころまで落來りていひけるは。敵兵一の本戸を打やぶりて。城中へ攻入候ゆる。御懐胎の内室をこれまで御供いたし候といへば。更級もいはく。妾懐胎の身にあらざは。女ながらも敵にむかひて一方をふせぐべきに。をりあしく産月なれば。心は矢猛にはやりはべれど。身のはたらき自由ならず。彼等に扶られて。をりあしく産月をいせしと。くちをしき養

いふ。大佛九郎これを聞て打驚き。さてはいよく味方の安危こゝろもとなし。我はこれより城中へひきかへし。今一軍して敵兵をおひかへすべしといひすて。馬をすゝめんとしたるに。更級は此とき急に産のけつきければ。彼方も氣づかひ。此方もさすがに見すてがたく。馬をといめて飛くだりけるが。此處はすべて墓原にて。辻堂一ツあるのみなれば。雑兵どもに下知なして。更紙を辻堂にたすけゆかしめ。堂中の額をあふぎ見るに。子安地藏尊どかきつけあれば。これ産所には幸ひの表事とよるこび。地藏菩薩十種の福を得せしめ給ふうち。一者女人泰産と。地藏經にもあれば。佛前を穢ども。さまざまにくみ給ふまじとて。堂前に楯の板を敷ならべ。案山子のふる蓑をとり來らして其上にまきかさねて。更級をおらしめ。熊口の鉦の緒を産綱となしてとりつかしめ。雑兵を腰抱とし。おのれもかたはらにありて介抱するに。一人の雑兵うろたへまどひ。すはいそがはしき事のできしぞ。胞衣桶はいづくにあ。産湯はいづくにて煖すべきなどいひつゝ。馬盟をかへてあち走りこち走るを見て。直は氣をいらち。愚なる奴かな。人家に遠き野邊といひかゝる戰場にて。いかでかさある自由のたるべきや。とく川水を汲來れ。と呵ておひやり。産婦にそひてひたすら力をつけけるが。陣鐘太鼓の音。矢叫軍呼の聲。知具麻川の漲る音にひきあひて。いとすさまじく聞へければ。更級はまづ心なく。とかくなやみて産かねけり。かゝるをりしも郎等魚淵劍太といふ者。

汗も志どしに走來りてひざまづき。御注進つかまつると呼はりければ。貞直はこれをきいてい
 そがはしく。様子はいかにとくいへと氣をせけば。劍太は息もつきあへず。されば候敵兵す
 に城中に攻いり候へども。味方の兵命を惜まず。二の木戸にてふせぎ戦かひ候。どいまだい
 ひもをばらざるうち。こなたの産婦息もたゆげにいとなやましき躰なれば。貞直はかなたを
 聞さして。産婦の背中を撫さす。折もをり時もときとて此産氣。催生藥だにたくはへぬ。戰場
 の火急の節。さばかり心弱ては産得まじ。おん身は常の女に似ず日來雄々しき心もちて。
 男まさりの女なるに。四十歳すぎてのうゑ産とはいひながら。などてさばかり心よはきぞ。自
 よく氣をばげまして。とく産といひて介抱しつゝかなたにむかひ。シテ其あどはいかにと
 問かくれば。劍太は汗をのこひつゝまたいひけるは。今もうせしごとくに。雌雄いまだ決せ
 ず候へども。味方は必死をきはめて戦ひ。引鐘を聞ては怒りすゝむ。太鼓をよるこびて。勢ひ
 曾てたゆみまうさず。敵は遠路を押來りて。勢ほどつつかれ候へば。旗色あしく。金鼓の聲
 も濁りて聞へ候と。勢ひこみて告るにぞ。貞直はやうく色をなをしてよろこべば。劍太は
 く。拙者は今一度走かへりて様子を見とけ。再々御注進つかまつらんといひすて。飛がど
 とくに走去ぬ。時に又陣鐘太鼓を亂調に打ならして。咄とあげたる鯨波。天地もくづるゝばか
 りなれば。産婦はこれに氣のぼりして。あなやと叫ぶ勢ひに。子がへりして産おとし。志きり

に産聲をあげ。まかも男子にてありければ。貞直は味方の勝利の注進を聞らへに。此安産あれ
 ば。轉よろこびにたへず。雑兵に命じ陣笠を盪にかへ。川水をくましめて生子の身をきよめ。
 襦袢にかゆべき物だになければ。陣羽織をぬきてこれにつゝみ。幸ひこれは雲鶴錦。此見のお
 ひさき千歳の鶴の羽をのし。且青雲の志をおこせかしと。心の裏にいひつゝ。抱きあげて
 雑兵等にむかひ。かゝる火急の時節なれば。かうくせよと命ずれば。二人の雑兵はこゝろを
 候といらへ。辻堂の片扉を引はなして。更級をのせ。あとさきをかゝげて。山越におち行ぬ。
 扱貞直おもひけるは。此所にありてもし敵にかこまれなば。足場あしければ便よからず。且廣
 場に出で城中の様子。味方の安危をも聞べしと。辻堂の鉦の緒をひきちぎりて。生子を我身に
 ひしとくゝりつけ。馬引よせてひらりと乗。長刀を莖知に拳りて。東の方へゆかんとするに。
 敵ちかく寄たりとをぼへて。おめきさけぶ聲すさまじくきこゆ。生子はこれにおびえて志きり
 に泣ば。たがよつゝ犬の子。と背をたゝきゆり上つ。駒のかしらをひきかへして。西の方へ
 ゆかんとするに。かなたにも敵充滿して。鯨波を噴とあぐるにぞ。前後の道をふさがれて。
 いかたすべきと行まよひ。なほも泣子をなぐさめつ。志ばしたゆたふをりしもあれ。東西よ
 り敵兵颯と寄來れば。長刀を打ふりて三方へ追捲り。八面に斬てまはり。頼額立割車斬或は
 母衣付腰車。袈裟にかけては左右にさばかせ。双膝なごてはのつけにそらせ。抱し生子をかば

ふにぞ。十分にはたつきがたしと雖ども。力量武藝普通ならず。三歳の幼主阿斗を抱て。長坂
 坡に戦し。趙雲にもをさくおどらぬ其骨柄。神變不思議のはたつきに。敵しかねたる木葉
 武者四方にはらく散矢たり。貞直はなほも生子をゆりあげつ。息を休めて居たる處に。以
 前の郎等劍太。裸身に雜鎧を着。城の水吐の穴をくぐり出しと見えて。身上ぬれて軍をたらし
 つゝ走來り。陣笠を地上にかりりと投捨て手をつかへ。又御注進候と告るにぞ。貞直はこゝろ
 ならず。様子はいかにとたづねれば。劍太一息ついていひけるは。味方の兵必死の戦に。
 敵の人馬は大につかれて。已に落足になりたる處に。おもひかけず月影ク谷判官の家臣。山咲
 庄司雪森といふ者。荒手の兵數千騎をたがへて押來り。城の後にたちまはりて。矢を射ると
 雨のとく。精兵あまた面もふらず掛やぶり候へば。さすがに猛き御大將も軍略盡給ひて。後
 はらはんとし給へば。前の敵是をかこまんとすゝみより。前にむかはんとし給へば。荒手の兵
 後に打かゝり。變化自在の術盡給ひて。味方のこらず打死し。御大將も御腹めされ候と志を
 かへりて告ければ。貞直はこれを聞て大におどろき。喜びの色忽變じて愁眉を擡。何御主君
 ははや御自殺ありしとか。智勇萬人にすぐれ給ふ御大將。十に八九も勝べき軍に。甲斐なく打
 負たまふこと。まつたく南朝の王威おどろへさせ給ひ。聖運徴にならせたまふがゆゑなり。あ
 なくちをしや殘念や。と或は怒り或は悲しみ。牙を敵拳を握て落涙し。君主の命とはいひまが



ら。我一騎遠く城をはなれ。總大將を打んとして打も得ず。主君御自殺の場にあらざるは不忠の至なり。已に大將うせさせ給ふうへは。我一人生どいまりて何かせん。此どころにていさぎよく打死して。死出路の御供いたすべし。さりながら。今生れたる此孩兒を。此儘こゝに捨てきて。敵の馬の蹄にかけ。殺せんも不憫なれば。汝は此子を抱きて山越に落行。更級があどをおひて渡しくれよ。此子成長の後。父の遺物と見るべきため。此一品をそゆべしとて。鎧のひき合せより香包をとりいだし。此裏なるは身摺といふ名香なり。是乃楊貴妃が椅子の木のなごりにて。常に貴妃が身をよせて。おのづから摺たる木なるゆゑに。身摺とは名づけたり。此子つゝがなく成長なせば語りきかせよといふ折しも。友におくれたる歸雁雲井におどづれれば。矢立の筆を染て

またこんど頼の雁の別路は。待間ひさしき名残なりけり

といふ一首の歌をかか香包の裏にかきつけ。親子は一世の縁なりといへど。父子再會は待間ひさしき百年の後。冥途のみたのみなり。今生れ出て今わかるゝとは。よく薄き親子の縁なり。と猛き心も子によはりつゝ。目をもる涙はらゝと落かれば。矢並つくらふ針のうへに。霰たばしる如くなり。かくてかの香包を孩子にそえて。陣羽織に包たる儘劍太に渡せば。劍太はこれを受け取て。悲歎の涙せきあへず。主人のわかれをおしみけるが。すでに管形落城せし

と見えて。黒烟たちのぼり。烈々たる兵火天を焦し。あまたの敵兵いゝおうと。凱歌をあげる聲。百連の雷の一度におつるごとくひき渡りければ。貞直はこれを見て。無念の落涙なほどいめかねしが劍太にむかひ。汝此處に猶豫して。もし敵兵に山道をふさがれなば。其子を扶て行ことあたふべからず。名残は盡すどく行といそがすれば。劍太は是非なく涙をのこひ。山路をさしておち行ぬ。貞直は孩子をおとしやりて今は心安し。いで花ぐしき軍して。敵兵に目をさまさせ。さはやかに打死せばやとおもふにぞ。日來の勇氣百倍して。敵ある方へ馳ゆかんとしたる折しも。むかひの方の森のうちより。弦音たかく飄とひききて。一筋の箭飛來り。かたはらなる松の木にはつしと立ぬ。貞直これを屹と見るに。これ矢文なりければ。馬をよせて矢をぬきどり。結びつけたる文をひらき。讀をばりて打うなづき。巻おさめんとしたりけるに。忽一陣の颯颯と吹來り。地をすりて砂を飛ばし。かの文を虚空はるかに吹どりければ。其おとししたひ行んとしたるをりしも。鎌倉勢又鯨波を嚙とつくりて。四方より馳來り。貞直を取かこみて。我討とらんと競けり。貞直はこれを見て阿々と打わらひ。命志らずの葉武者ども。我を打んと寄來るは。夏の虫燭を惹て。みづから身を焼に異ならず。いで汝等が體にかりに宿せる魂どもを。我此大刀の下に追出して。冥途へすみかをかへさすべし。手なみを見よやとよばりつゝ。大長刀をひらめかして。むらがる敵の真中へわつて入

り。蜘蛛結葉十文字縦横無盡にかけやぶり。火花を散して戦にぞ。駒の足なみどうくどど
 いろき。鎧のかな物からくどなりひいき。火雷神のあれたるもかくやと思ふ勢にて。組ん
 どちかづく兵の。鎧の揚巻かいつかんで。弓杖五杖ばかり投わたせば。其人礮にあたりたる
 兵等は。四五人つれて前なる川中へ。まつさかさまにぞおち入ける。敵はなほ横合より。矢
 ぶすまをつくりて散々に射たりけるが。直貞はこれにも屈せず。射かくる矢を幾筋となく切
 落し。逃敵をおひかけて。はるかかなたへ馳ゆきしが。をりしも川霧立へだて。志ばらく其
 姿見えす。やゝありて山風霧を吹はらひ。貞直が又こなたへ来るありさまを見るに。馬も乗た
 ふしけるにや。歩立になりて。長刀を杖につき。よろめく足も痛手のよわり。身上にあまた矢
 を折かけて。枯野に残る冬草の。風に臥に異ならず。全身血にそまりて。白糸威もたちまちに
 緋威と變じ。鎧の袖の三の板を切おとされ。草摺の横縫皆つき切れて。威し毛ばかりぞ續きけ
 る。今はこれまでとやおもひけん。跡をつけきたりて組つかんとせし敵二人を。左右の小脇に
 かいばさんで。堤のうへにかけのぼり。汝等死出の供せよとよばりつ。知具麻川の深淵の。
 渦巻うちをどり入ば。白浪ばつと飛散て。をしむべし底の水屑となり果つ。唯漲る水の音
 のみぞ残りける。嗚呼此の日はいかなる日ぞや。すなはち是れ延文四年三月十五日の事なりと
 ぞ。

(二) 二むぎんやな兜の下の亡者の計略

さるほどに。魚淵劍太は生子を抱き。山道をさして落ゆきしが。鎌倉勢はやくこゝにも立まは
 りて道をふさぎ。落人をうちとらんとかまへたる様子なればせんすべなく。舊の處に立もどり。
 東の道より落ゆかんとしたるにかなたにも。敵兵のおめく聲。すさまじく聞えて。近くと寄
 きたる様子なれば。心は矢猛にはやれども。双拳四手に敵しがたく。殊に生子を抱きたれば。
 もし此處にて敵にとりかこまれなば。をめぐと打るべし。一旦身をかくし。敵の退くを待て
 のがれ行ばやと思ひ。かの辻堂のうちに入て見まはしけるに。軒端かたふき壁くづれたる古堂
 なれば。雨風もふせぎがたき躰にて。本尊は大なる木佛の地藏なるが。朽目に苔なめらかにし
 て。脇のあたりを寓木を生じ。箭箒竹膝をうがちて生出たり。石の佛具はありながら。香華を
 供養するとも見へず。塵うづたかくつもり。木の葉まじはりて。狐兎の足あとを印し。梁
 には燕子巢をいとなみ。蜘蛛網をむすべり。いとせまき堂中なれば。身を隠すべき處なく。い
 かにすべきと思ひけるに。地藏尊の背後のほかに暗き處に。あたらしき棺桶一ツありて。ふ
 るき卓圍をおほへり。これ幸ひ人の氣のつかぬよきかくれ所なりとおもひ。繩をとき蓋をとり
 死人を引だして佛坐の下の空なる所におしこみおき。おのれは生子を抱きながら桶のうちに

身をちいめて。卓圍をひきかづき。息をこらして居たりけり。かゝるをりしも百姓とおぼしき者四五人。道心坊を前に立或は窶堵婆を持あるひは櫛の杖を提。念珠をつまぐるもありて。此堂中に入。かの棺桶をかゝげ出んとして。繩のとけあるをいぶかり。やがて卓圍をどりのけたるに。劍太は敵に見いだされしと思ひたがへ。運命のつきたる所とおもひつゝ。桶のうちよりをどりいで。片手には生子を抱き片手には太刀を抜。よらば切んと身がまへたり。道心はこれを見て。且さきに魂をうしなひ。亡者がはやく幽霊になりて出しと思ひたがへ。あつとさけびてのけさまに倒たり。百姓どもは皆將基だふしに尻餅つきてうちわなゝき。人ごゝちはなき躰なり。劍太はこれらをよく見るに。敵兵にはあらで野邊おくりする者等とおぼしければ。太刀を鞘にをさめてはいはく。汝等おどろくはうべなり。我は子細ありて此桶のうちにかくれ。居たりといふ。百姓どもはこれを聞てやうく人ごゝちつき。俄に強くなりてまくり手まつゝいふやう。汝何等の者なれば。他の棺桶にとほりもなくかくれ居て。我はかくいたく肝をつぶさせけるぞ。亡者をばいかにせしぞと腹立げにいへば。劍太はいはく。亡者はかしく隠しおきぬ。まづ汝等はいづくの者ぞといふ。百姓ども劍太がありさまをよく見れば。裸身に鎧を着。太刀を帯たれば。又少しこはげつき。言をあらためてはいはく。我はかしくこの山一ツあなれたに住者どもなるが。今日此邊に軍あらんとは思ひ候はず。此桶の亡者は村ずるに住

む。獨身の小百姓にて。今朝往生いたせしゆゑ。日暮なば此所にて烟となさばやど。かりに此堂中に入おきたるに。此邊すべて戰場となりて往來なりがたければ。かしくこの山道をふさぎたる軍卒に。やうくことわりをまうして。此に來り候といふ。劍太またいふやう。かの山のあなたに住者ならば。故相摸入道殿の御恩をうけたる百姓どもなるべし。かくいふ我は故入道殿の家臣。大佛九郎貞直が郎等なり。此生子は主人九郎殿の子なり。九郎殿は今日此所にて打死し給ふ。我は主人の遺言にまかせ此子を抱きて落行んとおもへども四方に敵充滿して。のがれ行べき道なければせんすべなく。此桶のうち隠居たり。汝等故入道殿の御恩を忘れずば。かうくしてくれよとさゝやけば。百姓ども口をそろへ。さては左様に候か。代々入道殿の御恩をうけたる我くれば。いかでか仰を背くべきといへば。劍太喜び。やがて佛坐の下より亡者を引出し。鎧をぬぎて亡者に着せ。かうくせよとまた聾ば。百姓どもは打うなづき。堂前にすてありし陣笠と長刀をひろひ取て。まづ笠を亡者にかぶらせ。窶堵婆を横に亡者の兩手をくゝりつけて。長刀を杖につかせ。一人の百姓がいひけるは。いかに鋤平これ見よ。よき武者ぶりにあらずやといへば。いかさま鋤助がいふ通り。馬子にも衣裳亡者にも鎧や。とても薪にしてまふ死骸。土ほぜりの身でかりにも一騎の武者となり。百姓の身で着とならぬ鎧を着。麻幹の杖にかはりて。長刀を杖につき。死花咲せてお役に立とは仕合せものぞつふや

きつゝ。松の木によせかけておけば。劍太は裸身に太刀をわきばさみ。生子を抱て桶にすつばり身をかくす。百姓どもは立寄て蓋をおほひ。繩からげにして卓圍をかけ。棒をどほしてかゝげいづれば。道心坊はさきに立。鈴をならし經を讀つゝ山道をのぞみて行けるに。むかふに群る鎌倉勢。それ落人よどひしめきしが。ちかく來るをよく見。みなまづまれ落人にはあらず。さきほど斷はりをいふて通りたる野邊おくりの百姓どもなり。戰場にて棺桶は見るといまはし。とくゝ行といひて顔を背け。道をひらきて通しければ。桶の内の劍太は志すましたりとおもひ。さいはひに生子の泣ざるも神佛の擁護ならめとよろこびぬ。百姓どもは足をばやめて過去ぬ。嗚呼生子あれば亡者あり。生死流轉も一時に。修羅の街を騒がしき。さて此どきはすでに黄昏のころにてやゝほの暗くなりけるが。こなたには鎌倉勢馳集て。松の木によせかけありし亡者をはるかに見つけたるか。大佛九郎がはたらきに手ごりして。臆病神のつきたる者どもなれば。ちかくもすまらず。且評議していひけるは。あれ見よ松を小だてにとり。長刀を杖につき。大手をひろげて立たるは。大佛九郎が郎等にうたがひなし彼奴もなみくならぬ者のよし。立合の勝負にやくなき骨ををらんより。遠矢にかけて射殺せといひて。矢ぶすまをつくりて射かくる矢。雨霰の降かゝるにひとしけれど。いかほど射ても身じろきもせざれば。哀や彼奴は立すくみになりぬ。いで首をとりて。手柄にせんずといひて。我先とあらそひ

て組んどちかづく兵の。肩へぐにやりとたふる亡者。どつこいさせぬと身をひねりて。唯一打と斬つくるに。血さへいでざる死骸。よろめく亡者は生るが如く。かなたにうかふ兵の。背中にどつこり手はぶらゝ。シヤこまやくなりと呼はりつゝ。とらふる手さきの冷たさも心のつかぬ臆病武者。きつてもついてもひるまぬ亡者。うち物業にてかなふまじと。大手をひろげて組つけば。こなたも加勢に亡者を相手。くんづほぐれつゝ聲。揉合ひやうしにばつたりと。亡者の陣笠地に落たり。二人の武者はいぶかりて。よく見れば髪を亂して色かはり。額に三角の紙をわて經帷子のうへに鎧を着て居たりければ。兵等はあきれはて。是は正しく亡者なり。千劔破の城の蕪人形。楠もどきの謀計にのせられて。あたら矢種をつひやしつるくやしきよといへば。跡にひかへし兵どもは。哄と笑ひて一同に。陣所をさして歸りゆきぬ。○かくて東西の山に吹立る揚具の音。幽谷響にひびきてすさまじく。あちこちに散在したる兵ども。おひくりに集りければ。總大將月影ヶ谷判官。甲冑美々しく馬上にて。歩卒にあまたの松明をどらしめ。知具麻川のほとりまで出來りて。諸軍の戦功を賞しければ。家臣山咲庄司雪森。馬をくだりてひざまづき。勝軍のよろこびを相のぶる。かゝるをりしも庄司が郎等南方十字兵衛といふ者。南朝の帝相摸次郎にたまはりける。日月の御旗をうばひ取て馳來り。ちやくしくさへげて主人庄司に渡しければ。庄司はこれを判官にたてまつる。判官

これをおさめてなのめならず喜び。陪臣なれども十字兵衛が大功拔群なりと賞美のあまり、朝鳥となづけたる刀を手づからたまはりければ。十字兵衛は面目身にあまりあまた、び押戴て帶たりけり。さて判官は陣所をさして歸りゆく。をりからの朧月も。松明の光りにけをされ。馬のいなしく聲さへ。いさましくぞおぼえける。山咲庄司もふたゝび馬に打乗。十字兵衛等を率て後驅を志たりけるが。忽颯と吹おろす夜風につれて。一ひらの文庫空よりひらめき落ちて。庄司が兎の鍬形にぞかゝりける。是則かの矢ぶみなり。山おろしに吹もどされて。此處に落ちたるならん。庄司はこれをと。十字兵衛が松明をちかづけ。夜露にまめりて讀がたきを。からうじて讀をばり。何か心に思案して打うなづき。行列打せてすゝみゆきぬ。

三三蛇くふと聞はあそろし老女の懺悔

さても時光のすぐると。水の流るゝに異ならず。金鳥玉兔の足いちはず走り。一夢ばかりの間に十歳あまりの星霜を経て。はやく應安三年にぞいたりける。此とき相州鎌倉の小動といふところに駕籠の塵兵衛といふ貧しき者。里をばなれて一ツ家を作て住けり。こゝは古き歌にもこゆるぎの。磯の松風音すれば。夕浪千鳥たちさばぐなり。とよみたる所にて。浦ちかき苦家なれば。風いとあらくものすこくて。浪の音松の風。常にたえざる所なり。かれを駕籠の塵兵衛

衛といふはいかなるゆゑぞなれば。常に此鎌倉道に駕籠をかゝげいで。往來の旅人をのせ。わづかの賃錢をとりて。朝夕の煙をたつるゆゑに。異名を志かよびけるなり。かれ今年齡三十七歳に至。妻の於破矢といふは年は夫に二ツまさりて四十歳にちかし。前の夫は樂人にてありしゆゑ。おのづから舞をならひおぼえたるが。今も諸社にやとばれて。神樂をまひこれを活業のたすけとす。子は男女二人をやしなひぬ。姉は名を小蝶といひて十四才。弟は蝶吉といひて十二才なり。兄弟ともに貌容うつくしく。花よりも清く雪よりも妙にて。玲瓏たる一双の珠玉をならべみる如く楊貴妃のをさな立。業平の童姿も。かくありつらめとおもはるゝばかりなれば。里人等はこれを見て。鶯の巢に鶯を育るにひとしなどいひてうらやみぬ。親の身は殊更にいつくしみ深く。かの竹取の翁が赫奕姫をやしなふ心にて。すゑたのもしくぞ思ひける。弟の蝶吉をば。物學びのため霧ヶ澤の月輪寺といふにつかはしおき。今は姉の小蝶をのみ家にやしなひおきぬ。さて一日塵兵衛。つねの如く駕籠をかゝげて出行。稻村ヶ崎の松蔭におろしおきて。人のやとふを待居たり。そも此稻村ヶ崎は。東北は經路盤曲して。極樂寺の切通にっいき。西南は海水森漫として。江之島を眺望す。月影ヶ谷の木枯は。梢をゆずりて黄葉を飛し。七里ヶ濱の高波は。巖をあらひて白玉を散せり。遠山。遙峯。平砂。曲岸の好景。いひ盡くすべうもあらず。さて塵兵衛は駕籠のうちに尻かけて。往來の旅人にむかひ。駕籠にめさすや駕籠

くよび居たるに。諸社の宮奴にやどはるゝをなりはひとする幣又といふ者。烏帽子に白張をひきかけて極樂寺の切通しの方より來つ。あなじ松蔭にあぐみ居て。天道ほこりしつゝ塵兵衛に向ひ。いつもくよく精が出るよといへば。塵兵衛いはく。昨日は大雨にて旅人もまれなれば。少しの錢も取らず素手ふりてかへりしゆゑ。今日は昨日に引かへて。よき天氣なれば。二日振の錢をと思ふて。聲かるゝばかりに呼かくれど。ふり向てみる奴だになきはといへば。幣又は打笑ひ。昨日星の御堂の軒下で。さしかけた將基の勝負せまいか「チ、昨日の駒組おぼえて居る。錢がどれいで此方も退屈「チ、慰にさして見やれど。幣又はたづさへたる。懷中將基を取出して。盤の紙を芝のうへにおしひらけば。塵兵衛もむかひ合。たがひにならざる駒の數。磯の小石と貝殻は。歩の不足とぞ見えにける。ならばをはりて塵兵衛いはく。ゆふべから盤上をどくと見さだめ。工夫した相手とさすはちと強もの。先手は和主か「イヤさしやれ「まづ飛車さきの歩をつかふと。これを將基のはじめにて。たがひに手敷をさしけるが。幣又は頬づゑついで盤上をつらくと打ながめ「これ塵兵衛。此通双方の碁子をつらねたるは。魚鱗。鶴翼。常蛇の形。是乃ばち戰場に敵味方の對陣したるに異ならず。いやしき我等が口からまうすはかしこけれど。今己に南朝北朝二裂にわかれておはしますは。此盤上に王の駒の二枚あるに同じからずやといへば。塵兵衛打うなづき。いかさま和主がいふ通。二枚の王は南朝北朝。

角にひとしき名大將。足羽の深田に駒をおとし。飛車とはたらく楠。どのも。湊川にむだ駒を打ちらし。武藏野の手見禁に。勝ほこりたる。頭のどのも。桂馬の高上りして家の鼠の歩の餌食と成果られ。それ見や和主の駒のやうに。南朝の王の駒は吉野の奥盤上の片隅におはしまし。一手か二手で搦にならふ。哀な事といひければ。幣又は胡盧。イヤさふいやるな北朝方の足利家。今は盛にほこれども。此方の手にも駒がある。どこのいづくに名將が。かくれあらんもはかられず。金將や銀將が。王城をいかほど堅固にかこつても。歩も成金の時を得て。官軍の桂馬の駒をかう打こんだらなんとする「イヤ香車の鎗の野猪武者。桂馬の高飛およばぬ事「どころをおれがと打ち駒「歩であしらふてせかす駒「なむさんこれはと退駒。たがひにいとみあらしひてなほも手敷をさしけるが。最前よりかたはらに薦をかぶりて晝寝して居たる野ぶせりの乞食目を醒して欠し伸し。頭を搔つゝ此方の將基をさしのぞき「あなあやうや。油断したら北朝方も。都づめにならふも志れぬ。といへば塵兵衛はこれをきいてふりかへり。そちらが口からいらざる助言。だまつて居よとねめつくれば。乞食は口をつぐみて天窓から。薦をすつぱり又た臥ぬ。將基は勝負まだつかず。なほ志ばらくさしけるが。幣又が加た負色にて。ほどく搦べく見えければ。幣又は負ばら立。駒をかきよせひつ摺て。大地へぐわらりと投付けたり。塵兵衛も目尻引あげ。目にかたて。たがひに面をあかめけるが。よくくちもへば身にも

應ぜぬやくなき詞のわらそひと心づき。こなたが笑へばかなたも笑ひ。たがひに呵々と笑ひけり。かくて幣又は投ちらしたる駒を集て懐にをさむる折しも。極樂寺の切通しの方よりぶつさき羽織に野袴はき。肩を打ふり。臂あしはりていかつがましき旅さふらひ。落葉を踏分つこゝに來り。藤澤の宿まで此駕籠をやとふべし。とくく乗よといひければ。塵兵衛はこゝろえ候といひつゝ。相棒の泥太はいづくへ行しやとあたりを見まはしけるに。はるかむかふの十一人塚のほとりの沙深き所に例ふして居たりければいそがはしくはしり行てよび起せど。熟睡して目をさまさず。旅さふらひは氣をいらち。我急の道中といひ。かゝる日みじかのときなれば。すこしの間も猶豫ならず。相棒が間に合すは。先へゆきて別の駕籠を雇ふべしといひすて。ゆかんとするを幣又よりて。まづ志ばらくとひきといめ。これ塵兵衛。あの泥太めはいたく酔たる様子なれば。呼起した所が急な役には立べからず。今のあらそひの中なほりに。こちが片棒手つだふて行へければ。はやく此御方を乗まいらせよといへば。塵兵衛は喜びつゝ。さふししてくれば都合よし。いざめしませと駕籠をとりておしむくる。さふらひは賃錢を論じてやうくさだめ。今は何時にやと問ふ。塵兵衛日ざしをあふぎ見て。いまだ未の下りにも候はんかといふ。幣又もどもに。此松の影巽にかたふきて見ゆれば。いかにも其のところに候はんといへば。かのさふらひは打うなづき。日みじかのころの旅なれば心いそがはし。随分いそげといひ

つゝ駕籠に乗うつる。前棒は塵兵衛。あと棒は幣又が。烏帽子白張宮奴の。形もそぐはぬ片相手我肩はかたじけなくも。神輿をかづく肩なれど。駕籠をかづくも讀と歌。酒代の錢をおもへばこそとつぶやきつゝ。かづきあげたる旅駕籠の。垂に吹込沙烟「ヤツサコリヤサ」ちやうさやようさどかけ聲も。足もそろはぬ富士三里。七里ヶ濱の波打きはを。千鳥がけにぞはしり行ぬ

○寶珠塵無二堂宇。腸瘦 纒容ニ數百人。と萬里居士のつらねたる。鎌倉深澤の大佛のかたはらに。人あまた群り物をかこみて立たり。釣する翁 牛あふ童 磯菜つむ嫗。貝どる蟹のたぐひまで。旅人まじりにおし合て。我さきとおしあひぬ。これ何を見るなれば。白髪をいたく旅の老女。礎に尻かけ。ちいさきあじろの笈と菅笠をかたはらにおき。竹杖にすがりてやすみ居るを見るなりけり。此旅の老女やありて諸人にむかひ。妾が身の因果物語を懺悔のため

に語りて聞せまうすべし。妾は丹波の國の山奥に住獵師の妻なるが。まゝ娘をふかく憎みて。平日に身上を撮爪たてゝいためくるしめけるを。まゝ娘かなしみ。谷川に身を投てむなしくなりぬ。其報いにてつねに娘を撮たる大指のさき。まきりに痒くなりてたえがたかりしが。つひに蛇となりて人のまじはりならぬ身とはなりぬ。これ見たまへといひて。右の手先におほひたるものを取のけてさし出すを見れば。大指のさき目口鮮なる蛇にて。心のなしにやうごめくや

うにて。見るさへ身の毛そばだちぬ。老女又いひけるは。これによりて妾先非を悔。たちまち日來の悪念をひるがへして。菩提心を起し。諸國の靈場ををがみめぐらば。罪障を滅するよすがともなり。指ももとの如くになりもやせめど。かう思ひたちはべりぬ。懺悔には罪を滅するよし。昔語りどて聞しともはべり。それは妾とは事かはりて。嫉妬の心よりどうけたまはる。されど大指の蛇となりし因果はあなじとなれば。當地の靈場を拜むつひでに。其舊跡をも見ばやと思ひはべるなり。といひていとわびしげなり。立集ひつる人々これを見て。あなおそろし。物のむくいばかくぞあなる。かゝる奇性もまのあたり見ざれば。實しき事とも思はず。こは世の人のよき戒。ぞといふもあり。あなめづらし。前代未聞。又たぐひなき話柄ぞ。かれを見せ物にせばよき福を得べきに。錢もとらで見するは惜き事よといふもあり。憐の心ある者は。一錢二錢をあたへて去。心なき輩は。誂歌うたひかけてゆくもあり。おのがさまく散行ぬ。彼老女もやがて身を起し。腰をのしつゝ、笈を背あひ。笠をたづさへ竹杖をつき稻村ヶ崎の方へ去ぬ。

雙蝶記卷之一終

雙蝶記一名霧籬物語卷之二

江戸 山東庵京傳編

(四)かえ駕籠に夢をとられて身賣の愁歎

夫は扱おき駕籠の塵兵衛は。旅さふらひを乗。駕籠をかへげて道を急ぎ。黄昏の頃藤澤の宿に到りけるに。さふらひは駕籠ををりて賃錢を拂ひ。いそがはしげに足をはやめて過去ぬ。塵兵衛は幣又に賃錢の半をわかち與へて。から駕籠をかつぎ。みちすがら四方山の物語りしつゝ、小動に歸りけるが。幣又は塵兵衛が住家の門ぐちにて別れをつけてかへりけり。塵兵衛は我宿の片折戸をおしあけて裏に入ば。娘小蝶走り出。けふはいつより御歸のおそかりし。さぞな草臥たまひつらん。足そゝぎてまゐらせんといひつゝ。鹽に水を汲入て持出。手づから父の草鞋脛巾の紐をどきて。足をそゝぎなどするかひくしさに。おのづから常の孝心あらはれぬ。塵兵衛は身上の埃を打拂ひて。簀子のうへにあがり。圍爐裏のはたに寄て蘆火焼。足ふみ出し胸うちひろげてあたり居る。娘はまつ茶を汲て父にすゝめ夜食もどくこしらへて待わびぬ。たふべ給ひなんやなど。詞やさしうもてなしぬ。塵兵衛は家内を見まはし。於破矢はいづくへ行しぞ

とたづねれば。娘いはく。母さまは前程鶴ヶ岡の夜神樂にやとはれてゆき給ひつるが。酒も買
 て戸棚にあり。老爺さまの歸り給はいあげませと。いひおきて出ゆき給ひつといふ。塵兵衛こ
 れを聞。鶴ヶ岡の夜神樂は。いつも終夜なれば。明日の朝ならでは歸るまじ。これほど夫婦ど
 もかせぎにしても。前の世から持來る貧乏はせんすべなしなど云つ。もの喰酒飲や身うち
 あたゝまりて。あのづから晝の疲出けるにや。覺えずねふけいで。臂枕して横になり。はやく
 射の聲いでぬ。娘は父の裾に物かけんと。庭にすゑおきたる駕籠の蒲團をとりけるに。其下に
 柳條絹の財布ありければ。いぶかしみつゝ父をゆり起し。駕籠蒲團の下にかやうなるものあり
 しが。おぼえあるものによといひつゝ父に見すれば。塵兵衛はこれを手にとり。灯火のもとに
 て裏をあらため見るに。小判金七十兩ありければ。大におどろき。これはまさしくかのさふら
 ひ。我駕籠の内に忘れおきたるに疑ひなし。今夜は藤澤の宿か。もしさらずは近くて平塚。遠
 くて大磯には宿りつらん。はやくこれを持ゆきて。旅宿をたづねかへさばやといひて。いそが
 しく身じたくし。財布を懐にして走りいでしが。波間より氷て出る月影も。雲にへだちて
 暗かりければ。立もどりて松明をともし。娘さみしくも留主せよといひすてゝ又走りいでしが。
 御遠からぬ鐘の聲の。月に和して聞ゆるをかぞふればはや子の刻なれば。立とまりて思案し
 けるは。かのさふらひの旅宿をいづくどたしかにしらざれば。かく夜ふけてはたづねるにも便

あし。かのさふらひかゝる大金を忘れたれば。よも先へはゆき過まじ。あとへもどりてたづ
 ねるは必定なり。駕籠の塵兵衛といひては此道すぢに誰しらぬ者もなければ。もしかなたより
 たづねるとも知れやすからん。今夜は且といまりて。明日未明にいでゆき。彼道すぢをたづね
 てかへさばやと。心を決して又立もどり。娘にもかやう〜と思ふやうを語り聞せ。かへさぬ
 内は兎角心すまざれども。今夜はせんすべなしといひて。かの財布を佛壇の下なる戸棚のうち
 にさまひおき。娘に酒飯の器などをさめしめて。みづから門を鎖し。着がえだになければ
 着の儘にて。親は古夜着子は薄き蒲團をおほひ。寒夜を志のぐ浮寐鳥。窓屏風にすき間もる。
 濱風をふせぎつ。まばらく睡につきけるが。小夜もやうやく更わたり。巖にあたる波の音聴
 々どひいき。松にこたふる浦風颯々となりさやぎ。うちよるほひたる苦家なれば。地震のふる
 ふやうにゆらく〜と動いてとさわがしけれど。住なれし身は常となりて。耳かしましとも思は
 ず。殊に塵兵衛は晝のつかれあればよく睡ぬ。常に目さとき娘も一ツの禍いでくべきはしに
 やありけん。ともに熟睡したりけり。かゝる折しも蘆垣をおし破り。壁をこぼちて盗人志のび
 入ぬ。これは晝のほど稻村ヶ崎に臥居たる野ぶせりの乞食なり。前程ふと此ところを通りかゝ
 りて。様子をどくと見といけおきたれば。拔足しつゝ親子が寐たるうへをまたぎ越して。佛壇の
 下戸棚をさぐり。かの財布をうばひとりて懐にし。立出んとせしが。灯臺を枕上にあきてよ

く寐入たる。小蝶が寐顔のうつくしさに。ふと目をどいめて立もどり。まばらに見とれて居たりけり。この娘貧家に養われて。燕脂白粉のいろどりを假ざれども。ちのづからなる美麗もいはれず。玉もてつくれるやうにて。寐亂髪の額ぎはにこぼれかゝりたるさま。はつ花のなかにばひらきたるに。青柳の糸を亂し懸たるにやと思はるゝばかりなり。此盗人のさまいかなれば。月代の毛長くちひのびて。面をつゝむ手拭の破れ目より。あなめの薄のやうにつらぬき出つ。眼光り髭がちにて。身材高く身には海松のやうに破れたるとき衣の襤褸を着て。うへに破れたる帆席をまどひ。繩を帯にして。身上すへて垢つきいときたなげなるが。娘の寐顔をさしのぞき光るまなざりをひるがへして見るさま。燕の巢を角鷹のうかいふに異ならず。此盗人心のうち。さても世にはかゝるうつくしき娘もありけるよと思ひ。現心もなく。後にはちかくと顔さしよせてなほ見とれけるが。此とき塵兵衛ものにおそはれやしけん寐かへりしければ。盗人はこれに心つきて足ばやに逃出。七里ヶ濱の方へ行ぬ時に此あたりちかき藻屑村の獵師。夜釣のかへりに爰の濱に獵船をのりつけて陸に上り。立まよふ雲も夜風に吹はらひて。影すまじく住月の光りにつきて見るに。かの盗人波打ぎはの巖に尻かけて。懷より財布を出し。金をかぞへて居たりければ。あやしき奴と思ひつゝと寄に。盗人は手ばやく金をとりをさめて。優々と歩行。獵師どもは其ゆくさきに立ふさがり。後にも立ておのゝく權をおつどり。盗人の

眉間をのぞみて打かゝるを。盗人は懷手志ながら身をひねりてこれをさくれば。一人の獵師は盗人の向脛をなぎたふさんと拂ひ打にうつを。さそくをあげてをどりこえ。高沙を蹴散して。まばらくあらそひけるが。獵師どもはなほすきまもなく。左右ひとしく打かゝるを。とく身をまづめて背後に立ば二人の獵師は入身になり。たがひに頭を打合て眼くらみ。權を撲地と取落して。倭僮所をぬす人は。二人の獵師の首領を兩の手にかい掴み。投んとしたる後より。又一人組つきぬ。これにも屈せず盗人は。二人を左右へ投のけて腰をひねり。足を飛して。一人をばつしと蹴たりければ。三人ともに四五間飛で海中へ。まつさかさまにおちこちの。鴉のぬぐらをおどろかして。ばつと立たる水烟。あと白波と盗人は。行方も志れずなりにけり。かくて時刻やうつりて。冬の夜の長きもすでにわけなし。鳥のこゑ聞えければ。塵兵衛ぬふりを醒して見るに。壁くづれて其あひだより江の島のあたりまで。寐ながら一目に見わたされければ。こはそもいかにとおどろきて起上り。よく見れば泥足のあともあれば。こは盗人の入たるならんといそぎまどひて。戸棚のうちを見るに。財布なければます。おどろき。扱は何者かかの財布の金の事を知て盗みにいりたるにうたがひなし。何にもわれ盗まれてはいひわけなし。今にもかの侍たづねて取に來らば。ぬすまれたりといふとも豈實とおもふべきや。我かく貧しき身なれば。うたがはるゝは必定なり。天道は人を殺し給ふか。こはいかにせん

くといひて。虹のやうなる息を吐。手を拱き頭をたれて居たりしが。娘も目を醒して此事を聞どもにおどろき。父の愁るさまを見つゝ胸つぶれて泣居たり。塵兵衛つら／＼思ひけるは。彼金の事を別に知者のあるべきいはれなし。うたがはしきは相棒にたのみし幣又也。彼奴昨日將基にならずらへて。さぐりあひたる詞のはしく。唯者とは思はれず。彼といひ是といひ。うたがはしき事おほし。まづ彼奴を捕て糺明すべしと思ひさだめて走りいでんとしたる折しも。昨日のさふらひ藻屑村の百姓どもに案内させてこゝに來たる。塵兵衛は走出る門首にて丁ど面を合せけるが。さふらひは塵兵衛を内へつき入。いそがはしく息をつきていひけるは。汝が栖をからうじてたづね來つ。我昨日汝が駕籠の敷蒲團の下に。柳條絹の財布に金七十兩入たるを忘れおきたり。さだめて汝取おきつらん。とく／＼かへしくれよといふ。塵兵衛は今さら狼狽。何と答へん詞もなく。まばし答もたゆたひけるが。ありの儘にいふにまかじと思ひ。なるほど其金の財布はゆふべ宿にかへりて後に見つけ。早速御返し申したく存せしかど。御旅宿も存ぜず。殊に何くれと夜更候故せんすべなく。今朝にいたらば御あどをまたひ返し申すべしと。大切にままひおき候に。あれ御覽せよ。昨夜あのだとく壁をこぼちて盗入しのび入り。財布どもに金をのこらず奪ひ去候と。いはせもはてずさふらひは。微晒つゝ四邊を見まはし。汝みづから壁を穿ち。足あどをつけなどし。盗人にうばはれしなんと詐は愚なる計策なり。小兒を欺

くどもよくあどむかるべきや。我昨日道をいそぐに心せかれて。金を忘れたるに心つかず。大磯の宿までゆき。やう／＼思ひ出しあどへ歸らんと思ひしが。一昨日の大雨の落水にて。折あしく馬入川とまりて渡るとあたはず。心ならず夜をあかせしが。昨夜丑すぐる比水落しと聞。夜中にかしこを立出。藤澤の宿にて汝が名と住所を聞て爰に來れり。さある悪計をなさばかへりて汝が身の爲めあしかるべし。とく／＼金を出せといふ。塵兵衛は頭を低。かく貧しき拙者なれば。うたがひ給ふはうべなれど。奪はれたるはいつわりならず。いかなる誓も仕らん。かの盗人少し心當も候へば。兪議の間しはらく日をのべ給れかしと。身を打伏てねがひけり。さふらひは眼をいからし。刀の端をそらさまにひるがへし。臂を押しはりていはく。盗人猛々しとは汝がたぐひをいふならん。詞をやはらかにいへばつけあがりする不敵奴。我を誰どか思ふ。此鎌倉綴喜里の梅ヶ谷郡領の家臣。袴田紺九郎といふ者なり。彼金は都へのぼす主人の用金なれば。片時も猶豫なしがたし。汝さばかり肝ふとくては。一通にては金を出すまじ。梅ヶ谷に率て去。圍圍につなぎて糺明せん。百姓ども彼奴をくゝれと下知すれば。百姓どもはありあふ繩をとり。塵兵衛を押伏て。兩手を背へねぢかへせば。娘はかなしく走りより。のうゆるしとどさ／＼ゆれば。さふらひは情氣もなく。妨げせば汝もくゝりて率てゆくぞ。退き居よと阿つゝ刀の端にてつきやれば。背後にありし方灯ととも。撲地かしこへ倒れけり。百姓どもはな

ほ塵兵衛に細をかけんとしたる所に。寢前より門首に。内の様子をうかがひ居たる妻の於破矢。いそがはしく走り入て。百姓どもをおしどいめ。さふらひの前に手をつきて。恭しくいひけるは。妾は此塵兵衛が妻にて候。前程よりかしこにて様子をのこらずうけたまはり候が。夫におきてさある悪意ははべらねど。御うたがひは無理ならず。ぬすまれしとてまうしわけにはなりがたければ。別に金をとものへておんかへし申すべし。何ぞぞ午過る比まで御まちくたされかし。ひとへに願ひたてまつるといへば。さふらひは少し面をやはらげ。金さへかへさば片時の猶豫はいたしくれん。それまでは藻屑村にて相待。八ツ時には金うけどりに来るほどに。其詞を違るな。いよく金を返さずば。妻子までもとらへゆき。圍圍につなきて糺明するぞ。後悔すなど詞はげしく言りつ。百姓どもに案内させて。藻屑村をさして出去ぬ。塵兵衛はため息を吻とつきつ。いかに思ひかへしてもうたがはしきは幣又なり。といひつゝ又走り出んとするを。於破矢はまばしどひきどいめ。幣又をうたがひ給ふはよしなきとなり。幣又はゆふ宵のほどより鶴ヶ岡にやどはれ來り。妾にもあひて昨日片棒を手つだひたる事なども物語。終夜庭火を焼。彼所にて妾ととも夜を明し。今朝歸たるは妾が目前見たるどころなり。いかでか幣又が二人ありて。こゝへ盗みに來べきいはれあらんやといへば。塵兵衛はこれを聞。志かどさあるか志からば彼が仕業にあらず。別人なり。さありては盗人を兪議すべき心當りもなし。汝

今さふらひに晝時までと約せしが。いかにして金をとものふる心ぞやといふかれば。おはやはつと立あがり。軒につりたる鳴子をとりて。圍爐裏の柴の焼さしを筆となし。鳴子のうらに物かきて。手ばやく娘の襟にかけ。これ御覽せよといへば。塵兵衛は眉を擡め。此鳴子のうらに此娘賣物と書たるは。小蝶が身を賣て金とものふべきころよな。其志は過分なれど。此小蝶はもとそちが連子にて。我血をわけざる娘ゆゑ。身を賣ては義理たらず。別に思案を仕かえてよど。打志ほるればおはやはく。鳴子をばおのが羽風にまかせつ。心とさばく雀さへ。養ひうけし恩は志る。生れつきも相應にて。金に鳴子の此小蝶。七ツの時から養育され。大恩うけしやしなひ親の。難儀を救に身を賣を。いかでかいとひはべるべき。夫のためにはおのが身を賣妻もあり。我身年今すこしわかくあらば。なとて娘を賣べきぞ。娘そちもさだめて得心ならぬ。といへば娘はわろびれず。のたまふまでも候はず。ふつゝかなる我身にても金になり。父うへの難儀だに救ふならば。いづくへなりとやりてたべ。君傾城はちろかなと。たどへ人身御供になるとても。露ばかりもいとふべき心にあらず。さりながら。活業にいとまなき父うへ母うへさぞ不自由におぼされん。夫のみ心にかゝるぞかしといひて。かなしさかくす針目衣。顔におほへる振袖の。うちよりもれて縫わけに。つたふ涙ぞまとなる。塵兵衛は目をまばたき。かゝる禍の出來べき時節にも有べきが。おもへばくやしき身の不運。垣もまばらに扉の

志まりもあろそかなる此家に。大切の金をあづかりながら。熟睡せしは我一生の誤りなり。さばかり深き孝心のほどは限なくうれしけれど。いかに難儀にせまればとて。親の身として子を賣は。人喰鬼もせぬ業。こればかりはやめてくれよとうけがはず。義理をかさぬし山坂に。重荷をかつぐ息杖の。休むひまなきおもひなり。おはやはちかく身をよせて。志かのたまふはうべなれど。前程さふらひの詞に。いよ／＼金をかへさずは。御身をく／＼り行て圍圍につなぎ。責問べしといひしにあらずや。妻子の身としていかでかそれを忍はべらん。此事は我々親子が心にまかし給はれかしと。詞は心つよけれど。目には涙の村老れ。今も降べく見えけるが。やう／＼心をとりなほし。さらぬだに日の短きころなるに。何くれと隙とらば。時刻うつりて彼さふらひにつがへたる詞にちがひ。事のやぶれとなりぬべし。昨日人の語るを聞ば。手越の里の妓家が江之島に逗留して居るとなれば。幸なり。妾は一歩に彼所へゆきて。妓家を連來るべし。一世のわかれといふにもあらず。道のほども遠からぬ手越なれば。伊豫簾の間もとむる。風のためよりもありぬべし。水の泡の消かへりても。よる瀬のなとてなかるべき。娘髪をとりあげ化粧してまぢてよと。いひすて／＼涙をあさへ。小裙ひきあげつゝ出ゆきぬ。塵兵衛は胸ふさがりてあるにもあられず。隔の奥へ泣にゆく。娘は鏡臺取いだし。むかふ鏡も泣顔にくもりがちなる冬の月。常は化粧もまれなれば。ちりばむ匣を打はらひ。眉かく黛も遠山に。雪の白粉

唇を。色どる燕脂も薄紅葉。鬢のほつれのばら／＼と。あつる涙を水椀に。とりわけかぬる亂れ箱。よせてはかへる波枕。身を浮草のつとめといふほどふした物と。わけも白齒のわきまへぬ。恍惚子娘の心には。鬼住國に行く思ひ。とはおもへども賣物に。花弁もさしかざり。妾つくれば常よりも。猶まさりたるうつくしさ。いまだ十四のはつ花を。垣に咲せて路の邊の柳とともに手折せんは。いと憐むべき事なりけり。かくて時刻もうつりしが。母の於破矢はいそがはしく。妓家を連歸り。娘を見せて身の老を七十兩にさだめ。塵兵衛も涙あさへて出來りければ。妓家は七十兩の金を塵兵衛が前におき。矢立を出して筆ばやに。證文を書おはり是に手形を押給へといへば。かなしさは限なけれど今更せんすべもなければ。わな／＼き／＼手形をぞ押たりける。おはやは妓家にむかひ。かりそめならぬ親子のわかれなれば。いひふくめたき事もあり。證文を渡せしうへは。連行事は志ばし猶豫をしてたび候へといへば。妓家は打うなづき。それももつとも。志からは暮六ツをかぎりむかひに來るほどに。夫までに身じたくさしておきめされ。といひおきてぞ歸りける。さて於破矢夫にむかひていふやう。とかくする間にはや午も過ぬべし。彼さふらひの來ざるうちに。おん身其金をたづさへて。少しもはやく返してあげせといふにぞ。塵兵衛はこゝろえつといひて。七十兩の金をたづさへつゝ。門首まで立出しが。袂よりからりと落たる將基の駒をひろひ取。こはこれ昨日稻村夕崎にて我手に取

しまかも金銀二ツの駒なり。これを忘れて今まで袂に入れをきしも。金の難儀にさしつまる前表にてありけるか。おもへばこれもいまはしど。いひつゝ地上に投すて。歎息してぞ出でゆきぬ。かゝる折しも七里ヶ濱の方より。禮服兩刀きらくしく出たちたる若侍。挾箱持草履取を具し來りて。駕籠の塵兵衛といふはこれなるか。といひて案内を乞は。於破矢立出。いかにもそれは此方にてはべるが。あるじは今宿に居合せず。何の御用か候とのべければ。彼さふらひは遠慮もなげに打通り。あるじ他行とあらばまばらく待。對面の上にて委細の事を語るべし。といひて座につき居たるが。ほどなく塵兵衛立歸りて。外の方よりいひけるは。於破矢も小蝶も安心せよ。金を返して何事なく受取の志るし文までとりて歸りしぞ。といひつゝ裏に入て彼さふらひを見つけ。ついに見うけぬお歴々。いづくの御方にやといぶかれは。さふらひは威儀をつくろひ。塵兵衛といふは和主よな。あふは今がはじめなれど。賤き業をいとなむべき人品とは見えす。おのれは當地月影ヶ谷判官の家臣。箕腹蟻右衛門といふものなり。今日和主をたづね來つるは別儀にあらす。頃日若殿玉兎之助どの。金澤にて漁獵遊覽の歸るさ。霧ヶ澤の月輪寺に立ちよられ。彼寺に居る蝶吉が容貌世にたぐひなき美質なるを見給ひて心にかなひ。小屋從にめしかゝへんと望まれしに。彼寺の上人はすでにうけがはれて吹嘘有んどの答なるが。和主は蝶吉が父にて。もとはよしある弓取にて。今零落せられたるよし。上人の物語にきこしめ

され。和主をもめしいだし。もとの武士に取立たまはんとの事なり。親子一時の出世なれば。よもや違背はあるまじといひて。挾箱の裏より衣服兩刀を取出し。是は則ち主從契約の志るしにおくらるゝなりといひて。塵兵衛が面前にさしおきぬ。塵兵衛はこれを聞。案じ煩たる氣色にて。まばしいらへもせざりしが。やゝありていひけるは。彼上人吹嘘のうへは見子が事はせんすべなく。御うけをつかまつるべし。拙者事は今のたまふが如く昔は武士のまねをもせし者なれど。かく零落候て兩腰を一條の息杖にかえなし。案山子の弓矢だに手にとらぬいやしき身となりくだり候へども。ゆゑありて仕官をのぞまず。况や弓馬の沙汰にも及ばず。見子が美貌のゆゑによりて。立身する事本意ならぬば。よろこばしくも存せず。貴人の賜を受ざるは不禮なれど。此品は此儘返上仕つると。案内なる返答に。蟻右衛門はまばし詞もたゆたひけるが。偶かたはらにありし鳴子に目をつけ。取上見て打うなづき。此鳴子の裏に此娘賣物どかきたるは。察する所貧苦にせまり。それなる娘を賣しならん。娘を賣程の所存にて。蝶吉が美貌による立身を好ぬとはこゝろえず。たゞしはまた使者に立たるやつがれを。かろしめての返答かど。釘打詞の理につまり「イヤ其儀はとくちごもる」心をくみて蟻右衛門「もしまた仕度などにさしつかへてのとなるか。其儀もとくに察せし故。これ此金子をたまはるなり。これにても得心なきや。といひつゝ、懷より百兩包を取出して。塵兵衛が前におく塵兵衛は此金

を見てつくづく心の裏に思ひめぐらす事ありて。忽ち武士魂を柱。詞をあらためていひけるは。さばかり厚き御惠をうけおさめざるは。おそれおほき事なれば。おほせに志たがひ是等のたまものを頂戴いたし候べし。といへば蟻右衛門は心ちつきて喜び。志からは目見えの儀は吉日をえらび。追ていひ越し候べしといひて別を告て歸けり。塵兵衛は門あくりして内に入。何思ひけん口をそゝぎ手をあらひて。佛壇の前にひざまづき。志ばらく拜して扉をひらけば。苦蒸たる五輪の石塔を安置して香華を手向おきぬ。さて妻娘にむかひていはく。われ此春旅より歸しどき。此五輪を取來りてかやうに祭るを。汝等いぶかしみ。いかなるいはれありやと問ければ。亡父の非をあらはすに志のびざれば。其答もせざりしが。今日はいはねばならぬ時節となりぬれば。やむとを得ず語るぞかし。そも我亡父は五大院左衛門宗繁とまうして。故相摸入道どの、重恩をうけたる人なりしが。入道どの亡びたまひしみぎり。預りおかれたる御嫡子相摸太郎邦時殿を賺し出して。情なく敵に打せたる不道人なれば。人毎に爪弾して惡み。梟惡の罪身を誑けるにや。一身をおくに處なく。舊友おほしといへども一飯を與ふる人なく。遂に道路に餓死して終給ひしと聞。其砌我は幼稚て何事も志らず。志かるに此春人の語るを聞けば。父の終焉の地は越中國蛭牙山のうちなるよし。其所を尋ばやと此春旅立して彼山に到り。からうじて此五輪の塔にたづねあたり。五大院宗繁靈と志るしあるにて。疑ひもなき亡父の志

るしなりとおもひ。彼山中の者につきて聞しに。此塔は情ある山人等が集りて建て置きたるよし。我おもふに此塔を長く彼山中におき。若故相摸太郎どの、所縁の人の目にかゝらば。塚を發れんもはかられぬば。此塔をとり去て跡をかくすに志かじと思ひ。旅荷物やうにつくりなして。遠路をいとはずたづさへかへり。志かるべき寺院にも建ちかばやと思ひければ。これ人目にかゝらんとをいとひて。かく我家の佛壇にすゑおきて。其靈を祭るなり。我他人の情にて成長は志つれども。漸々に零落して。かく賤しき業をなし。貧窮するも皆是親の因果の子に報ふ道理にて。我身をくるしむるは。父の罪科を滅すべき便なりとおもへば少しもいとはず。况や仕官などする心は露ばかりもあらざれども。小蝶も蝶吉も養子なれば。二人の者に我身の因果をおよぼして。貧きくらしをさするとの歎はしく。一ツにはさしあたりて。小蝶に身をうらさぬため。二ツには蝶吉が身を立る爲とおもへば。日來心に誓ひたる義をやぶり。仕官をすべくおもふなりといひて。又古革籠の内より錦の手靶につゝみたる横笛を取いだし。小蝶にむかひていひけるは。是此笛は濡髪と名づけたる名管なり。これは汝が實父。伊勢國の樂人。二見太夫是次といひし人の秘藏ありし物なるが於破矢が我にあづけおきぬ。我これまで貧苦にせまりても。賣代なさは亡人の是次どのへ。義を立るところなり。今あらためて汝に是をあたる間。うみの親の遺物と思ひ。肌身はなさず持て居よ。といひて渡しければ。小蝶はこれを

おし戴き。これがうみの親人の遺物にて候か。といひて涙さしぐみつゝ。懐にふためけり。於破矢は夫の物語を聞て。はじめて其素性をまじり。父の非を隠す孝心といひ。義理ある養子をつくしむ慈悲深き志を感じて。小蝶どもにひたすら涙にむせびけり。かくて又時刻やうつり。落日烟をおびて。碧霧を生じ。彩雲水に映て紅の光を散し。釣する翁は舟を移して家路を急ぎ。むれゐる驚は友を集て。荻汀にくだり。蘆花の雪をふらす濱風は。昔深き軒端をめぐり。赤蜻蛉の紅葉をちらす枯枝に。ふくれ聲なる山鳩も。宿にかへりてはや黄昏の頃となれば。於破矢は涙の目をのこひ。灯臺を取出して火をともし。門の戸をさしかためんと志たる所に。彼手越の里の妓家駕籠をつらせてつと來り。約束の時刻ゆゑむかひに來つといへば。塵兵衛はいそがはしく。佛壇の扉をたて、妓家にむかひ。且笑かけつゝこなたへとむかへ入ていふやう。さて娘の事につきてわりなき無心あり。別の事にも候はず。前程證文に手形を押して。かくきはめし事にはあれど。此方にてはからず金を得たるにより。前程受取たる身の代七十兩をかへすべければ。何とぞ約を變じ證文をもどしてよ。此儀をひとへにたのみまうす。夫婦口をひとしうしていひけるに。妓家は色をかへ。御身等は妓家のさだめを知候はずや。一旦金を渡して證文をうけとれば。もはや此方の奉公人にて。其方の娘にあらず。いかでか元金にて返すべき道理あらんやといふにぞ。夫婦はうべとあもひながら。いかにもしてうけひかすべし

と。頭を掻もみ手して。さまゝ詞を盡しけるが。なほ聞入されば。志からば元金に三十兩まじ。百兩にして返すべければ聞入てたびぬといへど。妓家は耳にも入らずはら立て。やくなき詞を費すなどいひつゝ。さゝゆる夫婦をつきのけて。燈臺のかけに泣伏たる娘の手をとり引立つ。駕籠の裏におし入て。垂を撲とあろし。とくくやれと駕籠をいそがし走り去ぬ。夫婦は跡を見あくりつゝ。尻居にたふれてあきたる口をふさぎもせず。志ばしあきれて居たりけり。をりしも海士の子ども等が磯にあそびて吹すさむ。漁笛の音さへあはれなり。やゝありて塵兵衛は。片手に鳴子。片手には金の包を取上て。双方を打ながめ。嘆息していひけるは。嗚呼禍福吉凶は。糾る繩のごとしといふもうべなり。今二時はやく此金を得たるならば。此娘賣物ど。かくかなしき文字は見まじものを。立身をのぞまぬ我身は。かへりて仕官をせねばならぬ義理となり。憂目を見せじと思ひつる。娘は人手に渡りゆく。これ此如く百兩の金を手に握りながら。子を賣て泣因果な親が世に又とあるべきか。つらく思ふにかゝる禍いで來りて。今日一日にする事なすと。鴉の嘴ほど齟齬も。すべて是我身宿業のつたなきゆへなるべし。娘を妓家へつかはしては。此金も何にかせんといひて。金の包を投出し。かはいや娘といひさして。鳴子を抱き泣伏ければ。こらへこらへし女房も。氣を張弓の弦きれて。聲をあげ身をもたえつゝ。悲嘆の涙にむせびけり。かゝる折しも藻屑村の獵師ども。こゝに來りて門首よりさしのぞき。塵

兵衛は内にか。ゆふべ物をぬすまれたといふ噂を聞いて告に来た。我々三人ゆふべ夜釣のかへりかけ。七里夕濱であやしき奴に出あふたゆゑ。打ち倒してとちもひのほか。手づよき奴にて取にがせしが。ゆふべ此家へ志のび入しも。おほかた彼奴にきはまれり。彼奴はたしかに徳波村に野ぶせりの乞食にうたがひなしと。海をはたらく高聲に。囀てぞかへりける。塵兵衛はこれと聞。さては昨日の野ぶせりめあやしき奴と思ひしか彼奴が業にてありけるか。はやく捕へて糺明すべしとちもひつゝ走りいでしが。いや／＼こゝでぬすみをせしやつが。ほどちかき穂波村に居もせまじゆくへいづくと志ら波の。何を目みてにたづぬべきと。思案志かへて立戻り。椽鼻に尻かけて。溜息つきて居たりければ。女房は愁を拂ふ玉帝と。機轉きかせてついでだす。茶碗の酒も冷氷る。夜を鳴わかす浦千鳥。いと哀をそえにけり。夫は扱あきこゝに又。離々原上の草。壘々白骨叢に纏て。影すさまじくすむ月の山もあらはに木の葉ちる。蛇ヶ谷の墓原に。雪をあざむく白髪のお女たゝずみて。あたり見まはし懐より。呼子の笛を取いだして吹ならずとひとしく。竹藪ををしわけて。あらはれ出しは別人ならず。かの宮奴の幣又なり。ときに老女聲をひそめていひけるは。我諸國の靈場をめぐる旅の女に身をやつし。大指を蛇につくりなして人を欺き。因果婆々と異名をよばれて。此鎌倉を徘徊するは別儀にあらざ。一ツには管領家の動靜をうかひ。二ツには味方を集めんためなり汝はいかにといひければ。

幣又は懐中より一卷を取いだし。拙者も命にまかせてかく宮奴に身をやつし。あつむる味方の連判状。いざ御披見とさしいだす。老女はとりてさら／＼と押ひらき。月影をうけて讀おはり。よくせしぞ幣又。かくのごとくおひ／＼味方集るうへは。時節を窺義兵の旗をひるがへし。多年の塾懐をひらくべし。かならず人に悟られな。といひつゝ一卷をもどしければ。幣又はうけとりて懐中し。此ほどかたはしを聞えおきつる。小動の駕籠の塵兵衛と申す者。たゞ者ならずと存するゆゑ。近づきて物によせ。いろ／＼探りこゝろみつるに。彼はまさしく不忠者の五大院の左衛門が子にうたがひなく候へば。折をうかひひ打取て。義兵の血祭にいたすべく思ひ居候と。語るをりしも稻村のかけより塵兵衛が相棒の泥太をどりいで。かくあらんと思ひしゆゑ。跡をつけて爰に来つ。其一卷をこちへわたせ。褒美の金にかゆるはとよばりつゝ。幣又が懐に手をかけたり。幣又は其手をとりにてぬぢかへし。足を飛せ彼方へ蹴やれば。老女は手ばやく竹杖に仕籠し刀を抜放し。陽炎稻妻ひらめくかけに。泥太が首は前におち。軀は後にたふれたり。幣又は白張の袖をひきちぎりて。刀の血しほを拭ひとる。老女は刀を鞘におさむるとたんの拍子。背後なる茂竹のうち。霜夜を寐かねて羽たゝく雉。二聲三聲鳴ければ。老女はいく。やよ幣又此奴も鳴て射られた雉。ありか人を人にまらすなど。腮をもつて下知すれば。幣又は打うなづき。首もむくろもかたはらの。苔の清水に投入たり。老女は小裙とりあけて。互に

さしやく耳に口。右と左へわかれ行ぬ

(五)五月雨やある夜ひそかに遊偵の曲者

扱月影ク谷判官照影は。相摸次郎を亡したる勳功によりて。足利家より所領を増たまはり。威勢もちのづから盛なりしが。子息玉兎之助清影は。花ヶ谷の下館におはしけり。塵兵衛が兒子蝶吉は小扈從となりて。動之助と名をかえ。側近く仕へて寵遇あくて。塵兵衛も家臣の列にたらなりて。今は姓名を紫元澁右衛門とあらため。心にもあらぬ仕官なれども。一旦君にするうへはと思ふにぞ。忠志をかたふけて仕へ。よくへりくだりて人愛おほかりければ。諸傍輩も彼が賤き業をせし時の事をいはず。おのづから用る人おほく。昔の艱難にかはりて。何不足なき身となり。唯不運なるは娘小蝶のみなれば。いかにもして贖いだし。烟花中。活地獄の苦みをすくはめと思ひけれども。今は都五條坂に賣かえられ。千金にあらざればもどすまじといふにぞ。さすがに高金なれば力あよばず。もとより他聞をいとひて口外せず。唯夫婦日毎に彼がとを言出して。歎ぬときもなかりけり。かくて又光陰移換。年々馳るが如くにて。まばらくもといまらず。流水の海に歸するにひとしく。機杼の箴をなぐるに異ならず。すでに六年をすぎて永和元年にぞいたりける。さて動之助はいまだ前髪せんぱつの若衆すがたにて。今年は十七歳にな

りぬ。かの箕腹蟻右衛門はかねて隠謀あるにより。玉兎之助の行跡を亂さんため。すゝめて動之助を小扈從となしけれども。動之助は忠義の志ありて。殿のこゝろを亂さず。寵にほこらず。恩をきせて隠謀の方人にもとおもひて吹嘘せし澁右衛門も。忠勤をばけむゆゑに漸々に立身して。今はおのれが上に立ければ。今さらぬたましく思ひ。いかにもして彼等父子を退退けばやと。時節をまちて居たりしが。頃日動之助病によりて。まばらく私宅に下り。打臥居るをさいはひとし。手越の里の白拍子。都といふ女を玉兎之助にすゝめて。下やかたに呼よせ。酒宴の興をそえけるが。此都年は廿に二ツ三ツ過ぬれども。たぐひまれなる美女にて。大掖の芙蓉の水を出るが如く未央の柳の霞をおびたるに異ならず。曲舞糸竹の志らべは殊にすぐれて。頻鳥の聲をやはらげ。綾羅の袖をひるがへして舞かなづるさま。古の祇王祇女佛などにも専おとらまじく見えければ。玉兎之助其艶色に迷ひて動之助に見かえ。連日館にといめおきて手越にかへさず。妾の如くにめしつかひて。執愛いと深かりけり。都も玉兎之助が美男なるにめでし。誠心をかたふけ。鴛鴦の契淺からざりしかば。蟻右衛門は心中に志すまじぬとよろこび。遊び相手となりてなほよからぬとのみをすゝめければ。ますく煙酒に耽り。佚遊宴樂にのみあかしくらし給ひ美酒珍味席上にみち。郢曲謳歌日夜に絶ず。恰かも妓家娼門の所行に似て。うたてかりけるありさまなり。かゝる放佚の行跡を見かねて。譜代古老の臣等。かはるく和漢

の先蹤をひきて。屢と諫舌をひるがへすといへども。つやく用たまはず。日をおひて悪行のりければ。もし此事管領のおん耳にいらば。おん咎あらんは必定なりと。安きころもせず。薄氷を踏こちして。胸をいためざるはなかりけり。志かるに動之助長病平愈して出勤し。館のありさま殿の行跡前にかはれるを見て大におどろき見るに志のびずして。詞を盡し理を糺し。さま／＼諫まうしけるが。老臣等の詞すら用ひたまはざれば。いかでか弱年のもの、諫をうけいれたまふべき。耳にだに聞入たまはず。無益の舌を動して我遊興を妨る。奇怪とよ。とく／＼退けど呵たまへども。動之助は小膝をすゝめ。なほ強て諫けるにぞ。やがて氣色かはり。扱は汝都が爲めにちもひかへられたるをねたみ。諫言にとよせて彼を去りぞけんとはかるならぬ。にくき奴がまうし條かなど。敦圀せかせたまひて。動之助が誠忠の諫とはまりたまはず。殊更此とき大に爛醉しておはしければ。忽怒の外皆をひきあげたまひ。白鞘巻をとり柄に手をかけ給ひて。ほど／＼手打と見えけるにぞ。都はあはてまどひて。とゞめんとまつるを。かたばらにありける蟻右衛門。いそがはしく押へだて、近づけず。玉兔之助はすでに刀を抜かけたまひ。いと／＼あやかりし折しも。執權職山咲庄司雪森が妻淀瀬。次の間よりはしり出で。こは御短慮なりといひつゝ袖にすがりておしといめ。詞をやはらげて宥まうし。これらのおんふるまひ。もし上館のおん父君にきこえなば。御勘當あらんもはかられず。妾あしきとは



きこえわけざるほどに。一旦それなる都とやらんを里へおくり歸したまひぬ。志かきたまひて後。妾ひそかにおん母君にきこえわけ。あらためて彼をおん妾となし。ふたゝびめしかへさるゝやうにはからひ候べし。何事も妾にまかせたまはれかしと。いとなどやかにまうしければ。玉兔之助これを聞たまひ。執權職の妻たるものゝ詞なれば。あながちにいひ破んともさすがなれば。志ぶく其詞をうけおさめて。にぎりたる刀の柄を放つたまへば。蟻右衛門はこれを見て。本意なき顔してけり。淀瀬はよろこび且動之助を私宅に退かしめ。扱都にも志かゝのよしをいひふくめ。一度里へ歸るべしといひて。其支度をせさせけるが。庭の木陰も暗くなりて。此日もすでに暮の鐘。諸行無常と告渡り。都が身のうへ後にぞおもひまられける。〇此下館の後門通りは田畑についき。前には細きながれあり。比しも五月下旬にて。このごろついで五月雨も。志ばし晴間の夏木立。葉守の神の志めはへて。志げる梢をもる月の。ひかりも薄き夜なりけるに。時にもあらぬ覆面頭巾に目ばかり出し。鯨函の兩刀をよこたへて。武士の浪人とおぼしき者。何か人待やうすにて。此あたりに立といまり後前に心をくばりて居たる折しも。館の塀より氷のごとき刀の鉾ひらめき出。不破の關屋の板庇を。もる稻妻にとならず。かの浪人はこれを見ていぶかりつゝ。棟の木陰に身をひそめて。やうすいかげどちかひひ居る。どはしらずして塀のなかばを切やぶり。鼠の穴を出るがごとく頭をいだして四邊をうかひひ。潜出た

る曲者は。暗の烏か鳥羽玉の。黒裝束に打扮て。がんどう頭巾に面をつゝみ。千兩箱を小脇にかゝへて足ばやに歩み去。時にかの浪人棟の陰よりはしりいで、曲者までとよばゝりければ曲者は立といまり。いそがはしく刀の小柄を抜き取りて。エイと聲かけはつしと打つけ。跡をくらませ逃去ぬ。浪人は身を避て打おとし。あやうきとどひとりごち。落たる小柄をひろひとりて後日の證據と懐中し。もとの木陰に身をかくせり。此ときかの白拍子都は。手越の里へ歸るとて。乗物にておくられ。従者あまたつきとひて後門の方より出來りけるが。以前の浪人棟のかげよりあらはれいで。刀を抜て打ふりけるに。従者等はひらめく刃の稻妻に肝をけし。魂をうしなひて乗物をすておき。風の木葉と逃ちりぬ。浪人はほくそづきて。乗物の戸を引はなち。都をどらへて引出しけるにぞ。都はあどろき聲立んとするを。手ばやく口に手をあてゝものいはさず。後抱に抱ながら。刀をさか手にとりなほして。胸さかにつきたてければ都は身上血に染まり。あなやとさけぶ聲だにいでぬ苦しさにたえずやありけん。浪人の左の小指をくひ切りぬ。浪人はおぼえず手を放ちければ都はいとよはりたる聲を立て。御館の人ゝはいづくにおはすぞ。救てたべ助てよとさけべども。苦しき息は青嵐の。空に音するばかりにて。誰こたふる人もなく。鬢きれて黒髪は。風の柳と打亂れ。染帷子の辻が花も。泥にまみれて哀なり。聲立させじと浪人は。都をのけさまに押出。吭をまたゝかにさしとほせば。鮮血さつとほどば

しり。前の流れにまたよりて。時にもあらぬ紅葉を散し。七轉八倒身をもだえ。手足をふるはせ齒を嚙ならして苦痛の躰。目もあてられず。嗚呼いたはしい哉。二十三を一期として草葉の露と消失ぬ。かくて浪人は頭巾をぬぎて刀の血をおしのごひ。鞘におさめて此處を立退んとしたる折しも。むかふのかたの畦をつたひて。いそがはしげに來る人あり。雨衣を身におほひ。脛巾草鞋の旅姿。菅の小笠を提灯の。上におほひて來かゝりしが。はげしき夜風に火を吹けされ。月の光をたよりにて此方に來り。彼浪人と行ちがひ。都が死骸につまづきてうちおどろき身をぬぢむけて。人殺しの曲者までとよびとむれば。浪人は足ばやに立戻り。ものをもいはず刀を抜て只一打と切つけたり。旅人は身をかはし。前なる流れをせきとめたる。土俵をとりてうけとめたるに。土俵の小口をすつばと斬。土はばら／＼こぼれおち。あまたの蛙聲をそろへて鳴立けるが。月をつゝめる黒ばへの。雲一面にまきみちて。五月雨颯と降來り。忽ち暗夜となりけり。時に旅人も一腰を抜はなし。曲者を打とめんと。暗裏を拔足しつゝすかし見て。頼額二ツと斬つくる。浪人は踊上りてこれを避又旅人に切つくる刀の鋒。旅人の鼻のさきにひらめきければ。胸をひやして飛すさり。拂ひ切に切けるが。互に身を入ちがへて打刀。いたづらに空をきる。閉てはひらきほぐれては。捷遑遊。糺迷藏。盲龜の水を游がごとく。右に撲り左に按。飛上りて切つければ。まづんでくゝる刃の下。背後おはせにつきあれたれば。いそがは

しく身をひるがへして。阿吽の呼吸を心あてに。めつた切に切刀。おぼえず互に打あはし。打々まど切むすぶ。かゝる折しも後門のかたより。山咲庄司が妻淀瀬。館を下りておのが宿所へかへり道。執權職の妻ながら。手傘足下ものかるく。志のび出立の挑灯を。前にもたせて來りしが。泥の裏に落ありし印籠を。奴僕が見つけてひろひ上。かやうなものが落ありしとてさしいせば。淀瀬はこれを手にとりていぶかしみつゝ。懐紙をとりいだし泥をのこひ。挑灯にさし付てこれを見ればやとせし所に。彼浪人いそがはしく走りよりて。挑灯ばつたり打落せば。淀瀬が僕は仰天し。泥にすべりて後に倒。挑灯はひるがへりて。前の流れにまげりたる。水草の中へ落たりしが。雨になやみて水草の裏に。かくれ居たるあまたの螢。一度にばつと飛いだす。其光に。浪人。旅人。淀瀬等三人。たがひに顔を見あはせけるが。浪人は面に袖を打おほひて。此場を逃ゆかんとす。旅人はゆくさきに立ふさがりてとよめんとす。淀瀬は旅人を曲者とおもひたがへて捕へんとす。其ひまに浪人はつとすりぬけて逃去に。雨はなほ篠を束て降まさり。夜あらし颯とおろし來て。新樹の梢を吹ならし。流の水草も動揺して。怪いかな都が死骸の胸もとより。一羽の時鳥飛出て。二聲三聲鳴けるが。なにか空にのぼりて一團の陰火となり。はしりゆく浪人のあとをまたひて飛ゆきぬ。さて旅人も浪人のあとをまたひ。泥水を蹴散して韋駄天ばしりにおふてゆく。淀瀬は都が亡骸と館の塀の切穴を見つけて大におどろき。た

いちに館に立もどりて。志かぐの事ありと告たりけるに。館のうちにも侍宿の武士等。手燭
 を持てかけまはり。軍用金うせたりとて騒動す。玉兔之助はこれらの事を聞たまひて。都が非
 命に死したるを深く悲みたまひ。彼を殺せしも軍用金をうばひしも。察するどころ同人なるべ
 し。其盗人をおひ捕へ。八ッ裂にして都が怨の十が一ッをばらさすべしと。且かなしみ且怒り。
 よも遠くいはしるまじ。追人を出してはやく捕へ志むべし。都が口に小指をくひきりて含み居
 るよしなれば。小指のなき奴こそ其賊なれ。これを證に捕べしと。きびしく命じたまふにぞ。
 健なる侍。どるを四方にわかちて追せけるが。つひに其行方をもとめ得ざりしとなん

雙蝶記卷之二終

江戸 山東庵京傳編

雙蝶記一名霧籬物語卷之二

(六)陽炎とまきりに狂ふ牡丹の睡猫

月影个谷判官の執權職。山吹庄司雪森に三人の子あり。兄を餘字兵衛といひ。次を餘吾郎とい
 ひ。末の娘を小雪といふ。物領の餘字兵衛は。妾淀瀬が十九歳のとき産たる子にて。其後志ば
 らく子なかりしが。はるか過て本妻の夕波といふが。餘吾郎と小雪と二人を産ぬ。志かれども
 本妻妾どもにころさますぐなる者にて。平日なかむつましく。嫉の心は露ばかりもなかりけ
 り。本妻小雪を産たるときは。庄司は主君判官に志たがひて。信州苦形の軍にむかひ。其留主
 に産をまけるか。本妻産後のなやみつよく。死になんくせしどころへ庄司歸陣し。鎧をぬ
 ぐ間だになく。其儘にて臨終の枕もとにいたりけるが。此病中妾淀瀬心を盡して看病し。此と
 きもすでに枕もとにつきそひて泣居たるに。本妻くるしき息をつきて且夫にいひけるは。妾む
 なしくなりて後。後妻を他よりむかへたまひては。三人の子ども等がためあしかるべし。ねが
 はくは淀瀬どのをあらためて本妻となしたまはれかしといひて。また淀瀬にむかひ。餘五郎小

雪等を實の子のごとくにもひて。養育をたのむなり。志からは妾草葉の陰にても心を安くし。子ゆゑに迷ふ黒暗の。地獄の苦患をまぬかれなんといひおきて身まかりぬ。是にふりて日數たちてのち。庄司淀瀨を本妻にせばやといひければ。淀瀨はひたすらこれを辭退す。志かれども亡妻の遺言といひ。子ども等のためなればと。あながちにすゝめて遂に主君に願をいだし。あらためて淀瀨を本妻にぞまたりける。素淀瀨は志なほく正き女なれば。前妻の遺言をかたくまもり。實子の餘字兵衛よりもなほ。繼子の餘吾郎小雪二人の者を深くいつくしみ。朝夕撫按必をもちひて育けるが。物領の餘字兵衛いかなる所存にや。十五歳の時出家剃髪の望なりといふ書置を残して出奔し。行方まればなりぬ。此時餘吾郎は六歳小雪はいまだ二歳なり。其後小雪四歳の時乳母に抱かせ。庄司みづからつきそひて。甘繩の神事を見せに行。かへるさに驚にさらはれて行方まれば淀瀨はこれをきくとひとしく。心亂るゝばかりに歎悲み。前妻の位牌にむかひてもいひわけなしとおもひけれども。庄司みづから連去て。かゝる災にあひたる事なれば。誰を恨む人もなく。唯生死のわからざるを露ばかりのたのみにして。卜筮をおかせ神佛を祈。さまざまに心を盡し。近國の山々驚の栖べくおもふかぎり。残らずたづねもどめけれども。更に行方まれば。失たる日を命日にして佛事をいとなみ。菩提の種を植るのみなり。されども凡夫のあさましさはもしや神佛の擁護により。活ながらへ居るともやと。夫婦

朝夕の物語のはしにも此事をいひ出して。泣ざる日はなかりけり。此小雪は生つき美麗。玉のやうなる顔なりしが。高類に一ツの黒痣あり庄司が高類にも黒痣ありければ。これぞ父の譲の黒痣なりと。平日の口すさみにいひけるが。もし命に恙なくば。唯是のみ後の證據なりと。淀瀨か歎いふも理なり。かゝれば庄司三人の子を持たながら。物領は出奔し娘は失て生死まれば。唯家にある者は餘吾郎一人なり。是等の始終をくはしういへば事長く讀むにもわづらはしければ。其要を撮てあるすのみ。扱餘吾郎成長に志たがひて。淀瀨を實の母のごとくに敬ひまたひければ。淀瀨も不便いやまして。いつくしむと限なし〇かくて今年庄司は五十五歳にいたり。餘吾郎は二十二歳にぞいたりける。扱又庄司が父餘吾郎が爲には祖父なる淨閑居士。今年五十年の遠忌にあたるにつき。菩提のため紀州高野山へ石塔を建。常住金を納むべしと思ひ立。主君に願ひ餘吾郎を代參として。紀州へゆかしむべきに定まりけるが。餘吾郎いまだ若年なれば。物馴たる者を副つかはすべしとおもひ。家來南方十字兵衛。今年五十餘歳の老人にて。老實なる者なれば。これを守役とし。常住金二百兩。石塔料百兩。都合三百兩。別に路用を持しめ。已に行装と一のひければ。吉日をえらびて鎌倉を發足し。ほどなく京都に着て旅宿をもとめ。石工に命じて石塔を造らする間。まばらく當地に逗留して居たりけるが。此とき彼箕腹蟻右衛門も。主用にて上京し。旅宿に逗留の間餘吾郎に出あひ。たがひに旅宿のつれづれを問あひ。

あるひは二人連立ち名所古跡などをたづね。旅の憂を慰めけるが。これにつきて蟻右衛門が心中に悪計をおもひつきたる事。後にぞおもひまられける。尋常の寒梅も。折て軍持にのぼすれば。一段の清香人の心を感じしめ。民屋の衰柳も。移て宮苑にいれば。千尺の翠條。別に春風長かるべしといへるも宜哉。駕籠塵兵衛が娘小蝶は。手越の里に一歳住。其後都五條坂に。賣替られて。富士屋の吾妻といふ阿曾比となり。且には古をおくり。夕には新をむかへつ。寄てはかへるあだ浪の。枕さだめぬ憂身となる。原貧家に育し娘なれど。花柳の街に移植て。玉の筭綾羅の衣。十分に粧はせければ。自然の美麗に今一しほの色まして。嬌艶人をおどろかしめ。花魁娘子とぞなりにける。素聰明生なれば。糸竹の志らばは更なり。歌學繪かき花むすびのたぐいの艶雅たる業にいたるまで。よくこれをさとし。情のいろは殊更に深かりけり。かくて此五條坂に早くも五年の春秋を過して。今は十九才にぞいたりける。扱一日吾妻常よりもなほ美麗よそほひて。錦のくけ紐に金銀の鈴をつけたる繻を結たる手飼の猫を。きよらなる女童に抱せ。赤前垂の花車の女に。日傘をさしかけさせて。邯鄲の歩をうつしつ。絃歌の聲のいとなまめきたる街に練出けるが。留木の薰馥郁として。あたりの人を襲。歩むにまたがひて紅の裾のひるがへるさま。嬋娟たる牡丹花のうごき出たるかと疑はれぬ。かゝる折しも古綿帽子を頬かふりにして。針目がちなる布子を着。杖にすがりて貧けなる老女。吾妻があゆむ側

ちかく寄て。すれつもつれつ後前につきまよふさま。野らに年舊老猫の小蝶に狂ふごとくなり。花車の女これを見て。脣をひるがへしつゝいひけるは。年の始の破魔弓に。造つけたる尉と姥の。離別したるにかと思はるゝばかりなる姿にて。かく廣き道すぢを。こちの母にすれもつれ歩み給ふ妨する。臭ものゝ身まらず婆々よ。かたへに退てとくく行と。いとにくくいふを。老女は耳にもきゝ入ず。腰を打つゝ目も文に吾妻が顔を打まもり。さてもきゝしにまさりてうつくしき姿の君かな。卒爾なるとにはあれど。おん身にまみえ願たきとありて。汚穢我身をかへりみず。此曲中にわざ／＼來つる其いはれを。一通聞てたべといへば。花車の女はなほあやしみ。扱は君たちに近寄て。母の伯母のといつぱりをいふ物ねたりか。さなくは袖乞のたぐひならんぞとく去ずやと。聲高に睨つゝつきのくるを。吾妻は制して老女にむかひ。つひに見うけぬお年寄。妾に對して願とある其わけは。いかなる事とたづねつ。傍邊の編笠茶屋の床机に尻かけてやすらひければ。老女いはく。其わけとて別のとにも候はず。此婆々が月とも星ともおもひはべる兒子一人候が。山崎の油賣にて。挑賣して貧き暮をいたす者。日來實躰にてよくかせぎ。女などに心をうつす者ならねど。此曲中へ商にまゐりしついでに。おん身の揚屋入給ふを見て心迷ひ。親の口からまうしにくきとなれど。戀病にわづらふほどにおもひまさり候ゆゑ。愚なる奴とさま／＼にいひこらせど。いかなる宿世の因果にや。おもひきりはべら

ねば。かはひやこがれて死ぬならん。氣つかひすな情を商ふ君なれば。無解には聞なしたまふまじ。吾妻さまに此わけを告ぎこえ。歎きまうしてせめて盃なりと戴かせ。おもひきりしてやるべしと。いひ慰め候へば。やうく病もおこたりしゆる。道く油をうらせつ。此處まで伴ひまありしなり。ねがはくは一目あふて。詞をかけてたまはれといひつ。彼方をさし招き。見子こちへといひければ。出口の柳の木陰より。油擔を挑つ。油志みたる古布子。見るもわびしき姿なるが。擔をおろして母の背後につい居つ。はづかしげにさしうつふきて詞なし。母は見子をかへりみて。そちが切なる心底を。残らず語ておきかせまうせと。いはれてやうやう顔をあげ。かく貧き身もかへりみぬ僕が執着心。語もいとばづかしけれど。是一朝一夕の事ならず。去年の春ふとおん身を見そめてより。片時もこれを忘れがたく。人間の一生は秋の草に異ならず。もし个様の美人を得て。せめて一夜をわかすならば。死すとも恨なかるべしと。およびなき戀の海。深き思ひに堪かねて。いかばかりの金にて一夜をもとむべきと人につきて聞つるに。一夜の揚代銀百目なれど。酒食の價なにくれの費あれば。小判五兩ばかりの金なくてばもとむるとなりがたしといひしゆる。唯あきれて。とてもかなはぬ戀なりとあきらめ。拙き我身を恨つ。おもひどいまるべく思ひしかど。煩惱の犬打ども去ず。戀慕の絆きれどもはなれず。我身を焦す油の地獄。おのれを責るのみなれば。また思ひけるは。古より志ある者

は。事竟に成といふ詞もあれば。望を遂まじきにもあらずとおもひつき。出口の柳の糸より細。おさらば垣の露よりかるき利分のうちより。一日に三分五分の銀子をのけて積貯。今すぐ五兩の金とのひつれば。岩に花咲こちはずれど又人の語るを聞ば。吾妻どの引手あまたの名妓なれば。富貴の人には一應や二應では靡給ふとなしといひしゆる。況まづしき我身なれば。たとひ揚代とのふども。まみえてはたまはるまじと。思ふが病の種となり。人志れぬ我戀の關もりは。宵く毎に瘦ほそりて。ほどく命も危かりしを。母の情の詞にてやうやうおこたり。今日此處まではまうで來つ。戀の菜種の身の油。まめ木にかけたる志ぼり糟は見たまへといひつ。油擔の裏より五兩の金をい出して吾妻に見せ。たとひ親く身を沾すにいたらずとも。せめて一盃の酒なりと酌かはして。我此痴想をばらさしたまはれかしと。耻を志のびて語りけるが。金をつみたる紙に物かきたるを見れば。

山崎やすべり道ゆく油賣打こぼすまで泣涙かな
 といふ歌をかきつけたり。吾妻はこれを見ていと哀におもひ。目に涙をさしぐみつ。いたはしや妾ゆゑに。さばかり辛苦をいとはず病に臥たまふまでに深くおぼしたまはるとのうれしさよ。原妾が心貧福貴賤にかはらず。只趣を慕ふなれば。いかでかおん身の貧きをさらはんや。なほ物語たきとおほかれど。此處は街上のはしちかなり。妾か坐敷へおはせかしといへば。

傍邊にありける花車の女。これを聞て志のびあへず。袖乞めきたる此婆々や油賣のまづしき男をつれゆきたまふは。他の聞えもあしかるべしといひてどいむれども。吾妻は耳にも聞入らず。いざたまへといひて袿つぼをる裙さばき。二人女童を脇立に。三尊佛の御來迎。玉の筭ゆらゆらと。ゆらぐ光明駒下駄の。蓮歩をうつす八文字。親子二人は極樂に。すくひとらるゝこゝちにて。後につきそひ歩み去ぬ〇かくて油賣親子の者は富士屋がもとに去。青貝の坐敷と稱ずる一間にいたりて見るに。風流清雅にして且美麗なり。唯光耀て見る目もまばゆく。えならぬそら焼の熏室中にみちて。ひたすら鼻を襲へり。床柱。床縁。違棚の板。袋棚の戸のたぐひはさらなり。天井。欄間の板。明障子の腰板。屏風。歩障の縁。衣桁。簞笥のたぐひ。都青貝を鏤たり。二階の厨子。文案。文車。文臺のたぐひ。料紙硯匣。香道具。碁將碁双六の盤。嚴器鏡臺枕のたぐひ。皆青貝ならずといふとなし。おどなく雛妓女童等が持運酒飯の器を見るに。是等もすべて青貝を鏤たり。誠是仙窟に遊が如く。張文成が筆ならでは。書盡すべうもあらざとおもはれけり。まばしありて繪障子をさどひらき。衣のおどなひはらくとして。吾妻が衣服を着かえて出たる姿を見るに。袿も帯も青貝織といふ織物に。くれはあやはの手を盡さして。西湖の十景をこまやかに織せたり。さて油賣の男のそば近く寄て笑を帯。郎の計すでに成ぬる上は。もはやあん名をあかし玉はれかしといふ。油賣はいまだいらへもせざりけるに。

明障子をへだてたるかなたに人ありて。たかやかに打笑。さすがにかしこき君なり。はやくも曉給ふかな。今は何をかつゝむべき。いでおのれ賣油の正躰をあらはして見せ申さん。といひつゝ立出たるは乃是箕腹蟻右衛門にぞありける。さて蟻右衛門かなたにむかひ。かねてまゝしつけおきたる用意の品をこれへ携へ出よとよばりければ。かしこまり候といらへて。許多の歌妓幫間等。廣蓋のうへに黒羽二重に鹿子紋つけて。白ぐりの袖べりしたる羽織小袖。茶の下着。箔の帯。磨打たる切箔の疊紙。平塵地の一ツ印籠。阿保秋山が川原軍のさまかきたる扇。紫のおき頭巾。書院鑷子さへそえていたり大盡の身上の具をのこりなく載てさゝげ出。大勢立かりて油賣の男のむさげなる布子をぬがしめ。かの美麗なる衣服を著せかえければ。忽よき大盡の姿となり。上座になほりて脇息に身をよすれば。かの老女はえるか下坐に居かはりぬ。吾妻はなほ打笑つ。郎は實の油賣にはあるまじと推量せしに。果してたがはず。なぞてかゝる戯をまたまふぞといへば。蟻右衛門すゝみ出。是全戯にあらざ。其いはれはあのれ語りて聞すべし。此人は我またしき友にて。山崎餘吾郎といふ人なるが。此度所用有て上京し。おのれ前の日もなひて此曲中を見物に來りしに。此主おん身を見そめて。頻にまみえん事を望といへども。おん身はいかなる富翁嘉客にも。容易にはまみえたまはず。すでに頃日鮎尾賀堂左衛門とかいふ金持の武士の浪人。おん身を深く戀したひて。許多の黄金を費せども。一夜の

枕もゆるし給はざるよし。とても尋常にてはまみえ給ふまじとおもひ。おのれ媒の意にて。餘吾郎ぬしの誠心を見すべき此計をおもひつきぬ。唯かりそめの戯となおもひ給ひそといへば。餘吾郎も其詞の尾につきて。今蟻右衛門ぬしのいはれし所のごとく。少しもいつはりならず我姓を山咲といふを山崎にとりなして。おもひつきたる油賣。かくまで慕誠心を。露ばかりも受おさめたびぬかしといひければ。吾妻はいどうれしげにて。烟花のいやしき妾が身を。さばかりおぼし給はると。何をもてかこれに報はべるべき。妾これまで許多の客を接はべれど。或は酒を貪るあり。或は色に耽るあり。唯笑を買歡を求る事のみを知て。香を憐玉を惜の眞ある人にあはず。彼を見これを見るにつけても。郎が如き志誠の人は又得がたし。いかでか等閑におもひはべるべき。さるにても彼老女は何人ぞとたづねれば。餘五郎いはく。これも蟻右衛門ぬしのはからひにて。諸國の靈場を拜にめぐるよしの旅の老女を。けふ一日雇ひてきつるなりといひさして老女にむかひ。汝を勞して我望をどげたれば。骨折にこれを興るなりといひて。彼五兩の金を興へければ。老女は金をうけおさめてよろこび。やがて別を告て歸りけり。かくて歌妓書間等さまの藝を盡して酒をすしめ。吾妻もみづから琴をかきならして響應ければ。餘吾郎は遊仙の夢をなすこゝちして。魂九天の上に昇り。手の舞足の踏どころをまらさず。やうやく時うつりて夜にいたり。酒酣なるとき。吾妻餘五郎が手を携て閨房にもなひぬ○か

五四四

くて餘吾郎は此日を始として。此一條の春路にまよひ。守役の十字兵衛には。神社佛閣に詣名所舊跡を遊覽するといつはりて。日毎に此曲中に來て。吾妻にまみえけるが。吾妻も餘吾郎が美男なると。趣あるに心をかたふけて。水もらさじとぞちざりける。まかれども吾妻は餘吾郎を養父のめし出されし同家中の士なりとは露ばかりもまらず。餘吾郎も吾妻が素姓を志る事なし。去程に餘吾郎は。吾妻に深く志たしむにつきて。ものがたき十字兵衛がまへを志のぶを憂とにおもひ。一計を思ひつきて。十字兵衛にいひけるは。我石工がいふ所を聞に。石塔に用うべきよき石當地にあり合さるゆる。他國へいひつかはしてよき石をとりよするとなれば。今まばらくいとまいるべければ。汝は且前に紀の國に赴き。高野山に登て志かるべき墓地を見たり。宿坊に逗留して我到るを待べし。我は當地に残り。石塔の成就するを待て後よりゆくべしといひければ。十字兵衛は老實なる者なれば。これを偽の計とは露まらず。志からば左様に仕つるべし。随分石工をいそがし給ひて一日もはやく彼處へおん越有べしといひて旅裝束をどいのへ。紀の路をさして出去ぬ。かゝりて後は餘吾郎たればいかるものもなく。吾妻が許に連留して。旅宿にある日は稀なりけり。爰に又鮎尾賀堂左衛門といふ武士の浪人。此年の春より吾妻を深戀慕て。許多の黄金を費といへども。吾妻は殊に彼をきらひ。さまざまの事に托して接ざりければ。ます胸をこがし。手を盡し品をかへて相見ん事をもとむれども。一夜のそひ

臥は更なり。またしくものだにいはざりければ。堂左衛門は深くこれを恨けり。扱餘吾郎は此程まばらく吾妻が許に來らざれば。吾妻はこれを愁ひ。若心變にやなど思ひ屈し。鬱々としてたのしまず。病に托して打籠居たるに。一夜野ぶせりの乞食とおぼしきもの。古葛籠を背せひ。富士屋の奥庭より吾妻が闌に志のび入。獨臥居たる吾妻を捕へて。手拭を口にはませ。葛籠の裏におし入て。これをおひ。舊のところより逃れ出。飛ぶがごとくにはしり去。大なる川のほとりにいたりけるに。此に一艘の船を繫て待人あり。彼野ぶせりは此に葛籠をおろして。裏より吾妻を引出し。口にはませたる手拭をとり捨て。吾妻を船中に投入たり。吾妻はきえぐとなりて人ごちもなかりけるが。やゝありて目をひらき。うちわなゝきつゝ月のひかりにつきて四邊をかへりみるに。此川は渺々として宇治川とも思しき大河なり。此船にある人は則是堂左衛門なれば。吾妻は唯あきれたるばかりなり。まかるに堂左衛門は野ぶせりを船に乗しめて。且褒美の金をあたへ。船を遙に漕いださしむ。吾妻は船中に打伏て泣居さま。夕立の雨に蓮の花をそこなひ。木枯の風に玉の枝を折けるにかどうたがはる。堂左衛門は怒れる面色にて船中に座し。吾妻を嘗ていはく。汝蟹にあらざば。我いふ事をよく聞。我汝がために許多の黄金を費といへども。我を頼人のごとくいみきらひてあはざるはそもいかなる理ぞ。金だにもちうれば何者にもあれ。まみゆるが阿曾比のならひならずや。我汝にからき目を見せて。十が

一ツ憤をばらさめと思ひて。かく奪出しぬといへば。野ぶせりも嘗て口をといめず。此船を遙むかふの芦深きところに漕入て。堂左衛門は堤の上に飛のぼり。みづから携たる吸筒をとり出し。まくり手志て船中を見おろし。其女を此に引あげて我酒の伽させよといへば。野ぶせりはこゝろえ候といひつゝ。吾妻を引立て堤にのぼらんとするに。吾妻は船梁にまかど抱つきてあへて身をうごかさず。堂左衛門はこれを見て。まぶと女めかなといひつゝ。手酌に數盃をかたふけて又船中にくだり來つ。みづから吾妻が手をとりて引たてんとするに。吾妻はた聲をかぎり泣きさけば。堂左衛門はます怒り。やをれ汝我に打れん事をもとむるかといひつゝ。襟首をとらへて引倒しければ。櫓櫓枝くだけてばらりと落。鬢されて翠の黒髪みだれけるが。堂左衛門拳をにぎりて打んとするを。吾妻ふりはなちて桅に立上り。いとすさまじく漲りおつる水中に飛いらんとせしを。野ぶせりの乞食あはてふためきて抱きとめぬ。堂左衛門は胡盧。汝身を投る躰をなして我を嚇さんとするや。たどへ汝死したりとも我汝を人志れず奪出させたれば。我に於て何の難儀かあらん。さりながら命を失はずもやくなき事なり。汝もし泣やまば放て歸らしむべし。泣やまばいつ迄も歸すまじといふにぞ。吾妻はやうく泣やみければ。堂左衛門は野ぶせりに船を漕しめて。舊の處に歸り。吾妻を岸の上に投上て。船はいづくともなく漕去ぬ。吾妻は毒蛇の口をまぬかれたりといへども。此ところはすべて草茫

茫と生（なま）げり。露（つゆ）濃（こ）なる野原（のぼら）にて。方角（ほうかく）だに志（し）れず。殊（こと）更（さら）夜（よ）中（ちゆう）なればいづくを心（こゝろ）あてに走（は）るべ
 うもあらず。恰（あた）り足（あ）りなき蟹（かに）のごとくなれば。すべきやうなく。只（ただ）聲（こゑ）をはなちて泣（な）げるとき。側（そば）づ
 かひの女（おんな）童（どう）が聲（こゑ）して。こちの君（きみ）何（なに）にかおそはれ給（たま）ふ目を醒（さ）し給（たま）へ。といふに心（こゝろ）つきて睡（ね）を醒（さ）せ
 ば。これみな南（なん）柯（か）の夢（ゆめ）なりけり。吾（わが）妻（つま）はいとたゆげに息（いき）をつき。くるしき夢（ゆめ）を見（み）し事（こと）よといひ
 て。身（み）上（う）の汗（あせ）をぬぐはせ居（ゐ）たる折（を）しも。花（はな）車（くるま）の女（おんな）來（き）りて吾（わが）妻（つま）にむかひ。堂（どう）左（さ）衛（ゑ）門（もん）ぬし御（おん）身（み）を贖（あがな）ひ
 いだし給（たま）はんと議（ぎ）したまひて。身（み）の價（あたい）を千（せん）兩（りやう）にきはめ。此（この）庭（てい）の冬（ふゆ）牡丹（ぼたん）の花（はな）の散（ちり）比（ひ）。凡（およ）そ廿（にじゅう）日（ひ）を期（かぎ）
 に金（かね）を渡（わた）して。曲（まが）中（ちゆう）を出（で）し給（たま）はんと約（やく）したまひぬ。おん身（み）は彼（かの）主（ぬし）をさらひ給（たま）ふよし。そはあし
 き心（こゝろ）ぞかし。彼（かの）主（ぬし）のごとく金（かね）多（おほ）く持（も）たる人（ひと）におもはれ給（たま）ふは。おん身（み）のよき幸（さい）ならずや。身（み）受（う）
 の事（こと）もよろこばしく思（おも）ひたまへ。といひてそいろ笑（わら）す。吾（わが）妻（つま）はこれに聞（き）とひとしく胸（むね）つとふさ
 がりて志（し）ばしいらへもせざりけり。○遠（とほ）きおもんはかりなき時（とき）は近（ちか）き愁（うれ）ひ有（あ）るとは。今（いま）餘（あま）吾（わが）郎（らう）が身（み）
 の上（う）なり。餘（あま）吾（わが）郎（らう）はじめのほどは。路（ち）用（よう）の金（かね）のうちを遊（あそ）興（きやう）につかひけるが。後（あと）には吾（わが）妻（つま）を揚（あ）げ
 めにして奢（おご）りをきはめけるゆゑ。纒（むす）の間に彼（かの）常（じやう）住（ぢゆう）金（かね）の二（に）百（ひゃく）兩（りやう）石（せき）塔（たう）料（りやう）の百（ひゃく）兩（りやう）まで残（のこ）らずつかひ盡（つく）し
 けるにぞ。いかにすべきと思（おも）へど更（さら）に術（じゆつ）計（けい）もなれば。此（この）ほどは吾（わが）妻（つま）が許（もと）にもゆかず。旅（り）宿（しゆく）に
 籠（こも）居（り）てひたすら心（こゝろ）をくるしめけり。吾（わが）妻（つま）が方（かた）よりは日（ひ）毎（まい）に文（ふみ）をおくりけるが。一（いち）日（にち）の文（ふみ）に堂（どう）左（さ）
 衛（ゑ）門（もん）妾（めかけ）を贖（あがな）出（だ）さんといふとにつきて。急（いそ）ぎまみへたまよしをいひ越（こ）ければ。餘（あま）吾（わが）郎（らう）はますま

す心をくるしめ。其（その）夜（よ）かしてへゆきて吾（わが）妻（つま）にまみへけるに。吾（わが）妻（つま）はひたすら身（み）受（う）の事（こと）を歎（なげ）き。
 よき思（し）案（あん）して給（たま）はれかしといひつゝ泣（な）のみなり。餘（あま）吾（わが）郎（らう）今（いま）更（さら）常（じやう）住（ぢゆう）金（かね）石（せき）塔（たう）料（りやう）のななくてかなはざる
 金（かね）をもちひ盡（つく）せしとは。さすがにいひがたく。先（まづ）當（どう）座（ざ）の心（こゝろ）をなぐさめて。後（あと）に良（りやう）計（けい）をほどこす
 に志（し）かじと思（おも）ひ。志（し）からば我（わが）急（いそ）に本（ほん）國（こく）へいひつかはして金（かね）をとりよせ。堂（どう）左（さ）衛（ゑ）門（もん）より前（まへ）に贖（あがな）い
 たすべしといへば吾（わが）妻（つま）はこれに聞（き）てすこしく心（こゝろ）を安（やす）んじ。酒（さけ）酌（しやく）かはしなど志（し）て齣（う）つ結（むす）をなぐさめ
 けるが。餘（あま）吾（わが）郎（らう）は元（もと）來（らい）酒（さけ）量（りやう）あさけれども。志（し）ばしも愁（うれ）ひを忘（わす）れんために酒（さけ）を飲（のみ）すとして。此（この）夜（よ）も
 爰（こゝ）に宿（しゆく）し翌（あした）日（にち）も歸（かへ）らず。又（また）三（さん）四（し）日（にち）連（れん）留（りゆう）し。四（よ）日（にち）めの日（にち）彼（かの）青（せい）貝（がい）の座（ざ）敷（敷）のはしちかく出（で）て。庭（てい）の木
 草（くさ）をながめつゝ。二（に）人（にん）志（し）めやかに酒（さけ）を酌（しやく）かはしけるが。吾（わが）妻（つま）手（て）匣（げい）をさぐりて。錦（にしき）の手（て）帳（ちやう）につゝ
 みたる横（よこ）笛（ふえ）を取出（と）し。これは妾（めかけ）が父（ちち）の秘（ひ）藏（ざう）せし濡（ぬ）髪（かみ）とまうす笛（ふえ）なり。おん身（み）過（す）つる夜（よ）の物（もの）語（ご）に。
 笛（ふえ）を好（す）給（たま）ふよしのたまひしが。さだめて堪（か）能（のう）におはすらめ。妾（めかけ）も片（かた）端（たん）をまなびぬれど。憂（うれ）節（せつ）滋（し）
 身（み）にしはべれば静（しづ）心（こゝろ）なくすておきぬ。ぬがはくはをしへたまはれといふ。餘（あま）吾（わが）郎（らう）いはく。あ
 れども拙（つた）なれど。所（しよ）望（ぼう）とあれば黙（もく）止（し）がたしといひつゝ。并（へい）笛（ふえ）といひて一（いち）つゝの笛（ふえ）を二（に）人（にん）ならび
 居（ゐ）て其（その）手（て）ををしへ。餘（あま）吾（わが）郎（らう）指（ゆび）を擲（な）げば。吾（わが）妻（つま）これに吹（ふ）けぬ。此（この）ときには冬（ふゆ）の始（はじめ）小（せう）春（しゆん）といふ時（とき）節（せつ）にて。
 殊（こと）に暖（あたた）氣（き）なりしが。此（この）庭（てい）の花（はな）壇（だん）に植（う）たる冬（ふゆ）牡（ぼ）丹（たん）の花（はな）。霜（しも）雪（せつ）の欺（あざむ）きをそれず咲（さ）みだれて。國（こく）色（しき）天（てん）
 香（かう）春（しゆん）の花（はな）にもをさ〜おとらず。造（ぞう）化（くわ）の不（ふ）思（し）議（ぎ）をあらはせり。殊（こと）に奇（めづ）らしきは一（いち）つゝの朶（た）に二（に）輪（りん）の花（はな）

並咲て。一輪は赤く一輪は白し。これいはゆる雙頭の牡丹なり。時に二の殘蝶花香をまたひ翻々としてたはふれぬ。此二ツの蝶一ツは白一ツは薄縹の色なり。是もまた奇なりといふべし。まかるに吾妻が手飼の猫花の下に睡居たるが。忽眼を醒して二ツの蝶を目がけ。縹につけたる鈴をからく〜と鳴しつゝ。飛上り駈めぐりて。餘念もなげに狂ひけり。かゝる折しも庭さきの柴折戸の外面に。白木の手束弓に短冊をあまたつけて持たる歌古の女。超起。耳をかたふけて笛の音色に聞とれたる體なり。こなたの二人はなほ笛を吹すまじ。其聲咽々悠々として人をして腸を斷しむ。猫はます〜と蝶に狂ひ。つひに薄縹の蝶をとりて喰殺しぬ。時に北風はげしく吹て牡丹を揺動しけるが。忽赤き方の花はら〜と散て白き方は恙なし。餘吾郎これを見て笛の手をどいめていはく。あな不思議や。牡丹花下の睡猫は。其心蝶にあり。我は心牡丹にあり。一枝に二輪。花咲て。赤白二色にわかる事。豈天工の私ならんや。昔唐の玄宗皇帝。沈香亭前に牡丹を植て。楊貴妃と共に愛し給ふ。是すなほち双頭の牡丹なり。帝これを見そなはして花木の妖なりと賞じ給ひ。楊國忠にたまふと聞。牡丹は花の王といふ。一枝に兩花の王有事。今すでに南朝北朝とわかれ給ひ。一天下に二人の王のおはしますに異ならず。然るに南方の火に屬す紅牡丹。水に屬す北風のために散失しは。北朝の聖運強くまじ〜。足利殿の徳風草木をなびかして。南朝味方のともがらの衰花を散し給ふ前表ならん。前の年信州管形の城にて亡

びたる。相摸次郎時行。并に其砌打死したる。大佛九郎貞直等が殘黨餘類。南朝の天威を假て。足利殿を亡んとはかるよし。緋威の鎧草に身をかためたる冬牡丹。霜の劍は志のぐとも。北朝の烈風をいかでか防方あらん。今見しごとく紅牡丹の散たるは平家に屬し。時行が殘黨滅亡に疑ひなし。とまれかくまれ足利方にとりては吉祥なりと。心の愁もうち忘て。いとよろこばしげにいひけるが。吾妻は涙さしぐみて。妾が實の名は小蝶といふ。二ツの蝶は夫婦も同然。郎と並て百歳を花に宿て過さめと。心の願も遂られず。女蝶の方は飼猫にとられて非命に死すと。いふ。我身のうへの不祥ならん。昨夜もまうせしごとく。堂左衛門廿日を限て根引せんといふよしなれば。妾は此牡丹の花の散時節の。はやくいたらんを愁るなり。いよ、彼が方へ根引の相談きはまるるときは。活存る心にあらず。かねて牽牛織女の絶ね契を羨て。比翼連理と誓ひし事も。其時は胡蝶の夢とおぼしめせといひさして。餘吾郎が膝に顔をおしあてゝ。聲もをしまず泣ければ。餘吾郎は背を撫捺りていたはりぬ。扱前程より外の方に立たる歌占の女は。花壇の方には目もやらで。頭をかたふけ。今聞し笛の音は尋常ならず。女のはける足駄にてつくれる笛には。秋の鹿かならずよると聞。夫は鹿笛これも美人の吹すさむ笛の音いろのいぶかしさよ。とうちひとりごちてぞ居たりける。かゝるをりしも餘吾郎が奴僕。汗もしとゝに息もつぎあへず。庭づたひにいそがはしく來りければ。歌占の女は。庭木のまげりたる裏にかくれ入

ぬ。かの僕は庭上に 眺き。餘吾郎にむかひていはく。御旅宿に大變事出來候ゆゑ。おん迎に
 まゐり候。とくくおん歸り候へかしといへば。餘吾郎はいぶかしみ。そはいかなる變事ぞと
 たづねれば。僕ははく。此にてはまうしがたき事にて候。いざとくく急がすにぞ。餘吾郎
 はなほ心ならず。いそがはしく身支度して僕と共に歸けり。あとには吾妻が何事やと。胸をい
 たむる物案じ。吐息して居たりしが。彼歌占の女は木蔭を出て又柴折戸のもとに立寄。聲たか
 やかにいひけるは。夫歌は天地ひらけし始より。陰陽の二神天のちまたにゆきあひの。小夜の
 手枕むすびさだめし世をまなびて。今にたえざる妙道なり。夫婦の相生縁むすび。待人の來る
 來ざる。伊勢の濱萩名をかえて。浪花の事のよしあしも。くはしく辨じてまゐらすべし。占と
 はせ給へや。歌占とはせ給へやといひければ。吾妻はこれを聞。よき折に歌占。爰に呼入とふ
 べしと。掌を打ならして女童をよび。かうくせよといひつくれば。いらへの聲も長露地の飛
 石づたひに彼方にゆき。かの女をともなひければ。吾妻は出て向合。歌占をひきまうすべしと
 いへば。安き事心得はべり。一番に手にあたりたらん短冊の歌を讀候へ。くはしく考てまゐら
 すべしと。いひつゝ弓をさしいだせば。吾妻は心に神を念じ。をしへのごとく短冊をとりあげ
 みれば

鶯のかひこのうちの時鳥志やが父に似て志やが父に似ず

といふ歌なり。女志ばらく考ていはく。おん身は幼くて實の父をうしなひ。養父に育られ給ふ
 ならずやといへば。吾妻いはく。誠によくあひぬ。猶くはしく判じてたび候へといふ女又いは
 く。鶯の子は子なりけり時鳥の。鳴音かなしき宿殃にて。度々難義はあるべけれど鶯にあらど
 いふ字音あり。あうは逢の訓に近く。又來る春の幸に逢といふ占なり。たのもしくおぼし候へ
 といふにぞ。吾妻は少し愁をばふき。あなうれしや苦しかるまじく候かといひて喜びぬ。かく
 て彼女吾妻がかたはらにあきたる笛を見て目をはなたず。卒爾ながらといひつゝ乞とりてうち
 ながめ。これは濡髪といふ笛にはあらずやといへば。吾妻はいぶかり。いかにしてこれを見知
 り給ふやとたづねるに女いはく。我いかでか是を見たがふべき。おん身は伊勢の國の樂人。二
 見太夫是次といひし人の娘なるべし。かくいふ我はおん身の姉なるは。其證を見すべしとて。
 懷より笛の管を取いだして見せけるに。濡髪といふ金字あり。こなたの笛をおさめ見るに。間
 に髪を不容。符を合せたるごとき箱なれば。吾妻は且おどろき且よろこび。さては姉うへにて
 あはしけるか。かねて母御のものがたりに。姉うへありとは聞しかど。おん身と妾とわづかに
 年三つちがひし兄弟にて。幼ときわかれくになりたれば。少もおん顔をおぼへ侍らず。今日
 はからずも此笛が證となりてめぐり逢しは。父うへの導給ふにうたがひなし。さりながら愧き
 此姿と泣くといへば。姉は涙をおしかくし。いなく少も耻べきとにあらず。養父の急難をす

くふために身を賣しといふ事は。風のたよりに聞しかど。いづくも所もさだかならねば。なつかしくはおもひながら。尋ねべき便もなかりつ。まづはやく聞たきは母人のおんと。恙なくおはすや否といへば。養父も母御もおもひかけなく今は御出世あそばしぬ。夫につきては物語るべき事さまなくあり。爰は人目も端近なれば。まづこなたへといぎなひて。奥の一間に入にけり。時に箕腹蟻右衛門。沙土七といふ僕をつれて。樓上をくだり。此所に出來て四邊を見まはし。聲をひそめていひけるは。此も端近なれども。あたりになきこそ幸なれ。我汝が心底を見どいけしゆゑ。密事を語て聞すぞかし。我かねて隠謀あるにより。執權職山咲庄司に何かな罪をおはせてうしなばんと思ふ折節。餘吾郎が上京を幸ひ。彼をそゝのかして此曲中に誘放埒者にせばやと計しが。彼は原聰明て。思慮の淺からぬ者なれば計もむなしからめと思ひの外吾妻が艶色に迷て心を亂し。許多の黄金を費し。父の代參して高野山に納むる金までも残なくもちひ盡せし様子なれば。當分鎌倉に歸る事能ふべからず。これによりて我且彼よりさきに鎌倉に歸り。彼が在京の中の放埒をくはしく主君にきこえあけて讒言をもちひなば。おもくは切腹かろくてあほう拂ひは必定なり。まかるときは其罪を父庄司にもおよぼさしめて。親子ともにうしなふべく思ふなり。我宿望をどげなば。汝にも祿あまた與へて。よき武士に取立得さすべし。喜ばしからずや。主用も已にとゝのひ。今夜が曲中の餘波なれば。阿曾比をも呼來

りて。汝もどもに一盃をかたふけ前祝せよといひければ。沙土七は小踊してよろこび。勝手の方へ走り去ぬ。蟻右衛門はたのしげに。臂枕して寐そべり。膝の頭を打て拍手をとり。月にはつらき小倉山其名はかくれざりけり。曲舞々の音頭を諷つ。寛々として居たる折しも。旅装束志たる武士庭づたひに來るをみれば。是乃梅个谷郡領の家臣袴田紺九郎なり。蟻右衛門はかくと見るよりいそがはしく身を起して立向。氣づかばしや紺九郎主。何等の事ありて上京せられしぞといへば。紺九郎は息もつぎあへず。火急の事を告んため。夜を日につぎて上京し。和主の旅宿をたづねつるに。此所におはすと聞てこれまで來れり。爰は端近にて密事を語りがたし。まかるべき所に案内したまへ。とくくといそがすれば。蟻右衛門は益々氣づかひ。おくまりたる小坐敷に連去て。はやく様子を聞したまへといふ。紺九郎聲をひそめていはく。和主と我どかねて心を合せ。蛇个谷の老女の味方につき。且月影个谷と梅个谷の兩家を亡し。其勢に乗じて蟄懷の旗を飄し。南朝の天威を假奉りて北朝をかたふけ。平家再興の時を得て。我輩も一國の主となり。歡樂をきはむべしと企たる隠謀の密書を。山咲庄司に奪とられて隠謀あらはれ。庄司君命をうけ。上京して和主を捕へ鎌倉にひくどて。旅の用意をするを聞。こはいかにすべきと驚く間もなく。我主人にも告たるにや。我宿所に捕人をむけられしゆゑ。危き所を斬抜。辛うじて逃のぼりぬ。和主もとくく逃支度し給へといへば。蟻右衛門は忽面

色青草の色に變じ。心あはてゝものだにいはざりしが。まばしありていふやう。隠謀露顯のうへは片時も當地に足をどいめ難し。一旦兩人わかれゝに身を隠て時節をうかひふにまかじ。再會の所はかやうゝと耳につきていひければ。紺九郎は打點頭て出去ぬ。蟻右衛門は沙土七を呼出して有増を語聞せ。汝もまばらく身をかくせといひて持合せたる金を路用に與へ主従わかれておもひゝに出去ぬ。かくて時刻もやゝつりて此日も已に暮けるが。烟花のならばしどて晝よりもなほ賑しく。二階坐敷奥坐敷。間毎ゝに酒宴を設。或は彈或は諷。笑ふあれば耳語あり。おのがさまゝ興じけるが。唯青貝の坐敷のみは人けもなく。灯火もたてざりけり。かくて初夜過る比庭さきの萩垣をおし破て。まのび入たる白髪の老女。椽に上りてひしゝと歩ゆき。闇にも光る鼻の。眼をくばる廣坐敷の違棚に載ありし。吾妻が手箱に探りあたりて。彼笛を奪取。懷に押入て退き出んとしたる折しも。吾妻はみづから手燭をとり。姉を導て此どころに出來り。老女を見つけてあやしみつゝ。手燭の光りに顔を見て。や。そなたはいつぞや餘吾郎君に雇はれて來つる婆々ならずや。といへど老女は見むきもせず。ものをもいはず去んとするを。歌占の。女弓をもて押戻せば。老女はこれをふり拂ひて。又踏出すを歌占は。弓を斜に取なほして。やらじとさゝゆる即坐の柩。まばらく挑みあらそひぬ。時に怪哉老女が懷にかくしたる笛。おのづから音を發しければ。吾妻は驚き。さてこそ曲者其懷こそあやしけれ。

といひつゝ手燭をさしつゝれば。老女は手ばやく打落す。二人は探る。暗まされに。行方もまれずなりにけり
 是乃鎌倉。蛇ヶ谷の老女なり。味方を招き軍用金を集るため。諸國の靈場をめぐる旅の女に身を扮し。まばらく當地に足をどいめしが。此夜笛を奪ひとりて又他國に赴きけるとな

(七)木枯の果はありけり記念の竹刀

扱も其時餘吾郎は僕のみかひ心ならざれば。道を急ぎて旅宿に歸見てけるに。一昨日紀の國より歸りしといふ南方十字兵衛腹十文字に搔切て朱に染りて伏居たり。餘吾郎はこれを見るより。こはそもいかにどあはてまどひ。抱き起して見るに。誠に見事なる自殺にて。已に息絶身上は氷の如くに冷かたまりければ。唯あきれて物だにいはず。良ありてやうゝ心をまづめ。こは何ゆゑにかくなりしやといふかり。傍邊をみれば自筆の書置あり。いそがはしくひらき見るに其文にいばく

君僕を當地に残しおかれ。先だちて紀州高野山に赴せ給ひ。僕は御石塔成就の日を待て後より參べしと命じおかれ候處。御留主のうち。旅宿のつれづれに。偶五條坂の遊君に志

たしむ候て。勿^{もつ}躰^{たい}なくも御^{おん}先祖^{せんぞ}御^{おん}追^お善^{ぜん}の爲^{ため}に御^{おん}携^{たづな}あそばされ。僕^{わが}に預^{あづか}おかせられたる常^{じょう}住^{じゆう}金^{かね}をつかひ捨^{すて}。今^{いま}に至^{いた}りて先^{せん}非^びを悔^{くい}自^じ殺^{ころ}仕^し候^{こう}。やうく残^{ざん}金^{きん}百^{ひゃく}五十^ご兩^{りやう}御^{おん}座^ざ候^{こう}。此^{こゝ}金^{かね}子^こを石^{せき}塔^{たう}料^{りやう}に遊^{あそ}ばされ。乍^は憚^{かり}御^{おん}父^{ちち}君^{きみ}へよろしくきこえあげさせられ。僕^{わが}が死^し骸^{がい}御^{おん}かた付^つ被^ひ下^{くだ}候^{こう}は。生^{なま}世^よ難^{がた}有^あ儀^ぎに奉^{ほう}存^{ぞん}候^{こう}。恐^{おそ}惶^う頓^{とん}首^{しゆ}。

永和元年十月某日

南方十字兵衛

餘吾郎君

どかきたり。餘吾郎これを讀^よ終^{しま}て頻^{しばしば}に涙^{なみだ}を落^おし。扱^はは我^{わが}放^{はな}埒^ちに金^{かね}子^こを殘^{のこ}らずつかひ捨^{すて}たる事^{こと}を知^しり。我^{わが}罪^{つみ}をあのれが身^みにおひて切^{せつ}腹^{はら}し。のちくまでも馬^{うま}鹿^か者^{もの}不^ふ忠^{ちゆう}者^{もの}といはれんをいとはず。我^{わが}をかこひて死^ししたる忠^{ちゆう}志^し。たどへいふべきものだになし。戰^{いくさ}場^ばの打^{うち}死^じも。後^{あと}代^{だい}に美^び名^{めい}を殘^{のこ}さめと思^{おも}へばこそ命^{いのち}もをしまされ。汚^{よめい}名^{めい}をいとはず忠^{ちゆう}死^じせし者^{もの}は古^こ今^{いま}に稀^{まれ}なり。不^ふ忠^{ちゆう}者^{もの}となりて死^ししたる心^{こゝろ}底^{てい}をはかり思^{おも}へば。腸^{はらわた}もちぎるゝこゝちすなり。今^{いま}果^は思^{おも}ひあはすれば。前^{まへ}程^{ほど}富^{とみ}士^し屋^やの庭^{にわ}の胡^こ蝶^{てつ}のありさま不^ふ祥^{しやう}なり。歌^{うた}占^{うらな}の歌^{うた}に

北^{きた}は黄^きに南^{みなみ}は青^{あお}く東^{ひがし}白^{しろ}西^{にし}くれなひにそめいろの山

といひて南方^{なんぽう}は青^{あお}きにかたどる。此^{こゝ}をもつて考^{かんが}れば。淺^{あさ}黄^ぎ色^{いろ}の蝶^{てつ}猫^{ねこ}にかまれたるは。此^{こゝ}南方^{なんぽう}十字^{じゆうじ}兵^{へい}衛^ゑが非^ひ命^{めい}に死^しすべき前^{まへ}表^{ひょう}にてありしものを。唯^{ただ}冬^{ふゆ}の蝶^{てつ}のめづらしとのみ思^{おも}ひしは凡^{ぼん}慮^りの拙^{つた}

き所^{ところ}なり。彼^{かれ}を思^{おも}ひ是^{こゝ}をおもふに。我^{わが}傾^{けい}國^{こく}の色^{いろ}に迷^{まよ}ひ。祖^そ父^ふ追^お福^{ふく}の金^{かね}を失^{うしな}ふのみならず。あたら忠^{ちゆう}臣^{しん}を殺^{ころ}せし事^{こと}。不^ふ孝^{こう}といひ不^ふ仁^{じん}といひ。我^{わが}身^みの罪^{つみ}の重^{おも}き事^{こと}はかり知^しべうもあらず。今後^{こんご}悔^{くわい}すれども更^{さら}にかひなしといひつゝ。むなしき骸^{から}に取^とつきて。悲^{かな}歎^{たん}の涙^{なみだ}にむせかへり。生^{なま}る人^{ひと}にものいふ如^{ごと}く。嗚^な呼^こ面^{めん}目^{もく}もなき我^{わが}放^{はな}埒^ちゆるしてくれよ。十字^{じゆうじ}兵^{へい}衛^ゑ。こゝろざしは過^{くわ}分^{ぶん}なれど。汝^{なんぢ}になき罪^{つみ}をおはせ。いかでかながらへ居^ゐらるべき我^{わが}も今^{いま}自^じ殺^{ころ}して汝^{なんぢ}か死^し路^ぢを志^したひ。主^ま従^{じゆう}もに死^し出^で三^{さん}途^とをともしなひ。又^{また}の世^よは汝^{なんぢ}が臣^{しん}と生^{なま}れて。此^{こゝ}恩^{おん}を報^はべしといひて。書^か置^おにそえたる百^{ひゃく}五十^ご兩^{りやう}の金^{かね}をとりわけ。さるにても此^{こゝ}金^{かね}はいかにしてとゝのへ。石^{せき}塔^{たう}料^{りやう}に殘^{のこ}しおきくればやと此^{こゝ}不^ふ審^{しん}はれず。なほ四^よ邊^{へん}をかへり見るに。十^{じゆう}字^じ兵^{へい}衛^ゑが常^{じょう}に身^みをはなさるる刀^{かたな}に。乍^は憚^{かり}此^{こゝ}刀^{かたな}は餘^{あま}吾^{わが}郎^{らう}君^{きみ}へ記^か念^{ねん}に差^さ上^{じやう}奉^{ほう}り候^{こう}どかきたる紙^{かみ}札^{ふだ}をつけおきぬ。餘^{あま}吾^{わが}郎^{らう}これを見て。誠^{まこと}に是^{こゝ}は前^{まへ}年^{ねん}相^{さう}模^も次^じ郎^{らう}時^じ行^{ぎやう}信^{しん}州^{しゅう}宮^{みや}形^{かた}にて亡^なびたる刻^{とき}み。此^{こゝ}十^{じゆう}字^じ兵^{へい}衛^ゑ日^{にち}月^{げつ}のおん旗^{はた}を奪^{うば}て我^{わが}君^{きみ}判^{はん}官^{くわん}に差^さ上^{じやう}たる拔^は群^{ぐん}の功^{こう}によりて。我^{わが}君^{きみ}より賜^{たま}はる朝^{あさ}烏^{からす}といふ名^な劍^{けん}にて。陪^{はい}臣^{しん}の身^みに稀^{まれ}なる譽^ほなりとて。當^{あた}時^{とき}羨^{せん}者^{もの}おほかりしと聞^きく。我^{わが}は其^{その}時^{とき}幼^{よう}年^{ねん}にて。思^{おも}へば夢^{ゆめ}の一^{ひと}昔^{せき}。幸^{さい}哉^{やい}我^{わが}今^{いま}此^{こゝ}刀^{かたな}にて切^{せつ}腹^{はら}せば。主^ま君^{きみ}のおん手^て打^{うち}になる同^{どう}然^{ぜん}にて。聊^{いさ}かかつて費^あすかともなるべしと心^{こゝろ}を決^けし。兩^{りやう}肌^{はだ}をおし脱^だて。彼^{かれ}刀^{かたな}を抜^は放^{はな}しけるに。これ眞^{まこと}の刀^{かたな}にあらず。竹^{たけ}にて造^{つく}りたる刀^{かたな}にて。十^{じゆう}字^じ兵^{へい}衛^ゑが自^じ筆^{ひつ}の文字^{もじ}あり。これを讀^よに。

拙者此度の切腹犬死に相成不申様
御短氣御慎遊され可被下候

どかきつけたり。扱は此刀の身を賣て百五十兩の金と一のへくれたるに疑なし。此竹刀のかきつけといひ。かくまで深く我身の事を思ひくれば心底の過分さよ。といひて又死骸にとりつき泣けるが。いかに思ひかへしても活ては居られずとひとりごち。再我差料の刀を抜て。ほどく腹につきたてんとしたる折しも。やればやまり給ふなど聲をかけて次の間より走り出。餘吾郎が手に取つきてとめたるは。庄司が僕路平といひて。此度鎌倉より飛脚に來し者なり。餘吾郎は手をとめ。汝は何用にて上京せしぞと尋るに。路平は手をつき頭をさげ。恭いひけるは。拙者は昨日京着仕候。おん母君連夜おん夢見あしきゆゑに。君の御旅中を殊の外氣つかひ給ひて拙者に命ぜられ。御安否をどひ奉らん爲飛脚に參り候なり。君只今御自殺遊され候ては。十字兵衛は犬死になり候。彼御短氣をとめ犬死にならざる様にと。其竹刀に書殘せしは此事に候へば。彼が忠死をおん憐み候は。おん身を全うあそばされ。よき時節をもつて十字兵衛がおん身にかはりて相果し汚名をすゝぎ。南方の家を恙なく相續仕る様に。よく御賢慮をめぐらされくされかし。昨夜十字兵衛密に拙者を近づけて申せしは。其方上京せしこそ幸なれ。おん供の若黨奴僕おほけれども。口さがなければ我心腹をあかしがたし。其方は新參な

れども見處あれば。我思ふ處を一通りいひ置あひだ。我自殺の後餘吾郎君もし面目なきなどおぼしめして。卒爾のおんふるまひもあらば。我になりかはり此理をきこえあげてといめ奉れといひ殘し候子細を。今十字兵衛になりかはりて。具にきこえあげ候べければ。十字兵衛が直に申上る事とおぼしめされて。一通りおん聞くだされ。おん自殺をおんどいまりくだされかし。扱十字兵衛まうし候は。我餘吾郎君五條坂へおん通ひある事を露ばかりもまらず。先に紀の國へ去べしとある命にまたがひ。いまだ若年のおん方を手放して。遊所おほき都の地に長く逗留させまうせしは。我一生の誤り。今悔どもせんすべなし。我已に高野山に逗留して相待申すといへども。御登山なければ。こはいかなるゆゑに御遅滞と氣づかはしく思ひ。急歸て一昨日京着し。若黨奴僕等に聞ば。五條坂に連留し給ひておん歸りなきよし。くはしくとへば常住金石塔料どもに。殘らずおんつかひ捨の様子なれば。こはけしからざる事。我おん側につきそひ居らば。いかやうにも諫言を申しあげて。さある御不行跡はさせまうすまじきに。志なしたり残念とおもへどかへらず。こはいかにすべきとおもひ煩なれば。昨日石工來り。おん石塔殘らず成就せしゆゑに。代金をまうし受たく候といふ。旅中なれば金をとのへ償べき手段もなく。情なやおん國元にては少しもあしきおん行跡はなかりしが。畢竟傾國の色に心を亂し給ひての事ならめ。尋常の諫にては御本心にはかへり給ふまじと思案をきはめられたれば。我一命をさ

しあけ奉りておん義をうすなり。又朝鳥の刀は身にもかえがたき物なれども時の用には是非な
 ければ。これを賣代なして金子百五十兩と一のへおきぬこれを百兩石塔の價につかはされ残る
 金にて石塔を高野山へのぼせ給ひせめて父君の御願望のなかばを遂られ。一日もはやく鎌倉に
 おん歸りありて。我書置をもつておん身の曇を晴され。必く我切腹をおん悔みなきやうにま
 うし上べし。父君のおん目がぬにて。餘吾郎君の守りにつきそひ來る我なれば。いづれの道に
 も切腹せざればまうし分たちがたし。おなじ死る道ならば。おん身にかはり其罪を引うけて死
 すべしと。己に覺悟をきはめたり。はおん父君をあざむくに似たれども。其罪は冥途よりおん
 侘をまうすべく思ふなり此度の放佚無慙を御後悔あそばされ。此後は阿曾比ぐるひは勿論。す
 べてあしきおん行跡をかたくおん愼みあるやうに。我にかはりてよくきこえあげくれよと
 いひ殘し。兎角君のおん事のみ苦に仕り。國に殘せし妻子や孫の事なども心にかゝり。あとあ
 どの事などもさだめて氣づかはしく思ひ候はんが。夫等の事は一言もいひ殘さる心のうちを
 御推量あそばされ候へかし。さばかり厚き十字兵衛が忠心も。今御自殺遊ばしては水の泡と相
 成候此處をよく御分別遊ばされくだされかしと。くはしく物語りて悲歎の涙せきあへず。
 餘吾郎もこれを聞て。益歎きに迫りけるが。まばしありていひけるは。十字兵衛がいひ殘した
 る詞といひ此竹刀の書置といひ。死ぬも死なれぬ義理なれば。生害はとまるべし。さりなが

ら夫にしても。十字兵衛に常住金をつかはれ。石塔ばかり高野山に建たりといひて。おめく
 國へは歸りがたき理なれば。我はまばらく身を隠し。せめて朝鳥の刀を買もどして。十字兵衛
 が家名を立る便とすべし汝は十字兵衛が此書置を携て鎌倉に歸り。我は面目なきとて京都より
 直に行方志れずなりしと。父母に告てくれよといひふくめ。さて十字兵衛が亡骸は病死の躰に
 して鳥邊野に葬。かの金を用ひて石工に價を償ひ石塔に書簡をそえて高野山に送りつかはし此
 度召連たる若黨奴僕等は此所より直に暇をつかはし。路平一人を鎌倉に歸らせ。旅宿をあけ渡
 し。十字兵衛が忠義の魂をこめたる此竹刀は。我一生の守にすべしと。餘吾郎これを腰に帶て
 此處を立退。洛外の菜畠村といふ處の小家を借。昨日に變る浪々の憂身となり。手づから焚燒
 の業をなして。まばらく月日をおくりけり〇かくて路平は鎌倉に歸り。主人庄司夫婦の面前に
 出て十字兵衛が書置をいだし。かやうくと告たりけるに。庄司夫婦はこれを聞。十字兵衛が
 忠死とば露まらず。彼日來の老實に似ず不忠のいたり。言語にたえたる行跡なりとて怒強く。
 頼に十字兵衛が妻子を召呼。右の始末をいひ聞せて。書置を見せければ。十字兵衛が妻真弓こ
 れをみてあきれはて。兒子南餘兵衛と共に且驚且歎けれども庄司の怒りつよければ少の宥免も
 なく。其家財を残らず取上妻子を嘔方拂にぞまたりける。十字兵衛が妻真弓といふは。夫に年
 四つ五つまさりて半白の老女なり。兒子南餘兵衛といふは前年妻をうしなひ。窓太郎といひて

今年五歳の男子あり。かくて餘兵衛窓太郎を背おひ母の手をひきて。年ひさしく住馴たる鎌倉を立退。涙に袖もほしあへずたのむ木陰も雨漏こちして。立よるべき所だになければ。眞弓はなほうち歎き。夫十字兵衛どの日來ものがたき氣質にて。いさゝかも邪みたる心を持たず。行ひの正しき人なるに。今更年にも恥ず。阿曾比ぐるひに主人の金をつかひ捨給ひし事。妻子の前も恥給はずや。よも本心にはあるべからず。物に狂ひやし給ひけん。自殺し給ふとも。汚名は世上に隠れなく。彼が類は武士の風上にも置まじき者など。死後までも辱められ給ふ所に心つき給はずや。家名を汚すのみならず。子や孫まで不忠者の子共等と。一生人に指さされ。忌嫌はれんを不便とはおぼさずや。怖めしの十字兵衛どの。情なき夫やと。涙にむせびつゝかきくどき。主人の罪を身にかづきて。忠義のために死せしとは。夢にも忘れぬぞ哀れなる。餘兵衛も歎きは盡されども。はてしあるべき事ならねば母をなぐさめつゝつひに鎌倉を出去ぬ。扱僕路平はいかなる所存やありけん。直に暇を願て行方まれずなりにけり。

(八)我雪とおもへば輕し身受の千金

餘吾郎旅宿よりむかひ來て歸りしより後は。吾妻が許に音信をせざれば。吾妻はいと氣づかはしく思ひ。文かき人を雇て旅宿につかはし。音信を開けるに。使歸りていへるは。餘吾郎ぬし

旅宿を明わたして國にも歸り給はず。いづちへ行給ひけん行方まれずと申すといひければ。吾妻はこれを知りてとどろく。胸つぶれて露現もなく。あきれまどひつゝ。さてはおほく黄金を費し給ふゆゑに志かなり給ひしにや。さりとてもかうくど打あかして語り給はぬこそ怖しけれど。或は恨或は悲。ものも咽にとほらず夜もねられず。月日を過すべきこゝちもなければ。いかにむすべる露の命。強面消も失なで焦れ物を思ふのみなり。かくて日をおくりけるに。鮎尾賀堂左衛門富士屋に來りて。吾妻が身の代金とのひつれば。いよく身受すべしといふにぞ。富士屋のあるじ吾妻をよびて。かうくどといひ聞せ。堂左衛門ぬしの方へゆけといふに。吾妻はいらへだにせず。只泣てうけがはざればあるじはいとほられたち。花車の女にいへるは。吾妻身受の事をうけがはぬは我まゝのいたりなり。彼か恣に背を捨おきては。外くの阿曾比等にあしき癖つきて。我活業の大なる妨となれば。打呵てうけがはせよといへば。花車の女こゝろえ候といひて吾妻にむかひ。或はゆるく理を説きかせ。或は強くいひこらせど。餘吾郎ならでは夫にせまじとかねて心に誓ひをれば。いかにいひてもうけひかず。花車の女ももてあまして。かうくどあるじに告るに。あるじは大に怒り。いでさらば辛目見すべしとて。吾妻をどらへて上着の衣をぬがせ。わづかに肌着一つにしてまどき帯にて高小手にくくりつよく打擲ければ。吾妻は聲かるゝまで泣きけぶを。庭に引おろして遙に隔たる假山のほとりの松

の木に繫つなぎぬ。かばかりの名妓めいぎをかく情なさけなくあつかふも。利きをのみ貪ねむ煙花えんかのむざんなる人心こころなるべし。此夜堂左衛門此の樓上うきに。舞妓歌妓まひびうたひめをあまたつどへて酒醺さかし。笑わらとよめき席上せきじやうゆすりみちて興きやうじけり。これは堂左衛門吾妻に辛からき目を見せ。此方こなたのたのしげなるを聞きせて靡なすべき心なるべけれど。そは趣おもむきを志こころらざる愚おろわざにて。吾妻に嫌きらはるゝも宜うなり。此時いまは已いにこれ霜月しもつきにて寒氣殊つよに嚴つよく。空そらのけしきはげしう風吹かぜあれて。いみじう降ふりくだる雪ゆき。紛よん々揚やう々として柳絮やなぎのはなの飛とびにひとしく。鵝毛ごのけを散ちすがごとく。見みるうち高く積つて。一面い面に玉たまを敷しくかどうたがはれ。假山つみやま泉水せんすい。庭にわの木草きくさ。洲濱すはま形がた。葦手あして形がた。立石たていし。詩石しせき。瀧落たきおし。架垣かき石灯籠いとうろうのたぐひ。庭上の好景こうけい。前栽ぜんざいの莊嚴しやうげん。すべてみな白妙しろたえに埋うれて。心こころくるしう遣水やみづもいといたうむせびて。池の水いけのみづもえもいはずすごきに。吾妻は松の木まつにつながれて。薄綿うすわたの肌はだ着き一重ひとへなれば。寒氣かんき肌はだにとほり身上みうちいらしぎ。手足凍こてたへがたさに身みをもだゆれば。松まつのこずゑの雪ゆきさとこぼれかゝりて身に積つぬ。彼方かなたの樓上うきには舞妓まひびめの立舞たちま影障かげぢやう子こにうつり。歌妓うたひめのうたふ聲こゑも聞きえぬ。けふは越路こしちの人の月つき。あすはいづくの人の花はな。扱あもうたての沙婆しゃ世界せかい。おもふてたびぬ白糸しろいとの。昔むかしがましぢやなかくに。染そめてまんの糸いとのもつれの物思ものおもひ。どうたふも我身われみのうへと思おもへば。いと悲かなく泣なよわりて。あなくるしやたへがたや。おもふ岸きにはそはすまじ。おもはぬ方に花咲はなとは。身みのうき草くさのわけまらぬ。情なさけなき心こころぞかし。いかに

妾めかけを憎にくども。雪責ゆきせめとはあまりぞや。かくまで苦痛くつうをさせんよりは。一思ひとひに殺ころしてよとくときたて、泣なれど。彼方かなたの樓上うきの騒さわぎにまぎれてきこえざれば。誰たれひとり哀あはれと思おもふ者ものだになし。雪ゆきはますく降ふりまさり。吹雲ふきぐもに打うちて撲地た倒たれ。たふれては起たり。涙なみだと血ちと相和あひくわして瀧たきのごとくに流ながれしつ。氷こおりの地獄じごく八寒はつかんのくるしみ忽たちまち身みをとちて。紅蓮ぐれんの衆生しゆじやうに異いならず。響こきされて顔かほにみだれかゝりたる黒髪くろかみも。雪積ゆきつりて白髪しろかみのごとく。なましき身みも氷こおりすくみて倒たれ伏ふし。息いきもたゆげに喚をてぞ居ゐたりける。かくて時刻じこくもうつりつ。小夜こよもやうやく更よわたりて。座敷ざしきの人の語こともやみ。雪ゆきも降ふりやみたるに。庭にわすゑの竹林たかやぶさやくと鳴なてつもれる雪散ゆきちり亂みだれ。あやしげなる者ものつどいでたり。吾妻ごさいは此こゝときやうと頭かしらをあげ。雪ゆきあかりにこれを見るに。覆ふく百頭ひゃくづ巾きん廣袖ひろそでの衣服いふく手甲てつかう引ひきまで。雪ゆきにまがふる白装束しろしやうぞく。志こころのびの者ものと見みえたるが。雪踏ゆきふみ分わけて歩あらつ。小脇こわきに抱かたる千兩箱せんりやうばうに。吾妻ごさい身み受金うけがねと書かたる札しやくをつけたるを。彼方かなたの座敷ざしきの床とこの間にすゑおきて。身みを轉ひらし此方こなたに歩あみ來きりて。吾妻ごさいが背後うしろに立たまはり。氷こおりなす刀やをすらりと抜放ぬきはなしければ。吾妻ごさいは驚おどき括くれながら飛退とびのきけるが。よくくおもへばかゝる呵責かせきをうけんより。死しぬに志こころかじと思おもふにぞ覺悟かくごをきはめて身みを投なつけ。襟えりさしのべて。いざ殺ころせといふ。案あんにたがひて曲者くせものは吾妻ごさいがいましめをきり拂はひ。ものをもいはず背せにおひて。もとの所ところよりくゞりいで。玉塵ぎよくちんを踏ふちらし雪烟ゆきけを踏立ふて。いづくともなく走去こし去し。吾妻ごさいは夢ゆめの裏うらには夢ゆめを見るこゝちして。此者こゝに負おれぬ

きぬ。思ふに千兩箱を携て志のひ入。人を盗て逃去しは。世にめづらしき盗人なり。是かな
らすいはれあるべし

雙蝶記卷之二終

雙蝶記一名霧籬物語卷之四

江戸 山東庵京傳編

(九)葦屑に花を見捨し胡蝶の狂亂

夫は扱おき餘吾郎は。浴外の菜島村といふ處に。隙あらはなる葦の屋の憂節滋き栖をもとめて。
獨いぶせくくらせしが。夜の雪いみじう降。くづれたる壁のひまをもる寒風肌を斬がごとくな
れば。臥ながら目もあはず。夜終來方行末のとなどおもひついで夜をあかし。鳥のなき渡る
比起あがり。火打とりて火を打。圍爐裏に柴を焼てあたり居たるに。外の方に人のうめく聲き
こえければいぶかしみツ、氷つきたる戸をからうじて引あけ見るに。雪は降止たれど滿地にた
かくつもりて一面に白妙となり。氷柱は劍を逆に植なみたるやうにて。見るにさへ身上いら
しぎぬ。門首の雪をかき分つ、竹の編戸を押しひらき外の方を見るに。赤きひた鹿子の小袖を
着て黒髪を亂したる女身をなかば雪にうづみ。うつぶしに伏てうめき居たり。いかなる人にや
とますくいぶかりツ。立寄て引起し見るに。是乃吾妻なれば。こは思ひかけずどうち驚き。
急ぎまどひて身上の雪を打はらひ。氷すくみて息もたえくなるを抱て裏に入り。醒藥をの

ませ焼火に身をあたしめなどしければ。やう／＼人ごころつきて目をひらき。餘吾郎を見てこはそも夢かといひさしてとりすがり。且うせし涙にむせびけり。餘吾郎は吾妻が背中をさすりていたはりツ。いかなるゆゑにて彼處には居つるぞとたづねれば。吾妻は涙をよしのこひ。雪責になりたる事の始より。あやしき者志のび入て身の代の金千兩を残りおき。背におひて五條坂より此どころまで走來り。すておきて行方忘れずなりし終まで詳に物語りければ。餘吾郎はこれを聞て眉を擡。そはこゝろ得がたき事かな。そなたの身の代を償ひながら。何ゆゑに奪がごとくせしや。又千兩といふ大金を出し。そなたを奪て我門にすておきしも不審なり。そも且何人の仕業なるや。我は少しも心當りなし。そなたはいかにといふ。吾妻も不審はれず。妾も更に心當はべらず。唯夢とのみおもはるゝなり。さりながら身の代を償て妾が難儀を救ひ出し。處もあほかるべきに。おん身の住給ふ此門首にすておきてゆきしは。妾をおん身にそはせ給はる深き情の志ある人の仕業なるべし。とまれかくまれ身の代の金償れたる我身なれば。おん身と夫婦になるとも妨なし。今あらためて妻となし給はれかしといふ。餘吾郎いはくこれまでのそなたの深切過分にはおもへども。いはれありてそなたを妻になしがたし。これまでの薄き縁とあきらめて。五條坂に歸くれよ。かならず／＼つれなき者となおもひそといへば。吾妻はつと膝をすゝめていそがはしくいふやう。さては前に誓給ひし詞はみな虚にては

べりしか。此際に至てまかのたまふはさだめて外にいひかはし給ふ女あるゆゑなるべし。さる事のはべらばなどてとくにはのたまはぬぞ。怖しや情なやと息巻つゝいひて。餘吾郎が胸板をとらへ。左右にふり動て泣叫にぞ。餘吾郎はほど／＼もてあまし。いはれありといふはさる類のどにあらざといへば。まからば其いはれはいかにと問詰られ。あけていはれぬ餘吾郎が胸の裏の苦しきは。何といはまの百合の花。さしうつふきて詞なし。吾妻は餘吾郎が躰を見ていよ／＼心變せしに疑なしとおもふにぞ。ます／＼恨み泣悲みけるが。とても五條坂に歸て堂左衛門が方へゆくべき心なければ。此にて死にまかじと覺悟を極餘吾郎が傍にありける一腰をとりて拔放し。吭につきたてんとしてよく／＼見れば。是竹の刀にて

拙者此度の切腹犬死に相成不申様
御短氣御慎遊され可被下候

と書付てあればいぶかしみおぼえず。猶豫けるが。餘吾郎其手をとらへていはく。自害とまでおもひ詰たる誠心の黙止がたければ。口外志がたき事なれどもうちあかして聞すなり。そなたと夫婦になられぬといふいはれは。原其竹刀より起るなり。个様／＼と彼常任金石塔料の金をつかひ果したるにより。南方十字兵衛我身にかはり罪をかづきて切腹したる事。旅宿を立退て此處に栖をもとめしまでの始終。枝葉も残らず物語。鎌倉月影个谷判官の家臣なる事も此とき

始て語りければ。吾妻はこれを聞て。扱は妾が養父とあなし君に仕ふるおん方にておはせしか
と打驚。我身のうへの事もつばらに語りければ。餘吾郎も彼は原同家中齋元濫右衛門が養女に
て。動之助と兄弟なることを始て知。縁あれば千里を隔ても逢易く。縁なければ面を對しても見
えがたしといふ常言もうべなりと感嘆す。吾妻ふたゝびいひけるは。十字兵衛どのとやらん。
さばかり忠義の人なるを。非命に失ひしは皆妾が身より起たる事なれば。つれそはれぬどのた
まふも實理なり。さりながら今更妾が心の誓を破。他に嫁すへき心なし。此身をいかにすへき
といひさして聲を放ち身をもだへつゝ泣叫ければ。餘吾郎も其心根を不便におもひて涙さしぐ
み。いなゝ十字兵衛を失ひしはそなたの身より起りしとはいひながら畢竟は我放埒なるゆゑ
なり。そなたは養父の急難を救ふために身を賣しとなれば。一旦孝の道も立ちぬ。我はそれにはひ
きかえて。不孝不仁の罪深し。十字兵衛が此竹刀の書あきをむなしくせまじとおもふばかりに。
かくながらへて居るぞかし。さりながら同家中齋元氏の女と聞うへはそなたの身をあやまたし
てはなほさらに義理たゝねば。十字兵衛が靈魂に託言し此竹刀を媒人にして妻となし。朝鳥の
刀の行方をたづね買もどして。鎌倉に歸參を願ひ。十字兵衛が家を立。彼が靈魂を慰すべきな
りといへば。吾妻はこれを聞。蘇生たるこゝちして喜ぶ事かぎりなし。ときに餘吾郎立上りて
佛壇の扉をひらく。裏を見れば又譽義劍信士。俗名南方十字兵衛。永和元年十月某日と。書

付たる白木の位牌をすゑて香花を向手。懇に祭る躰なり。吾妻はこれにむかひて念佛をとなへ。
とかく涙はどいままらず。餘吾郎は手向の水を汲かえて合掌し。南無幽靈頓證佛果菩提。南無阿
彌陀佛あみだ佛。ととなへつゝ、回向に時をうつしぬ。此下には物語るべき事なし〇かくて吾妻
は餘吾郎が妻となり。わびしきくらしをいとはず。羅綺の重衣にたへざりし昔にかはりて。木
曾の麻衣あさましく。身はやつせども川竹の。憂さはもぬけの秋の蟬。聲のまぐれを慰めつ。
手織ひきゆひ前垂の。姿を今の水仕業。心汚さぬ身ばれには。鍋の数なき庭籠。阿彌陀佛の誓
にもすくふにたらぬ白粥の。煙もほそき竹火箸。流しの水の飛鳥川菜刀を剛とにかくに。米漸
桶の底抜て。あるにかひなき吹竹の。飢に堪ざる節もあれど。翠の帳紅の。針の席を敷かえ
て。破屏風に古夜着を。鴛鴦の衾とむつましく。物たらぬをいぶせくもおもはで日をおくりけ
るが。昔調たる琴の音も。松風の時雨とかはり。鉢敲寒念佛の聲もやゝ氷りて。世の人のすさ
まじきものにいふなる師走の月もかたふき。胸敲。星佛賣の交如街上に年木積車の音さへい
そがはしげにて。年浪のよどまぬ水には柵もなく。寒梅の花のかほりを暦の奥に巻納て。す
でに此年も暮にけり。明れば永和二年の春なり。餘吾郎始のほどは十字兵衛が残りおきたる金
の餘にて朝夕の烟を立しが。坐して食へば山も崩。坐して飲ば海も乾の。理なれば。今は残な
く用盡し。これより後はいかにして。日をおくるべき。何にまれ活業をはじめずはとおもふう

ち。程なく彌生の比となり。や、夏に近ければ。時の物とて夫婦とも。はんじ物の團扇の繪をかきて纒の價を取ぬ。此家のめぐりはすべて島なるが。時しも菜の花の盛にて。朝夕黄金の色は目に見れども。おのが身には一錢のたくはへもなく。やうく其日くをおくるのみなり。さて十字兵衛が命日にあたる日。餘吾郎手づから菜の花を折。此花の色に似て。金色の佛に成かしの思ひつゝ。これを佛壇に供ず。吾妻は手向の水を茶椀に汲てはこぶとて取落しけるに。物にあたりて二ツに破ければいつになきあやまちせしとの氣がよりさよ。妾が汲たる手向の水。冥途におはす十字兵衛どの、心になはぬゆゑにか。原我身より起て非命に死したる人なればさも理なりと。涙さしくみつゝいへば。餘吾郎は打笑ひ。さばかりのあやまちはいつせんもはかられず。氣にかくるは愚痴なりといふにぞ。さもあらんかといひて。再別の器に汲かえてぞ手向ける。かくて餘吾郎は十字兵衛が墓參すとして出去。吾妻は夫のかきさしおきたる團扇の繪をかき。さて時刻やとうつりけるに。餘吾郎鳥邊野より歸りて裏に入んとせしに。家の傍の竹藪の陰より武士に仕ふる奴僕とおぼしき者出來りて。窓の下に彷徨ければ。餘吾郎はいぶかりつゝ。裏に入すしてこれを窺ひ居。とはあらざるや彼者は窓の下にて咳すれば。吾妻は繪をかきさして立。窓より顔をさし出して向にかあらんたがひに聳き。或は點頭。或は笑ひなどして彼者はかへり。吾妻は再繪をかきてぞ居たりける。餘吾郎は此躰を見て益いぶかりけるが。

さあらぬ顔して裏に入ば吾妻は出むかひ。おもひしよりはおん歸のはやかりしなどいひて常にかはる事なく。晝飯とゝのへてまゐらすべしといひて庖厨に入ぬ。餘吾郎は手を又き物思ひ顔して居けるに。まばらくありて外の方に案内を乞者あり。餘吾郎立出て編戸をひらき見るに。金鏢白柄の兩刀を帯衣服もなみならず富たる武士の浪人とおぼしき打扮なれば。何人にやとおもひしに。編笠とりたる顔を見れば。五條坂にて見知たる鮎尾賀堂左衛門にぞありける。まかれども見知たるのみにて初對面なれば。それともいはず。何等の用ありておはせしぞといふ。堂左衛門いはく。委きことはゆるやかに語るべし。ゆるし候へといひつゝ遠慮もなく打通りて座につき。某今日和主の宅をたづねて來つるは別事にあらず。和主に賣べき物ありて來つるなりとて錦の袋に入たる白鞘の刀を出し。これをとくと見候へといふ。餘吾郎これを取まぶくねて見るに。おもひかけず是十字兵衛が賣代なせし朝烏の刀なり。もしひが目にやと打かへしくつらく見るに。其紋星の行がごとく。其光波の溢るゝがごとく。水には蛟龍を斷陸には犀革を刺べき金鐵の精のづからあらはれて。疑べうもあらねばうち驚き。此刀はいかにしておん身の手に入しやといふ。堂左衛門いはく。頃日刀劍を商者のもとより償得たり。是和主の買得さればなりがたき刀ならずや。いかにもさありおのれもどめまくおもふなり。價はいかほどにやといそがはしくいへば。堂左衛門うち笑て。價は則金千兩なりといふにぞ。餘吾郎はあ

きれて詞もなかりしが。まばしありていひけるは。あのれ見給ふごとく貧身なるに。殊更千兩といふ大金をいかでかどしのふる事あたふべきや。其價の半を減じ給はらば。古郷へまうしつかはして金をどしのへ買とるべし。それも急にはなりがたければ。まばらく日をのべ給はれかしといふ。堂左衛門いはく。たどひ萬金にかえても此刀なくては和主古郷に歸るとなりがたからん。素千兩の内一錢にても不足しては賣がたし。もし金をどしのふる事なりがたきは。其價にあたるべき物にかえて賣べきなり。得と思案せられよといふ。餘吾郎いはく。かゝる貧家にはいかで千兩にかゆべき物あらんや。堂左衛門いはく。いなありまかゝ活實なり。其實といふは別の物にはあらず。今は和主の妻となりし富士屋の吾妻なり。吾妻に離縁状をそえて某に渡さば即坐に此刀を與ふべしといふ。餘吾郎は當惑してまばし答もせざりければ。堂左衛門は彼刀を袋に入我あながちにこれを賣んとおもふにはあらず。和主が歸參の便となるべき刀なれば。情をもつてかくはいふなり。得心なくは夫までなり。いとま申すといひて立出んとすさきほどより庖厨の口に立て様子を開居たる吾妻。いそがしく走出て堂左衛門を引止め。ひさしくにてまみえまゐらす嬉さよ。今のたまひしこと彼處にて残らず聞はべりぬ。妾夫をすゝめて其刀を買すべければ。今一時まちてよといふ。堂左衛門頭をふりていはく。餘吾郎が跡を見るに得心せざる様子なり。我あゝて賣べきにあらず。かくいひ出しては片時もまちがたし。他

人に賣にまかじといひて又立上るを。吾妻はなほひきとめ。何事も皆妾が胸にあるぞかし。是を見給へど二枚の團扇を取てさしだせば。堂左衛門取あげ見て。此團扇の繪は童もよく知たるはんじ物なり。別に又意ありや。吾妻いはく。今一時まち給は。おん身斧琴を菊べし。若又夫得心せざる時は。鎌輪ぬといふ妾が心のはんじ物。合點ゆき候かど目くばしまつゝ心ありげにいへば。堂左衛門其意を悟れる様子にて打點頭。まからば一時は猶豫すべし。我此村末の酒店に待黄昏の比を限りに來べければ。それまで黒白をわかちあくべしと。詞をつがへて歸りけり。此時傍の竹藪の裏より以前の奴僕顔を出し。此方の様子を窺ひ居る。吾妻は餘吾郎が側により。おん身ものをもいはで何を思案し給ふぞや。とくく離別の證書を書て妾にいとまたびぬといふ。餘吾郎いはく。汝まかいふは彼刀を買しめて我を鎌倉に歸參さすべき心なるべけれど。いかほど彼刀がほしきとて。一旦妻にせし汝を入手に渡して。我武士道の立べきや。殊更ら同家中替元氏の娘なれば。我たどひ鎌倉に歸參するとも。澁右衛門どのに對しかうくど何の顔ありて語らるべきや。さりとして刀を買もどさすれば十字兵衛が家たゝず。そのゆゑに我は唯前程より。胸を割るゝばかりに苦くおもふなりといふ。吾妻いはく。いなく刀は買とも買ぬともはおん身の心にまかせたまへ。妾は夫に管ず。實は堂左衛門主にそひたく思ふ故なりといふにぞ。餘吾郎は唯惘然て吾妻が顔をうちまもり居けるが。忽面色變りま

くり手していはく。最前よりの様子いぶかしく思ひつるに。さては汝が心は變りしよな。吾妻
 いはく。のたまふまでも候はずいかに心變しなり。そのゆゑはよく察しても見給へかし。
 我身五條坂にありしときは。綾錦を身にまどひ。口には美食に飽たる身が。おん身にそひしよ
 り貧きくらしをなし。去年の冬もとき衣の單にて寒夜を過し。馴ぬ手鍋の水仕業。春も越路に
 歸らざる此あかがりをよく見給へ。辛苦にほそる我姿。苔井にのぞむ水鏡も。昔の影はなきぞ
 かし。彼につけ是をおもふに。かくたのみかひなきおん身を慕。何不足なき堂左衛門ぬしを嫌
 しは。妾が一生の誤り。今後悔するゆゑに。いとまをとり彼人に連添て。偕老の末までもたの
 しみをともにせんとおもふなり。とくく離別の證書をかきてよとて。硯と紙をつき出せば。
 餘吾郎は怒の睨ひきあげつ。汝これまでの實心に打て變りし其詞。五條坂にて誓ひし言も反
 古にする心にや。返答せよといらだてば。吾妻は打笑つ。遊女の詞にいつはり多く薄情なる
 は常のならひなり。いつまでも實ありとおぼし給ふは愚なり。我を恨むは理ならず。おん身
 の愚よりとあきらめて。去狀をどく書てよと。いとにくさげにいひければ。餘吾郎は大に怒り。
 聞ば聞ほど畜生にもおとりし女。今は見るも穢はしとて。前程彼が取落して破たる茶碗を取あ
 げ。これを見よ。もとは全き此茶碗も。一旦破れば繼とあたはず。手向の水を覆せしも。夫
 婦離別の前表にて。覆水再器にもどらず。曆手の此茶碗の。破し片は三行半。是が則去狀

がはり。是持て何方へなりと出去と。吾妻が顔に投つけたり。最前より始終の様子を窺ひ居
 る彼僕。此時舌を吐微笑してなほ竹藪にかくれ入ぬ。折しも撞出す晩の鐘。胸にこたゆる黄昏
 時。約せし時刻と堂左衛門。戸なし駕籠を雇て來りければ。吾妻はいどうれしげに出むかひ。
 餘吾郎どのも得心にて妾にいとまたびたれば。とくく連てといそがする。餘吾郎は堂左衛門
 に打對ひ。心の腐し不貞の女。縁を断てつかはすなれば。約束のごとく刀を渡せと氣をせけど。
 堂左衛門はおちつきて。志からは離縁狀と此刀を右左に取かゆべしといふにぞ。餘吾郎はいそ
 がはしく行灯に火をともし。去狀かきて渡しければ。堂左衛門も餘吾郎に刀を渡し。これでさ
 らりと埒あきぬ。やよ餘吾郎いふまでもなければ。是から吾妻に指さす事もならざるぞ。此
 方の女房いざ給へといひて。吾妻が手をとれば。餘吾郎は拳をにぎり齒噛して。怒りの涙ばら
 くと。落すを吾妻は願て打笑。未練な男と嘲つ。懷紙を投つけて戸なし駕籠に乗ら
 づれば。堂左衛門は立寄て駕籠の垂を撲地とあろし。いそげくと下知をなし。駕籠を飛して
 走り去ぬ。餘吾郎はなほ怒に堪ざりしが。嗚呼よくく思ひめぐらせば。不貞の女を追出し。
 はからず此刀の手に入しはかへりて我運強き處なるべし。とひとりごちたる折しもあれ。竹藪
 の裏よりふたゝび又彼僕をどり出。其刀をといひさして手をかけたるを。早足を飛して蹴倒せ
 ば。起上りて一腰を扱放し。額額二ツと斬つけたり。餘吾郎は彼刀の鞘ながら丁どうけとめ。

又斬つくるを打拂ふ拍子に鞘は飛散て。拔射の鏢彼僕が鼻頭に閃々きければ。敵しがたくや思ひけん。早足を出して逃去ぬ。餘吾郎は持たる拔射を一眼見て。こはくいかにと驚きつ。灯火にさしつけてよく見れば。先刻見たる朝鳥の刀にあらぬ偽物なれば。尻居に倒て只愕然たるばかりなり。まばしありて吐息をなし。さては我を誑んと偽物をこしらへ。眞の刀とすりかえて渡せしか。我今怒に迫てあらためざりしは不念なり。これをおもへば吾妻が心の變りしは一朝一夕の事にあらず。今まで眞心とおもはせしも。我を惑す計策ならん。先刻今の奴僕と窓越に囁しも。堂左衛門が内通をいたせしに疑ひなし。まかる時はいまだ枕はかはさずとも。其心は姦通なり。はじめは嫌ひし堂左衛門と心を合せ。我を誑き偽の刀を與へたる人畜の淫婦。いで追去て堂左衛門もろとも四段となし。せめて此憤をばらすべしと。裾端折てかけ出した。いなく我韃駄天の足ありとも。よほど時刻のびたるうへに。行たる方角もしれざれば。追去べきあてもなし。おもひまはせばまはすほど。彼が如き人畜の女としらず。遊女のならひの虚言を誠と思ひ。不實の締にかゝりしは皆是我誤りなり。何面目にながらふべき。穢はしき此刀と。偽の刀を投捨て。佛壇の下戸棚あけて取出す一腰を抜放し。腹かき出してほど突たてんとせしが。是乃十字兵衛が遺物の竹の刀なれば。我ながら狼狽しと心つきて。これを見れば

拙者此度の切腹犬死に相成不申様
御短氣御慎遊され可被下候

と書付あれば。氣の張弓も弦きれてがつくりし。嗚呼十字兵衛が忠義の魂を籠おきたる此竹刀。死したる後の後までも。不言しておのづから我を諫る此書置。たとひいかほど志のびがたき事ありとも。我命をまつたうせざれば。此書置に對し顔なしとおもひなほして。竹刀を押し戴き。自殺をといまり。十字兵衛が位牌にむかひ合掌して。我誤りを詫にけり。かゝる時しも二ツの蝶く窓より裏に飛入て。灯火をまたひ行燈のめぐりを飛しが。二ツの蝶もろとも油皿におち入ぬ。餘吾郎これを見ていはく。爾雅翼を閱に。菜の花蝶に化すといへり。蝶又菜種の油火をしたひて遂におのが身を焦すに至る。是いはゆる。爾に出る者は爾に反る理なり。是を姦夫堂左衛門。淫婦吾妻に比する時は。爾我を誑我又爾を誑べし。めぐる因果の丸行燈。豈其報なからんや。彼我に偽の刀を與へたれば。我又偽の狂人となりて彼等が行方をたづね。眞の刀を取もどして。我本意を遂べしとひとりごちて。十字兵衛が位牌と竹刀を懷にかくし入。みづから髪をかきさばき。手向し菜種の花を把。うちかたけて狂ひ出れば。眞晝の如き夕月夜に。里の童がこれを見つけ背後につき。氣ちがひよ泡齋よといひはやす。餘吾郎は扇をひらきて蝶の如くにひらめかし。これを見よ童等。蝶は菜種の花に狂ふ吾妻は我を狂は

踊人が見たくは北嵯峨へ去て見よ。北嵯峨の踊は花笠を志やんと着て。踊る振がももしろきど。うつゝなきことと云て。菜島を踏ちらしッ、狂ひ去ぬ。

(十)白露や無分別なる性命の質物

爰に又洛外北岩倉に幻竹右衛門といふ武士の浪人ありけり。さだまれる活業はなしといへども何不足なき住居の様子。見越の松も世にすねた。丸木造の門構。庭の植籠亭坐敷。苔の賞美の手水鉢。水草の志げる池水も。清か濁かよそ目には志れぬ主の心なり。比は卯月のをばりなるが。此家に仕ふる兩個の奴僕。石燈籠に火を燃し。手水鉢の水汲かえなどして。一ツ所に集寄。一箇の僕いひけるは。其方はいかにもふぞ。世にめぐらしきは此池の四季咲の燕子花。毎月十五日は其花枯凋。下十五日はわれあの如く花咲て勢よし。それにひきかへお旦那は。上十五日紫燕の花の凋時は常の如く健におはすなれど。下十五日紫燕の花咲時は瘡の病をわづらひ給ひて外出もならず病床に籠居給ふ。これも又稀有な病にあらざやと。いへば此方の奴僕が云く。いやそれよりも猶めづらしきといふは我等か傍輩彼新參の露助が事。彼は近頃まで妻もろとも此村ずるに住しが。瘡にてもいはいはねばはかくしき活業もなく。貧きくらしを志て居たるが。何にかあらん急に金の入事ありて。其金なくては命にもかゝる事と。夫婦が歎

くをお旦那が聞つけ給ひ。露助が首を五十兩の質物に取給ひ。さだめの月がきれらばたとひ首をきらふともお旦那の心まかせになさるべき約束なるよし。其きはめの月も今月が限にて。今日は則晦日なれば。月がきれたらいかにあらんと。女房がそれを苦しめて。昨日お旦那へ日延の願に來たりしが。いかさま我々が置質物どちがひ。いかにしても流す事のならざる質物。人の首を質に取とは世にめぐらしき事ならずや。と口囁はなべて奴僕の癖なるべし。かゝる折しも障子の裏に嗽の音たてつゝ。主人の聲していひけるは。あな叫喚き奴僕ども。夜に入まで何口たゝきてひまいるぞ。とくく下家へ退け。といふも彼方の障子でし。かりそめに呵るにも。烈言は主人の氣質。奴僕どもは打驚。いらへの聲も口の裏下家の方へ退ぬ。かくて時刻もやうつり亥の刻の土圭ひければ。亭坐敷の明障子を左右に開き。此家の主人竹右衛門。瘦衰たる姿にて。左結の鉢巻も。病に悩む籠居に。吳郡の綾の裯。夏の風すら厭ふにや。後を圍金屏も。四邊耀やく一間の裏。錦の小夜着を打懸て。病床ながら机に向ひ。歌書くりかへす傍に。かしこまりたる奴僕の露助。頭に燃す蠟燭の。流るゝ熱き窮屈さ。實燭涙の泣顔を。皺めてこらへ居たりけり。竹右衛門書を讀まして露助が面を見やり。いかに露助苦きか堪がたきか。すこしにても身動すると蠟燭が倒るゝぞと。いへば露助うらめしげにて。物いひたさも瘡の悲さ。指を以て掌に。たどひ晝夜睡ずとも。仕へまいらす心底なれど。抽

者が頭を燭臺に志給ふは。あまりとや情なしと書て。口に指さし仕方すれば。竹右衛門はこれ
 を讀て白眼つけ。情なしとは何謔言。證書の文言を。汝はやく忘しかど。いひつゝ傍の宝箱を
 探りて一通を取出し。今更にあらためて讀聞すにはおよばねども。忘しならば再聞とて。之
 を讀。其文左の如し

質物證文之事
 一拙者之活首一箇

右貴殿方へ質入仕金五十兩借用申所明白也尤五箇月を限受戻可
 申候若定の月きれ候は拙者之首御取被成候とも違背申間敷候仍而證書
 如件

永和元年十一月某日

幻竹右衛門殿 參

北岩倉村
 借人 露
 相文妻 關兒
 助

竹右衛門これを讀をばりていはく。此通の文言なれば。受戻さぬうちは汝が首は我物なり。殊
 に此月が其さだめの五月目。今日は乃晦日にて。今一時過子の刻に至ればはや明日の分なれば。
 質は流れる。灯臺にするはあろか。我心まかせにたとひ首を斬とも違背はなるまじ。我心にそ
 むかばゆるさじと呵つ。再机に打向ひ。餘念なく書に見とれて居たる折しも。一陣の風颯
 とおろし來て。庭木の梢を颯々と吹ならし。池に盛の紫燕の花。ゆらゆらと動くひとしく。
 花の裏より一道の陰火閃々と燃出て此方へ飛來りしが。忽ち一羽の子規と化して机上に羽
 振し。二聲三聲ものかなしげに鳴にけり。竹右衛門いそがしく露助に對ひ。たとひ何が出や
 うども。かならず此方をふりむくな。見るなくと。いふ間にすつくり背後の方に。緑の髪を
 ふり亂し色青ざめたる女の幽靈。髣髴とあらはれ出。竹右衛門を外背にかけてさもうらめしげ
 なる顔色なり。さしも強氣の竹右衛門忽ちわななく瘡病。胸をおさへて苦しむ躰。露助はあな
 怪しやと思ひつゝ。彼方を見んとふりむけば。竹右衛門いひけるは。又此方をむくか。汝が首
 は我物なれば。汝が自由に動かす事はなりがたきぞ。むくな見るなど前程より。制すを汝は聞
 ぬかど呵られて。向もむかれぬつくりつけ。猪首になりて坐し居たり。扱竹右衛門は幽靈に打
 むかひ。悵望を滅して成佛せよとすゝむるに。まだ迷ふて出をるか。立去退とよばはりッ。
 刀を抜て斬拂へば。幽靈は消失て。時鳥は明障子に飛つき。口より血を吐出して障子の紙に。



おとこひしといふ假字を書ついたり。露助は去のびかね。我を忘れてふりむく拍子に。頭の
 蠟燭撲地ちち。時鳥は又再び一團の隠火となりて飛去ぬ。此時土圭のひくを聞はずでに是子
 刻也。竹右衛門は落たる蠟燭のいまだ消ざるを取。手燭に立て机にすゑ置き。露助が襟首つか
 みて膝もと近く引よせて聲をあらへげ。やをれ悪き奴かな。五十兩の金なくては一命に管ると
 いふ危急を救ひつかはしたる恩を忘れ。證書の文言にさへたがひて。我詞を背く横道者と詈り
 つゝ。病に屈せぬ強氣の主人。手速用意の繩を把て。露助を高手小手にくし上。椽より下へ
 踢落しければ。露助は外皆ひきあげ怒れる躰いはねど顔にあらはれたり。竹右衛門はなほ白眼
 つけ。質物に繩をかくるは世間のならひと知ざるや。今すでに子の刻の土圭ひくれば。汝が首
 の質物ははや流れぬ。我曾て銚見んとおもふ新躬の刀あり。幸ひ汝が首を打放して刀の斬味を
 試むべし。やよ奴僕等土壇をつけどよばれば。ハッと答へて奴僕等。土俵を持出て。露助が
 前に積重ね。椽さきに燭臺を立ならべて下家をさして入あどは。晦日も月と耀けり。此時外の
 方ひそやかに去のび足にて旅乗物を昇來り。門外にすゑ置て従者は残らず歸りけり。是何人歟
 去れがたし。さて竹右衛門は白鞘の刀を携へ。庭下駄はきてまづと庭にをり立ち露助が側
 近く寄。此刀を銚には究竟なる汝が骨組よしと打點頭。手水鉢の水を柄杓に汲とりて刀に
 灑ば。露助はわるびたるけしきも見せず。坐をまめ直して覺悟の躰。刀はいかなる斬物か知ぬ

ども。病ほうけたる手の裏で。我骨されるかおぼつかなしと。口にいはねど目顔にて。それと
 悟らす嘲笑ひ。悪さもにくしと竹右衛門。すでに刀に手をかくるほどく危き折しもあれ。
 やよまばしまちてよと。云つゝ跳こむ露助が妻の於關。藁苞を袖にかくし。夫をかこひて竹右
 衛門に打むかひ。昨日も参りてきこえ上。妾が身を賣て金をとゝのふるまで。今まばし日を延
 て給はれと願ひはべれど。聞入なきは始めより。銚物に去給はんとのおん心にてありけるか。
 さあらばそれと始めより。など得心はさせ給はぬぞ。さりながら活首を質入の證書を出せしう
 へは。今更悟てかへらぬこと。是非銚ねばならぬとならば。妾が身を斬刻。夫の命をたすけて
 よ。慈悲ぞ情ぞこれまうしと。掌を合せてうちなげしと。竹右衛門は聞入ず。女はためしの用
 にたゝぬ。妨すな退て居よと。鞘にてこなたへ突退て。又露助に立むかへば。いなにかにのた
 まふとも夫は妾が殺させぬと。右にとりつき左にすがり。踢ても踏てもこりずまに。夫をかこ
 ふ袖屏風。立つ屈つ青柳の。風にもまるゝ亂髪。よその見る目も不便なり。露助はこれを見て。
 かゝる慈悲なき竹右衛門。いかにいふとも聞入まじ。益なき詞をつひやすなど。いふを目顔で
 悟らす瘡。とくく斬とこれも目顔て覺悟の躰。こゝろえつとて竹右衛門。又立かゝるを。於
 關はなほも隔つる拍子に竹右衛門が左りの手頭を見て驚き。ヤア此小指がきれてある。といふ
 を聞て露助は。何小指がきれてあるかと。我を忘れてものいへば。竹右衛門はこれを聞。さて

は汝はいつはりの瘡なりしか。我を誑大膽者。觀念せよと刀を抜。首落さんと斬つくる。露
 助はやく身をかはし。一聲さけびて力をきはめ。いましめの細ふつと斷。土俵を把て受とめけ
 るが。刀はきれもの土俵を斜に切おとし。土は地上に散亂す。時に不思議や許多の蛙聲ふりた
 てゝ鳴にけり。竹右衛門はいそがはしく刀をおさめてためらへば。露助は願て。竹右衛門何
 ゆゑに猶豫する。とくく斬とゑり髪かきあげ身をすりよすれば。竹右衛門は刀を袖におしか
 くし。しばし頭をかたふけて

斬たくもあり斬たくもなし

といふ俳諧の句をつくりて吟ずれば。思ひもよらず表にすゑたる乗物の裏に聲ありて

盗人を捕へて見れば我子なり

と聲たかやかか吟ずれば。竹右衛門は眉を擡。俵といふ字を二つに斬ば。表に人といふ文字。
 今表に人ありて。我句に附句の當意即妙。何人にやゆかしさよと。いぶかしみつゝいひければ。
 猶乗物に聲ありて。不審はうべなりそれへ通りて對面すべしと。いひつゝ乗物の戸をさとひら
 きて立出しは。五十歳計の老女にて。女なれども兩刀を帶しは武家の行儀にや。摺箔の袷の衣
 に唐錦の帯いや正く。首桶を小脇に抱てまづくと打通れば。竹右衛門は一眼見るより大に驚
 き。こは母人に候はずやおもひかけざるおん入來。いかにして我栖をまろしめし候やとなほい

ぶかり。席を拂ひて上坐に通らすれば。老女は怒の聲ふるはし。我を母といはるゝすら穢し
 さよと。他の事はいはぬさきよりはら〜と怒の涙をあとしけり。露助はせきにせきたる面色
 にて。妻於關に睨眼すればこゝろえて。かくし持たる藁苞の裏より兩刀を取出し。一腰は夫に
 渡し。一腰はちのれ小脇にかいこみて。夫婦もろとも竹右衛門が右左に立ならび。そり打かけ
 て且露助いひけるは。夫土は金鐵の精を育す。ゆゑに名劍土中に入ば。其精天に徹といへり。
 傳聞蛙鳴丸といふ名劍。鐵精を育する土を斬るときは。迫りて蛙の聲を發するよし。汝今土俵を
 斬し刀こそ。蛙鳴丸に疑なし。其刀を所持する汝は。去年五月下旬。鎌倉月影ヶ谷の下館
 の後門にて。都といふ白拍子を手にかへ逃れ去し曲者に疑ひなし。其時我其處に行かゝり。前
 なる流をせきとめたる土俵をどり。汝が刀を受とめしに。今の如く土を斬。忽ち蛙の聲を發す。
 さては傳へ聞蛙鳴丸なるべしと推量せしが。其夜の様子は汝が心におぼえあらんといへば。於
 關も其尾につきていひけるは。志かのみならず都が死骸をあらため見れば。口の裏に小指を
 含む。今汝が左りの手頭を見るに小指なし。彼といひ是といひ。都を害せしは汝なること明白な
 り。露助又いひけるは。かくいふ我は都が爲に弟なり。前程の怪しみもまさしく姉の亡靈に
 て。時鳥血を吐明障子にあと〜こひしと書たるも。姉の怨魂冥途の鳥となり。汝を打しめんと
 我を此に導たるに疑なし。蛙鳴丸を所持する者こそ姉の敵なれどももひ。其時螢の光にて

ほのかに見たる汝が面影。もしやそれかとももひしゆゑ。いつはりて瘧となり。五十兩の金の
 入用ありといひて試つるに。我活首を質物にとらんといふもいぶかしければ。其詞に志たが
 ひて金を借しは。此家に入こみてなほ實否をたしせしうへ。汝が首を此方へ受取り姉の仇を報
 はん爲なり。素より入用なき金なれば封の儘此にあり。此金を戻すうへは露ばかりも恩はなし
 と。いひつゝ懷より金の包を取出して。竹右衛門が前におき。日來尋し姉の敵如此明白な
 れば。いざ立合て勝負を決せよといひつゝ。刀の目釘を志めし。於關もろとも詰寄たり。時に
 彼老女夫婦に向ひ。やよ志ばしまていふことあり。さては其方たちは都が所縁の者なるか。勝
 負を急はうべなれど。此方にも別に又詮義すべき事あれば。志ばしの間ひかへて居よとといめ
 置き。懷中より印籠を取出して。竹右衛門が目前に出し。汝此品におぼえあらん。去年都が殺
 されし同日同夜。下館の軍用金千兩を奪取し其の盜賊。一重の堀を切破りて出たる様子。我其
 處へ行かゝり。拾ひ取たる此印籠。沃地に遠山の持繪したるは。かねて汝が所持の品。志かの
 みならず人をして聞しめしに。汝千兩にて五條坂の遊君を身受せしといふ噂彼といひ是といひ。
 彼金の盜賊は汝なる事明白なり。それを都に見とがめられて手にかけたるに疑なし。我君よ
 りかの金の盜賊ならびに都を害せし者を詮義せよと。夫庄司どのに命ぜられたる其役めを妾に
 申しかえ。夫にかはりて鎌倉を旅立。汝が行方を探りもとめやう〜此栖に今日尋當りしも。

人手にかけず此母が。手づから汝が首を打て。父御の耻をすゝがばやと。それゆゑに此首桶。現在うみの此母が。此役めをわざ／＼望て我子の首を打たために。鎌倉よりはる／＼と。尋て來つる心の裏。どのやうにあらふとおもふぞ。斬たくもあり斬たくもなしといふ。難句に附たる我一句。盗人を捕へて見れば我子なりと。我思より自然と出たる十七文字。此母は盗せよとは産つけぬぞ。渴しても盗泉の水を飲す。熱すれども悪木の陰に息ずといふ教戒を。知ぬ汝にあらざれども。必らず天魔の見入しならんあな悪や。不忠者不孝な奴と。罵つ。老の手羽腕にて。襟首とりて捻倒し。扇を把て打擲しつ。怒の涙悔み泣。身をもだへてぞ倒れける。露助はなほ詰寄て。姉都を殺せしはいかなる恨ありてかど解せざりしに。老母の今の物語を聞て合點ゆきぬ。積かさねたる罪科も。此方の恨は姉の仇。いざ立むかへいざ／＼と。夫婦もろどもはげしき言。老女はふた／＼び聲かけて。やよ待まばし。彼が口より盗賊なりと白狀を聞たるうへにて。其方等に仇打の勝負をばさすべきが。首は妾が受とらねば。主人よりたまはりたる此首桶のおさまりつかず此方の役めがすまぬ。いざ兒子白狀せよいかに／＼と詞の責具。竹右衛門は最前より唯手を拱き。頭を低不言して居たりしが。やう／＼と顔をあげ。母人さまお聞あれ。夫婦の者も我いふことを心を志づめてよく聞と坐をあらため威儀を敷ひひけるは。我本心をあかさずして夫婦の者に打ればやと思ひしが。母人のおん疑ひをはらす爲。餘儀なく實

を語なり。若殿玉兎君。白拍子都が艶色に迷ひ給ひて。放佚無惡のおん行跡。親人を始め館中の老臣かはる／＼詞を盡し理をきはめ諫言を奉れど。おん聞入なく。悪行益つのり給ひ。お家の滅亡あやうしと。諸臣みな薄氷を履如くおもはる／＼しうけたまはり。我浪人の身を幸とし。西施を吳湖に沈め。楊貴妃を馬嵬に殺せし例にならひ。主君放埒の病根を絶べしとおもひつき。罪なき者を手にかくるは情なく。殺すに志のびずといへども。お家の滅亡六勢の歎にほかへられずと心を決し。去年の五月鎌倉にくだり。下館のめぐりを徘徊せし。折から續く五月雨も。まばし晴間に棟の蔭。身をひそめて居たる所に。黒装束の志のびの者。館の塀を切破りて出しゆる。曲者までと呼とめしに。小柄の小刀手裏劍に打つけて。跡をくらませ逃去ぬ。程なくかの都乗物にて出來しゆる。従者を追散し。都に對して不言と。心の裏におもひけるは。後日に汝が所縁をたづね。此身を打れて修羅の苦患を救ふべしと誓をなしてとゞめの刀をつらぬきしが。彼苦痛に堪ざりしや。我小指を食切ぬ。時しも燕子花の盛にて。都が血しほ流れにしたゝり。燕子花のゆかりの色を紅に染かえしが。都が怨魂燕子花にとままりしにや。彼花の裏より一團の陰花燃出。都が胸もとより一羽の時鳥飛出てものかなしげに鳴去ぬ。其時行ちがひたる旅人は。我推量にたがはず露助汝にてありけるか。我都を手にかけし後。此庭の四季咲の燕子花。毎月上十五日は花枯凋。下十五日は花咲て。我又上十五日は常の如くなれども。

下十五日は瘧病をわづらひ。夜なく都が亡靈來りて我を惱すゆゑ。寢食ともにならずして。如く此瘦衰るへ。活ながら餓鬼道の苦しみをうくるなり。彼罪なくして刃にかゝり死したれば。うかまぬもうべと思ひ。一日もはやく彼が所縁の者に打れて恨をばらさせ成佛をさせばやと。所縁の者を尋ねるうち露助汝が面躰都がもさしに似たるゆゑ。もしや都が血すじの者かど心を付しに。金なくては命にかゝはる事ありとて。夫婦が歎といふ事を聞および。それに就て實否を探り試ばやとおもひつき。活首を質入せば。金をかしたかはさんと。わざと難題をいひかけしに。速に志かすべしといひしゆる。さてこそ一物ありと知り。無分別なる置き所。露といふ字の露助が露の命の質物も。我は風雅のためし物。わざと情なくあしらひて。燈臺となし辱しめて。側近くつかひしも。怒を起させ其實を探んためなり。又新躬の刀と偽りて。蛙鳴丸の奇特を見せしも。汝に我を疑はせ。汝が素性をまらしためにせしことなり。今日時いたりて恨をといめし燕子花の。所縁の色汝等が素性を知る。正に是都がみちびく所ならん。昔し輕大臣遣唐使に渡りしに。支那の人不言藥を飲めて瘧となし。身を彩畫頭に燈臺を戴しめて火を燃し。これを名けて燈臺鬼といふ。其子彌宰相。支那に往て父を尋ねといへども。姿變りたれば面を並べて知ざりけり。燈臺鬼涙を流し。指頭を食切血を出して詩を書く。これによりて其父なる事を知れりといふ。汝瘧となりて我をあざむく。我汝を燈臺となす。時鳥

血を吐おとしこひしといふ文字を書て姉の靈なることを知らしむ。都て是輕の大臣燈臺鬼の昔語によく似たり。汝さばかり身を苦しめて。姉の敵を打んとおもふは下郎に似ざる悌心義心。感ずるにあまりあり。母御のうくはしき謂はかくの通り。其夜母人にゆきあひしとは露を知らず。我幼年の時より持ておん見まりある此印籠。其所に落ありしゆゑに。軍用金を奪ひしも拙者か業ならんとおん疑ひは無理ならず。拙者が詞露計も虚言ならぬ證據とまうすは。此小柄の小刀に候とてさ出しぬ

(十一)紫の蛛もありけり池邊の盗人

當時老母小柄の小刀をうけとり。つらく見ていひけるは。是はこれ放駒の色繪の彫物。細工の妙よのつねならず。其盜賊が此小刀を手裏劍に打しとな。さいふ事もあるまじきにはあらざれども。さほど忠義をおもふ者が。千兩といふ大金を出し。五條坂の阿曾比吾妻とやらんを受出せしはいかなるゆゑぞ。奪はれし軍用金の千兩と。阿曾比を身請の千兩と。符合するに疑あり。汝浪人の身を以て千兩といふ大金をいかにして貯しぞ。又汝十六年以前剃髮の望のよし書置を殘して出奔したる身をもちて。今に剃髮もせず。活業もなき浪人に似合すなみならず。ぬ家宅の結構。衣服調度に美麗を盡す。これ以ていぶかし。これにも返答ありやといへば。

其御不審は實うべなり。遊君吾妻を身受せしには謂あり。元來拙者が初一念をつひでに語りて聞せばべらん。おのれ十六年以前出奔しつる意趣と申すは。かねて母人のおん詞に。我原嬖女の時汝を産たれば。汝は總領なれども妾腹なり。餘吾郎は弟なれども本妻の産給ひし子なり。我は本妻の遺言によりて後妻となる。其恩甚だ深し。必ず餘吾郎を鹿略にするとなかれとのたまひし事もあり。原父うへは養子にて。餘吾郎が實母は山咲の家娘なれば。實に家の血すちといふは餘吾郎なり。これによりておのれ父うへにまうし。家督は餘吾郎に讓給ひ。拙者は別家させ給はれと願ひけれども。總領をおき次男に家を續すべき理やある。これ順義にあらざるのたまひてうけひき給はざりしゆゑ。やむことを得ず出奔せしは。餘吾郎に家督をどらせたまゆゑに候。まろしめす如く拙者幼年より歌學を好み候ゆゑ。家を出て後なほ螢雪の功を積て古今傳受を相續し。歌學を教て世を過す手着とし。貴人富家にも弟子多し。それゆゑよろづに不足なし。まかるに餘吾郎五條坂の吾妻といふ阿曾比に相馴て。つひに行方まれずなりつるよし。然則は我存念も水の泡家を續べき子なくては。出奔志たる我までも。かへりて不孝なる道理なれば。且餘吾郎が行方を尋ばやと。五條坂に到りて聞しに。其在所を知者ありてをしへ候。吾妻は餘吾郎を慕てあるじの長の意に背き。雪責にせられて命もあやうしと聞しゆゑ。若吾妻餘吾郎が爲にあらぬ死をなしては。餘吾郎が罪を増道理と存じ。おのれあやしげなる妾に打扮

て。富士屋の後園に志のび入。身代千兩を殘しおき。吾妻を奪ひ出し。餘吾郎が栖の門外に捨て置て歸り。翌日又五條坂に到り。彼長に對面し。吾妻が年季の證書を取戻しぬ。表向より彼を身受いたしては。餘吾郎が放埒なほ世に廣く聞え。歸參の妨になるべしと。それをいとひてまかはからひ候なり。其身代千兩も。一富家に古今傳授をいたしつかはしたる謝物の金なり。彼を身受の證書にも。拙者が本名をあらはして。餘吾郎が名をかくし候ゆゑ。今五條坂の小歌にも。吾妻うけたす山咲餘字兵衛とうたふと聞。唯此うへは餘吾郎に一功を立させて。歸參をさせて。父うへのおん心をやすむるが願にて候へば母人さま此儀をねがひ奉ると。心底を委しく物語りければ。母は感涙をおとしつ。今は疑はれしぞや。義理ある子の餘吾郎に家を續せたくおもふは我も又かねての願ひ。いはずまて母子ともに。心の合しも不思議なりと。心とけたる物語を。聞て驚く露助が。なるか下りて手をつかへ。さてはあなは餘吾郎さまのおん兄君にて候かといへば竹右衛門うち點頭。いかにもさあり。幻竹右衛門といふは後の變名。實の名は山咲餘字兵衛。これにおはすは我實母淀瀬どのと申すなり。長物語りに時刻うつりぬ。いざ夫婦もろとも我を打て都に手向よ。とくく打と覺悟の躰。露助は頭を低今のおん物語をうけたまはれば。姉都を手に懸給ひしは。原忠義ゆゑになされし事に候へば。恨むべき理なし。殊更主人に對向劍のあるべきやといへば。餘字兵衛いぶかしみ。何といふ我をさして今更

に主人といふは何ゆゑぞ。汝かりに我奴僕となりつれども。それは原仇を報ん爲めの計畧なれば。我は主人に似て主人にあらず。露助いはく。其御不審は理なり。拙者去秋姉の敵を尋ねるため鎌倉に下り。おん父山咲庄司さまの僕となり。名を路平と申せしが。鎌倉にて其敵志れざれば。おんいとまを乞受。うへ見ればおよばぬ事のおほかれは。雨といふ字の笠を着て。露助と名をあらため。此村末にうつり住ぬ。去年十月それなる御母君の命により。餘吾郎君の御安否を聞ため。京都へ飛脚に参しも。侍女衆の取次にて。拙者は新参といひ奴僕の身なれば。おん母君のおん顔を見奉りし事もなく。拙者が面はなほ更におん見知あるべからず。纒の間に候へども。おん父君に仕へたる拙者なれば。餘字兵衛さまも則御主人。志らぬ事とて最前より無禮の儀を。ひとへに免し給はれど。身を轉してぬかづけば。餘字兵衛は打驚き。さては志かありけるか。父に仕へし者ならば。我を打ともいひがたし。さりながら所縁の者に打るべしと。都に誓し言を遂ねば。彼恨をばらすまじ。いかにすべきと思案の躰。於關は疎々すゝみ出。唯今の其小柄。妾に一目見せてよと。いひつゝこれを乞取つら〜見さだめ。いと驚きたるおもちにて。こは是放駒の色繪の彫物。裏に二見の二字を鐫。是は妾が目おぼえある物にて。兄鯨松が所持の小柄に疑ひなし。さては彼千兩の賊は妾が兄にてはべりしかといひて。虹のやうなる息をつき。面目なげにうつむけば。露助もち驚き。何といふ其小柄は汝が兄の

所持の物とや。とく其跡を物がたれといそがすれば。於關いはく。今まで連そふおん身にも妾が索性を語らざれば知たまはじ。妾が父は伊勢の國の樂人にて。二見太夫是次といひし者。母は於破矢とまうせしが母十五歳の時男子を産幼名を鯨松といふ。其後連て女子二人を産。其一人は妾にて。今一人は則妾が妹幼名を小蝶といふ。二人ともに幼時わかれ〜に他家へ去兄のみ家にありしが。兄は身持あしく。勘當をうけて行方志れず其後父は亡人の數に入り。母は妹の小蝶を連子にして。鎌倉小動の駕籠の塵兵衛といふ人に再縁志たるよし。七年以前其塵兵衛といふ人。旅人の忘れし金をあづかりおきたるに。其夜盗人に其金を奪れて分説なく。其急難を救ふために。妹小蝶は手越の里に身を賣。後に五條坂へ賣かえられ候よし。彼富士屋の吾妻といふは則ち妹の小蝶なり。去年おん身鎌倉に奉公の留主の間。朝夕の着手にこまり。歌占をなりはひとし五條坂にゆきて。はからず妹吾妻にあひ。委事を聞はべりぬ。兄の行方は今に志れざれども。此小柄は父の秘藏せし物にて。父存生の時兄に譲りしと聞ば。兄ならためてべき物にあらず。故に彼盗賊は兄にきはまり候と語りければ。露助はこれを聞。今あらためて汝にいとまをつかはす。夫婦の縁はこれまでなり。其ゆゑは賊人の妹を妻に持ては。盗泉の水をとるに飲。白波の立田の山に共に入て。おなじかざしの名を汚をばづればなり。必ず我を恨むといへば。於關は涙を流まかのたまふは無理ならず。悪人を兄に持しが我身のあしき宿世

なれば。いかでがちん身を恨べきといひ終て。一腰を抜放ち。ほどく自害と見へにけり。前
 程より門外に彷徨て様子を窺一箇の武士。やよはやまるなまばしまてと聲かけて走り入り。
 於關が自害の手をどいむ。於關はいぶかり此人の顔をつらく見て。ほのかに見おぼえある顔
 なりといへば。うち點頭。さぞあらん今更名告も面目なし。といひもはてず刀を抜て。腹かき
 出し突立れば。皆くこはそもいかにといひて驚きぬ。彼武士はいと苦しげに息をつき。餘字
 兵衛どの御親子は更なり。露助にも對面するは今がはじめ。拙者は則これなる女の兄。前の
 名は二見鯨松。今の名は鮎尾賀堂左衛門と申す者。我富士屋の吾妻に執心深く。今餘吾郎が妻
 となりしを嫉くおもひ。朝鳥の刀を買取。これを媒鳥となして吾妻をなづけ。餘吾郎が妻
 偽の刀を與へて去状を取り。吾妻を賺し出して我隠家に連歸りしに。吾妻が我に靡たる跡を
 なせしは。刀を手に入ん爲の計にて。我に油断をさせ。眞の朝鳥と去状を奪ひて逃出でしゆ
 る。ますく嫉怒にせまり。餘吾郎もろとも打捨んと。彼所へ急ぐ道すがら。此處を過りし
 に。此に吾妻が噂あれば。何事にやと彷徨て委細を聞うち。妹於關が自害の様子を見るに去の
 びずといめしが。これにつきて我身の懺悔おん聞あれ。我志あしきゆゑに。父の勘當を受け。
 其後漸々に零落して遂に野ぶせりの乞食となり。鎌倉を徘徊せしが。小動の駕籠の塵兵衛とい
 ふ者。旅人の忘れし財布の金をあらため居たるを。垣のひまより窺見て。其夜塵兵衛が家に志

のび入。其金を奪ひ出んとせしが。十四歳ばかりなる娘の寐顔のうつくしさにまばらに見とれ。
 頻りに嬋媛の心を動かし残り多く逃出しが。彼奪ひたる金七十兩にて衣服腰刀をとのへ。都
 へのぼりてまばらく彼地を徘徊せしうち。偶五條坂に到り。阿曾比等のゆきかひを見物せしに。
 其うちにかの塵兵衛が娘あり。前に比ればなほ十分の美色をませり。其名を聞ば富士屋の吾妻
 といふ。彼阿曾比となれば我望みをどぐるに安しと。喜しく思ひて富士屋に到り。吾妻を揚て
 まみえんことを望み。度々かきくどくといへども。彼我をいみ嫌て一夜の枕もゆるされば。
 ますく心をなやまし。何にまれ金おほからではと悪念増長して。再び又鎌倉に下り。月影ケ
 谷の軍用金千兩を奪取し盜賊。其放駒の小柄のぬしは則ち是れ拙者なり。其後我吾妻が爲に金
 銀を瓦石の如くすれども兎角靡ざれば。寧ろかれが身を贖出すにまかじとおもひ。かの千金
 を用ひんとおもひしに。雪の夜行方まれば。今門外にありて此妹が物語を聞ば。かの塵
 兵衛が娘は我妹の小蝶にて。我かの金を奪しゆゑに。其の金のかはり身を賣て。吾妻といふ
 阿曾比となりし物語。夫とは知らず我は又其金を吾妻が爲につかひ捨しも。皆是れ悪の報なら
 ん。志かのみならず塵兵衛を。現在母の後夫とまらず。母にも面を合されば。彼所に居とは
 露おもはず。妹小蝶は幼時他へつかはしおきたるゆゑ。素たがひに顔を見まらず。まらぬこ
 とはいひながら。同胞の妹を戀慕ひ。種々鼻悪をなせし事。豈に天罰をまぬかるべき。かれ

我をいみ嫌ひ一夜の枕もゆるさいりしは。今おもへばせめて我幸ひにて。畜生道におちいることば脱たり。めぐる因果は小車の不孝の罪の火の車。それに引かえ二人の妹は。孝もあり貞もあり。彼等にはちて年來の悪念を。今一時に轉して。善に到りし此自殺。みづからそれと名告て出。懺悔に罪を滅して死ねば。せめて未來はたすかりなんと。云ひ終て於關にむかひ。これ妹今更めて兄弟の縁を斷しぞ。これ露助。於關は我と兄弟ならねば。おなじかざしの名は汚さじ。もとの如くに連そひくれよ。又別にいふことあり。奪たるかの千兩の半は其儘船岡村の我隠家に残しあり。和主とりてかのおん館に返しくれよ。たのむくと云残して。刀に手を懸きりくと引まはせば。於關は苦痛を見るに堪ず。悲歎の涙にむせかへる。さすが強氣の堂左衛門。刀を投捨てかの土壇に這寄て。みづから我襟髪をかきあげつ。いと餘字兵衛どの軍用金の盜賊を成敗して。おん身のあかりを立給へといへば。餘字兵衛目をまばたき。都がために打るべしとおもひし我は打れがたき義理出來り。はからずして懐に入窮鳥を手にかくるも。わたくしならぬ世の掟はせんすべなし。南無阿彌陀佛と聲もるともに首打ちおとせば。於關は軀にとりつきて。聲を放て泣きけぶ。老母淀瀬も露助も。暗に落涙たりけり。かくて餘字兵衛堂左衛門が首を取上て露助に對ひ。我此首を受おさめられたれば。汝が首の質物は其儘返しつかはすなりとて。質物の證書を投與へ。前程返せし此五十兩の金は。堂左衛門がとも

らひ料につかはすとて。金の包を於關にあたへ。さて堂左衛門が首に彼小柄の小刀をさしつらぬき。首桶に載て母の前さし出し。いと軍用金の盜賊の首おん受取くださるべしといへば。老母はうち點頭。此首を受とれば。我うけたまはる役目もすみ。彼志のをつく五月雨に。汝が着たる濡衣も。今ぬぎ捨てあきらかなりとて喜べば。餘字兵衛また露助にむかひ。我曾て剃髪の望みありといへども。都が爲に打るべき心ありしゆゑにいまだこれを遂す。今汝が刀にて我髪をきり。せめて都が恨をばらさん。母人さま家督の儀は餘吾郎に續しめたまひ。拙者には剃髪をおん免したまはるやうに。父うへに願てよといひつゝ露助が刀にて髪をきりはらひ。今より祖父の法名淨閑の一字をとりて。山咲窓閑と名を更ため。神祇釋教戀無常を。狂言綺語にとりなして俳諧の連歌といふ一派をひらき。讚佛乘の因となして。都が菩提のためすべしといひ終りて。片手に手燭片手には。斬たる髪を握りつゝ。庭下駄を踏みならして飛石づたひに池に臨み。手燭をあげて水鏡に面をうつし。嗚呼病になやみて我ながら。見たがふばかりに衰へたり

窓閑が姿を見ればかきつばた
と口すさみけるが。再又一陣の風おろし來て。庭木の梢を吹ならし。池水皺して愁ふが如く。忽まち燕紫の花搖動して。一道の炎火閃々と燃上りければ。手燭を撲地取おとし。又ふるひ出

す瘡病に。身上わなき足軟て。うち倭儻を踏みとめつ。吐息さへも苦しげにて。炎火にむかひ

のまんとすれど夏の澤水

とたからかに脇匂を吟じ。恨をばらして成佛せよ。南無阿彌陀佛とどなへつ。手に持たる鬢を池水に投入れば。又燕子花ゆらくと動きて花の裏より紫雲を生じ。鰥鰥として空にたなびき。一羽の時鳥飛び出て。一聲鳴つゝ光を放ちて西の空に飛び去りぬ。此時窓閑が胸中忽ち朝かになりて。病は頓に癒たりけり。是都が怨靈窓閑が一句の妙に感伏し。恨みをばらして得脱し。成佛志たるに疑ひなしと。露助於關愁ひの中に喜びを交えたり。鬼神の心をも感ぜしむるといへるはかゝるたぐひなるべし。窓閑又母にむかひ。おん聞きおよびも候べし。主君判官の御秘藏に。二振の劍あり。其一振は小鳥にならずらへて。朝鳥と名け給ふ。これ日中の駿鳥にかたどりて陽の太刀なり。今ま一振は此蛙鳴丸にて。これ月中の蟾蜍にかたどりて陰の太刀なり。おのれ少年の時主君より拜領の劍なれども。かく姿をかえて隠者となれば用ふべき所なし。これを餘吾郎につかはされくだされかしといひてさし出せば。母は益々感歎す。かゝる折しも門外におん迎ひ候とよばりて。淀瀬が従者等提燈把て來りければ。老母は首桶と蛙鳴丸を携さへて立上り。我は一旦旅宿に歸る。さらばと別れを告げまづと歩み出て。乗物に

うつりければ。窓閑露助於關もどもに門おくりす。此時露助南方十字兵衛が忠死のことを語らざるは。これを語れば十字兵衛がころざしを失なふ理あればなるべしさらぬだに短夜なれば。はや曉に近かるべし。夜の明ぬ間と窓閑は露助於關に下知をなし。空櫃を假の棺となして。堂左衛門が軀をおさめさせ。ぬびれたる二人の僕をよび醒まして擔しむれば。露助夫婦は左右にそひ。鳥邊野さして出去ぬ。窓閑は其跡を見おくりつゝ

うたい袖白妙の卵の花の。雪の夜もまらくと。あくる志のよめの朝紫の杜若の花も悟りの心ひらけて。すはや今こそ草木國土すはや今こそ草木國土。悉皆成佛の御法を得てこそ。失にけれ

と謠曲杜若の切をうたひつゝ歎息して一間の裏に入にけり。時に又池のあたり籟々音しけるか。燕子花のまげりあひたる裏より。衣服は更なり。覆面頭巾。丸縫の帯。手覆。裏脚に至るまで。都て一様の紫に打扮たる志のびの曲者あらはれ出て。四邊をうかひひ振足しつゝ。亭座敷にのぼりゆきて。彼處にありし朱塗の手箱を奪ひ取り身を轉して出んとする。窓閑は奥の間より出來りこれを見つけて呼戻せば。曲者は刀を抜て斬つけたり。窓閑は身をひねりて。手ばやく刀を打落し。朱塗の箱を取戻して。腕ねぢ上つゝ唯一言。紫の朱をうばふをにくむといひて引すゑける時。たちまち鳥鳴て夜はほのくと明わたりぬ。此曲者の謂れ。ならびに彼

箱の裏なるはいかなる物といふ事。六の巻に志るして詳かなり。

雙蝶記卷之四終

雙蝶記一名霧籬物語卷之五

江戸 山東庵京傳編

(十二)窓錢のうき世をばなす主人の合力

扱も南方十字兵衛が兒子南餘兵衛は。母真弓一子窓太郎もろどもに。前の年鎌倉を啞方拂ひになりて彼郷を立退。身をよする陰だになければ。一所不住に伶俚けるが。母いひけるは。夫十字兵衛どの不忠をなし給ふうへに。自己刃を以て非命に死し給ひぬれば。冥途の苦患もさぞかしとおもひやらるゝなり。故に今よりおもひ立。西國順禮してせめて夫の罪障を消滅し。佛果を得給ふよすがにもとおもふなれど。我老て足弱ければ。遠國の歩行かなはず。これをいかにせんと打歎いふ。南餘兵衛は元來孝心深き者なれば。母の望を遂めんとおもひ。そはよきおぼし立に候。いかにもしておん供いたし候べしといひて頼にうけがひ。少の貯を出して親子三人着すべき禪衣小笠手覆裏脚のたぐひの旅の具をどゝのへて。あらかじめ其支度をなし。二箇の篋をつくり。前に母後に子を乗しめ。總擔を以てこれを荷。長き旅路に出立けるが。少の路銀もはやくつかひ盡しければ。道すがら往來の旅人に一錢二錢の情を乞て。其日／＼をおくり

ゆきぬ。されば南餘兵衛うたひもなれぬ順禮歌をうたふに。おのづから謠曲の節のまじれるも
 理なり。母はかれたる聲の齒をもりてうたへば。忍太郎は順禮に御法施と。吾もまはらぬかた
 ことの聲いと哀にて。わきまへのなき幼子の父親に荷れながら。柄杓打ふる片手業に風車まは
 しつゝ遊ぶ躰を見る人毎に涙を落し。情をかけぬはなかりけり。かく物を乞ツ、行旅なれば道
 もほかどらず。木の實をひろひて飢を志のぎ。流を掬して渴をたすけ。野原の露に袖を片敷。
 木の下草にひれ臥て夜を明すなど。悲き事の數くは。いひつくされぬ旅なれども。御佛の擁
 護やありけん。恙なく日敷をかさねて。三十二个所の靈場をめぐり。第三十三番目。美濃の谷
 汲に到て満願し。夫より又都の方へのぼりゆきぬ○俊成卿の歌に「よろづ代に千代をかさねて
 八幡山。君をまもらん名にこそ有けれ」と詠せられし八幡山は。京を去こと四里餘にして。則
 山城國の南界なり。當時男山護國寺の本尊。白檀の藥師佛開帳あるによりて參詣の人群集し。
 綿々絡繹として往來まばらくも絶ず。いと賑けるにぞ。是に乗じて利を得んと思ふ者。此處彼
 所に假家をつくり。酒肴餽飪可漏子を商家あり。砂糖饅頭齋饅頭餅菓子賣家あり。心太賣の
 店には水機關に巧を盡。花賣の軒には青柳の系をなびかす。山崎の小櫃の繪も深草焼の彩色に
 けおされ。糰餅の螺の形も編笠焼に像を奪はる。賣卜は著を捻。藥賣は長劍を撫す。宇多天皇
 に十一代の後胤伊東が嫡子とうたふ曲舞女あれば。蚤の焼藻の夕煙とうたふ琵琶法師あり。福

廣聖の辻談議。妙高尼の針供養。鐘鐺の勸進。高足駄の行者。綾織。八から鉦のたぐひさへ。
 ちのがさままゝ集り立り。幻戲。刀玉。縁竿のたぐひの奇妙の術を施者は更なり。一寸法師の
 蟻娘舞。輕業の骨なし骨あり。伊勢國より活捕てゐて來つる鬼女。親の因果の子に報つる蟹滿
 寺の蛇女。猿の俳優。犬の脱籠。頼政が射て落しつる鶴。廣有が箭にかけつる怪鳥のたぐひは
 更に奇どせず。若狭の八百比丘尼が嘗殘しつる人魚。朝比奈の三郎が捕へ來つる焰魔鳥など。
 見もおよばぬ鳥獸。聞もつたへぬ蹄人。あやしどあやしきものを見する假家。所せきまで立な
 らびて。縹の職野交の幕。片として風にひるがへり。楊弓の音辻打の。太鼓にまじる噴吶の
 笛かまびすきこえて。諸人の耳目をおどろかしむ。かゝるなかに薦簾掛。假家つくりて。外
 の方に怪き獸の形をゑがきたる招牌をかゝげ出したるあり。片膚ぬぎたる男戸口に立。扇をひ
 らきて往來の人をさしまねきつゝ。聲たかやかによはひいへるは。これ此招牌を見給へ。そも
 これは雷獸といふものにて。雷につきてありく獸なり。これは安房國二山の雷狩に活捕得たる
 なり。これ見給へ家土産によき話柄ぞ。招牌に露ばかりもいつはりあらば錢取候まじ。見給ひ
 て後おこしねど。聲かるゝばかり言は。見物の諸人蟻のごとくに集ひ蜂のごとくに群て。假家
 の裏に入。こちおしあちおしひしめきあひぬ。かくて日も西にかたふきければ。參詣の諸人足
 をはやめてちのがさままゝ家路を急ぎて歸去けるが。忽寂寞として跡に残れる物は。早瓜の皮

の脚手の形もたる。魚の骨の野ざらしめきたる。懐紙の屑。緋緞の塵。破れたる襦のたくひのみなり。前程より彼假家のほどりに物乞居たる勸進聖。あたりに入なきを見て彼方をさし招きければ。笠ふかく着たる煎じ物賣。荷を擔てこゝに來たる。彼勸進聖頭髪をかくせし頭巾をどれば。是乃箕腹蟻右衛門なり。煎物賣笠をどれば。是乃袴田紺九郎なり。さて蟻右衛門四邊を見まはし聲をひそめていへるは。あのれ鎌倉より時來つる路用の金を五條坂にてつかひ果し。おもひかけず俄に浪々の身となりつれば。他國へ立退べき路銀なくせんすべもなければかく姿を扮し。物乞をしていたづらに日をおくるなりといふ。紺九郎いへるは。あのれも左の如く時なきゆゑに。かく煎じ物賣となりてさまよふなり。かくては隠謀をくはだてつるかひもなし。かの蛇ヶ谷の老女今志かゝの所にかくれ住よし。且路用の金を得良計を施して彼所に去。老女にまたがひて宿望を遂るに志かじと。兩人語居たる處に。蟻右衛門が奴僕沙土七いそがはしく來り。兩人にむかひていへるは。去年五條坂にて再會の所はかやうくとのたまひしゆゑ。彼所にありて數月待詫候へども。音信だに志たまはざるゆゑ。やむを得ずふたゝびのぼりて。所を徘徊し。おん兩所のおん行方をたづね詫候。他のことはおきて且はやくきこえあぐべきは。山咲庄司頃日上京きて。おん兩處を捕へんと志のびくたづね候よし。御油斷あるべからずといふ。蟻右衛門これを聞て打驚。志からば此地にも長居はならずといひて當惑の躰なり。

紺九郎いはく。庄司京都に逗留して居るとならば。我く兩人不意をおそひて打とるべしといふ。蟻右衛門頭をふりていはく。いなく彼は無双劍術の達人なれば。容易に手をくだすは危し。だまし打にするに志くべからずといふ。沙土七又いへるは。山咲餘吾郎狂氣して此邊を狂ありき候よし。庄司を打おぼしめしあらば彼をも打給へ。生おき候ては狂人といへども後日の害なるべしと。いまだいひもをばらざるに。氣ちがひよ泡齋よと。童等のいひはやす聲聞えければ。沙土七彼所を顧て。かれは正しく餘吾郎に候はんといふ。蟻右衛門いはく。志からば汝面をかくし。暗に彼を打捨よといふを耳につきて耳語ければ。沙土七は打うなづく。蟻右衛門は紺九郎をともしなひ。つひに此處を立去ぬ。沙土七は願かぶりして面をかくし。裾端折て帯に高くかいばさみ。刀の目釘をくひまめし。假家の陰に身をよせて待居たり。さて餘吾郎は堂左衛門が善心になりて腹きりしことは露まらず。彼が行方をたづねるために偽狂人となり。髪振亂し竹の枝を打かたげて。足も志どろに狂ひ來る。後につきたる童等口く言言て打笑へば立留り。童等何笑ふ。物狂かおかしいや。うたてやな。春にそだつも花さそふ。菜種の因を蝶志らず。菜種は蝶の果を志らず藻に住蟲のわれからと。狂ふ袂に風の葉の。亂れて露のおきもせず。寐もせでむすぶ夢心と。うつなきといひて泣つ笑ひつ伏まるふ。童ども立去て。折よしとや思ひけん。沙土七は物陰よりあらわれ出て。唯一打と斬つくれば。餘吾郎はむくと

起て身をかはし。聞やいな。うはの空なる風だにも。松に音するならひありといひつゝ扇をひらめかして。又きりつくるを拂ひのけ。眞葛ヶ原の露の世に。身をうらみてやあけくれんど。いひつゝあしらふ扇の手練。こなたは汗もまどゝにて。秘術をつくせど手にあはず。頭をのぞめば身を洗め。裾を拂へば飛上る。ひらめく剣は雲の電光。餘吾郎が身のはたらきは。波上の燕子に異ならず。狂ひめぐりかけめぐり。一ツ所をいく度も。ゆきては歸りかへりては。又行雲の旗手より。折からちとす青嵐に。梢木の葉もはら〜。淀の川音さら〜。雲の端袖もひら〜。かなたへなびきこなたへなびき。狂人走ば不狂人も。打もらさじと早足を出し。あどをしたひて追去ぬ。〇時は五月の半なれど。送梅雨も降ずよくつゝきて。天氣快晴なりしが。此日は夕方より雨を催す雲起りければ。道行人も家路を急。往來絶たる八幡堤に。編笠深く着たる武士。一僕具して歩み來り。辻に立たる石地藏の陰に立やすらひて僕をちかづけ。何にかあらん耳語ければ。僕は手をおし揉つゝ。あふせの如く今朝ほどはからひ候といふ。かの武士はよし〜といひて打うなづき。又何やらん耳につきて耳語。懐より金財布を取出して渡しけるに。僕はこれを受取てうちうなづけば。かの武士はもと來し道へ歸りゆく。志もべはあどにとままりて金財布を掌にのせ。おもみを試て獨言にいへるは。さて石瓦どちがひ金のおもみは別なる物ぞ。五十兩といふ金を志もべの我にあづけ給ふも。我正直を志り給ふ故ならめ。

人は日來が大事なりと。無益ことを咬折しも。沙土七は餘五郎を見失ひ。こゝのくまかしこのくまに目をくばりつゝ。此處まで尋來しが。かの志もべが獨言をいふを聞て暗に喜び。稻村の陰に立かくれ。なほ様子を窺をりしも。暮六ツの鐘鳴々と耳に近く響きければ。かの志もべはこゝろづき。財布を懐におし入て。足ばやに走去んとしたる處に。沙土七つと出てゆくさきに立ふさがり。ものだにいはず彼志もべが懐に手をさし入。財布を擲て引出せば。彼志もべは沙土七が腕をどらへて財布をもぎ取。膽のふとき盗人め。我命より猶大切な此財布。汝にとられすむべきか。妨せば一打にすぞ。其處退て通すまじきやと。一腰の柄に手をかけ。臂をおしはりて罵ば。沙土七は胡盧。毒蛇の見いれし其財布。とく〜渡せとよばりて。又財布を奪取。逃去足にとりつきて引戻し。取返さんと捻合しが。沙土七が一身の貪欲手頭に凝あつまりしにか。打と擲と財布を放さず。互に双袒おし脱て髻をつかみ合。或は倒或は起。上に重り下に敷れ。汗もまどゝに息もつきあへず。力を盡て揉合ぬ。かくありける時男山の見せ物師等。錢箱木戸札太鼓噴响のたぐひの見せ物の具を携て歸道。丸木をもつてつくりたる圈の裏に彼雷獸をいれ。これをさし荷ひにして來しが。はや黄昏のほの闇き裏に。組つほぐれつ争此方の二人に撲地つきあたりぬ。此方の二人は暗き裏に見せ物師等をたがひに相人とおもひたがへて。或は踢倒し踏倒しければ。見せ物師等はこは狼藉者よ醉狂人よといひて睨まどひ。ぬけつ潜つ

身を避とす。彼僕はいそがはしきうち。見せ物師等を盗人の加勢ならめとなほおもひたがへて。一腰を抜放して打振ける。其刀の光り暗裏にひらめきければ。見せ物師等はこれを見て膽を消。雷獸の圈を其儘地上に捨置てぞ逃去ける。沙土七も刀を抜。刃さきもまどろの探り打。空にひらめく電の。光を走るべに打こむ刀。丁々まどろ打合しが。勝負つかねば刀を投捨。なほ財布を引合て。取つとられつ争時しも。電光いそがはしくひらめきて。雷聲聴々と鳴出しけるが。彼雷獸雷氣にもよほされて忽勢猛くなり。繫たる鐵の鎖をひききりつ。さしも堅固につくりたる丸木の圈をめぐりと押破りて躍出。總身の毛を逆立鼻を吹いからし牙を咬ならし眼中より光を放て狂ひめぐりければ。二人の者は大に驚き身を避つ。なほ財布をあらそふはづみに。財布の紐雷獸の首にひき掛りければ。二人の者はこれをとらめとおそる。追めぐりける時雷聲漸々近く鳴て。空より一むらの黒雲まひさがり益暗くなりてあやめもわかたざりしが。雷獸は此雲に飛上り。首に財布をひき掛たる儘にて。矢を射る如くに天上してけり。かの僕も沙土七も電の光に就て空を見あげ。これを志たひて追ゆかんにも。翼なければせんすべなく。唯惘然として立居たりしが。兩人一度に尻居に倒れて。大息つきてぞ居たりける。○夫孝は百行の先なり。孝天に至る則は風雨時に順ひ。五日に風吹十日に雨降。孝地に至る則は萬物化盛し。草木もよく花咲實のり。五穀豐饒なり。孝人に至る則は其家に衆福來りて。貧人も

忽ち福者となる。古今其例すくなからず。されば孝行の徳の尊きとたふべき物なし。孝なる人は天の憐をかうふりていみじき福をうけたもち。孝ならざる人は天の憎みをうけておそろしき災にあふと影と響の如し。原孝の字をつくるに老の字のかたへを省て子の字を添たり。是老たる父母の傍に子ありてよく仕ふるを孝とするの謂なり。老たる父母をもちたる人。此字の形にならばずんばあるべからず。去程に南餘兵衛は。西國順禮をなし終て母の願望を遂しめ。それより山城國に到り。狐川を左にとり。河内へ越る坂道の村末に。人の住あらしたる古家を借。母子三人まばらく此に月日をおくりぬ。其家のさまは二階づくりにて。奥の間もありながら。軒端かたぶき壁くづれ。骨あらはにうちよるぼひ。窓には蘿葛はひまどひ。庭には葎生茂り。板敷も朽簀子も破。床の下より草生出などしていぶせさはいはんかたなし。素一錢の貯もなく。なすべき活業もなければ。童の翫物にするいろくの笛。牧童の横笛。盲法師の一節截。喇叭噴唢笙の笛のたぐひさへ手細工につくりてこれを賣ありき。鹿笛にかなしき秋をちもひ。鶯笛にわびしき春をむかへ。わづかなる價を取て母を養ひ子を育れば。夜の衣薄くして曉の霜冷じく。朝氣の烟絶くにてつねに飢がちなり。素孝心深きものなれば。父十字兵衛が非命に死せしを今に悲み。鳥邊野の葬所にまばく詣て是を祭ること懇なり。母はいろくの辛苦のつもりけるゆゑにや。聾となりて大聲にいふとすら聞へず。餘兵衛はこれを歎き。ますく

孝順につかへて心をもちうる事切なり。貧きなかにも母には味よき食をすゝめ。おのれと子は
 麤食を食ふ。志かるもなほ足ざるときはおのれは飢を志のびて食せざる日もおほかるなり。さ
 れど母には食したるけしきを見せて其心を安からしむ。もちうべき錢ある時は魚肉あるひは味
 よき餅菓子の大々ひを求めて母にすゝめ。其喜の色を見てたのしめり。子の窓太郎はいまだ五歳
 にてわきまへなければ。共にこれを食べといひて泣を。餘兵衛阿こらして食しめず。母の十分
 に食するを喜びぬ。おのれは常に襪のみを着て臥。母には衾をあつうして臥しめ。なほ寒か
 らん事をおもひて母の熟睡をうかいひ。おのれが一重を脱てこれをおほふ。母睡を醒して餘兵
 衛が臥たる方を見やり。彼が薄着をかなしみて我に着たる彼襪を又餘兵衛におほひ。孫はお
 のれ抱き。衾をおほく孫に着ておのれは寒さをいとはず。餘兵衛目醒れば又一重を母にゆづる。
 一夜のうちに親子一重の襪をゆづりあふこと度々なり。母の慈と子の孝とおほむねかくのこ
 とし。是等はすべて此前の事ぞかし。かくて五月のなかばに至りけるが。餘兵衛益々困窮して。
 米屋薪屋古手屋などに債おほくいでき。彼輩夫をきびしくはたりければ。さま／＼に詞をつく
 して云延。母に志らせまじと心をつかひぬ。餘兵衛熟もひけるは。頃日母の容躰を見るに瘦
 かじけ日にまさりて衰たまふ様子なり。我貧中にも母には折／＼魚肉をすゝめ。食の乏からざ
 る様に心をつけまゐらするに。漸々に衰給ふはいぶかしき事なり。試すはあるべからずとおも

ひ。一日あざらけき魚をもとめて手づから叮嚀に調理。あらたに飯を煮てかの魚肉をそえ。母
 の前にそなへおき。拙者は物賣に出候へば。ゆる／＼かにこれをめしあがり候へかしといふこと
 を。指をもて掌に書て見せければ。母はいと喜べるさまにてうち點頭ぬ。餘兵衛は直に商ひに
 出る躰をなして立出。家の傍なる竹林のうちにかくれ入て。裏の様子をうかいひ居たり。母は
 かくありとは露老らず。孫の窓太郎を側近よせていふやう。いつもの如く汝此魚を食せよ。父
 の歸らざるうちにとく／＼といひつゝ箸を把て彼魚の肉をむまり。咽に骨をたつるなどいひて
 食しめければ。窓太郎はいとうれしげに舌打して食ふ。眞弓は其けしきを見て胸ふさがりける
 が。志ばしありて涙の目をおさへ。あな不便や。餘兵衛我に孝なるゆゑに。いとをしき子の食
 を減じて我には食を飽しむ。故に汝は飢がちにて。僅の魚肉を食しむるも。餓鬼に百味の飲食
 を與たらん様に喜べり。我争是を獨食するに志のぶへきや。若父が歸てどばい。魚は此祖母が
 のこらず食ぬるといへ。必汝が食しといふべからず。といひて皆窓太郎に食しめ。おのれは
 一箸だに食ず。荒屋は晝も豹脚のおほきうるさしよ。といひつゝ團扇を把て窓太郎をあふぎや
 りぬ。餘兵衛は壁のくづれたる所より暗に此躰を見て落涙し。扱は母人孫を深くいつくしみ給
 ひ。我まゐらす食を我家にあらざる時は皆窓太郎に與へ給ひ。みづからは飢をしのびて食し給
 はざるゆゑに。日にまさりて瘦衰給ふなるべしと思ひて。且驚且歎けるが。はやく黄昏の比

となり。雲の間より電光ひらめきて。遠く雷の聲ひいき。やがて雨降來べく思はれければ。やをら竹林の裏を出。外の方より歸り來つる跡をなして裏に入。母の前にぬかづきて。今日しも錢おほく得て歸候。これを見給へといふを仕かたにして見せつ。懐より錢の袋を把出して見せければ。母は喜び。おもひしよりも歸のはやかりしぞ。前程の魚いつよりもなほ美味にて。おぼえず食を過せしなり。我今日は何かにまぎれていまだ看經をせず。我はこれをすべければ。汝はまばらく休息せよと云て。念珠を袖くみにつまぐりつ。灯火を把て奥の一間に入にけり。餘兵衛は門首の戸を引よせ。引窓の戸を立などして雨の降べき用意をなし。方灯を取出して。火打の石火電光も壁の破れを漏風に。硫黄の花を消れじと。心の闇の袖屏風。寐冷させじと子を思ふ。親の心を去らぬ子の。まろび寐したる窓太郎。食に飽てやすやくと。こゝろよげに睡つ。餘兵衛は獨手を父きて。心の裏にも孝養を盡すべきにくちをしさよ。母人の心ゆくほどに窓をに。おん身の衰を願給はず。かくて日を過し給は。餓死たまはん事必定なり。高祿を給はりし昔の身ならば。いかほどにも孝養を盡すべきにくちをしさよ。母人の心ゆくほどに窓太郎を養はんにも。糧不足なればせんすべなし。唐土の孝子は親を養ふ其ために。子を埋めんとしたるもあり。我運命盡ずもし天日の光りを見ることありて。ふたゝび妻妾を娶は子は又も得らるべし。母は再得事あたはざれば。窓太郎を失ひて一口を減じ。且母の銀を去絆をとく

にまかじ。まかれども子を捨るは世の制禁なればすべからず。今夜ひそかに刺殺し。母には他にあづけつかはせしともいひて當座をつくらふべしと心をさだめ。壁に掛おきたる刀を把て立むかひけるが。かくとは去らぬ窓太郎か寐顔の愛らしさに氣おくれし。あまりにいとをしくていづくに刀を立べしともおぼえず。目もくれ心もきえはて。前後不覺に泣伏ぬ。折しも奥には母真弓が看經の聲鉦の音も。細火陰に焼捨し。蚊遣の烟も鳥部野の。むなしき空を見る端かとおもひつゝむせかへりて。まばし歎に沈しが。さてしもあるべきとならねばとおもひなほして。すでに刀を抜んとしたるに。いかにしてか抜ざりけり。心つきてよく見れば。此刀を壁に掛おきたる時。窓太郎が守を入し巾着に。迷子の札をくもり付たるを打懸おきしが。其紐刀の鏢にまどひつき。留となりて振ざるなり。餘兵衛これをつら〜見て。又氣をくむくときしもあれ。魍々ど鳴神のひいきも遙遠里に。迷子をよぶ鉦太鼓。いと哀をそえにけり。嗚呼人の親の心は闇もいとばずして。子をたづぬる者もあり。宿世のあしき因果にて。貧身にはなりさがれど。子には怪我だにさせまじと。これ此ごとく守巾着つけさせしが。親の手にかけ殺す子に。劍難除は何事ぞ。冥途に迷はす幼子に。迷子札も無益なり。幼て死す者は罪科もあるまじと思へども。父母養育の之恩を。おくらで親に先立ゆる。不孝の罪の重しとさく。定業すらさありといふ。况刃にかけられて。非業に死は窓太郎。佐比の河原に迷ひ去。砂を集て塔を

積。さぞな呵責に苦まん。我は一生貧くとも。彼をばよく生立て。老後の力亡後は。親の棺を
 昇さめどもおもひ思ふて育し子を。我手にかけて身を屠。いづれ流は順なる水をさかしまに。手
 向べしとはおもひきや。親子は一世の縁と聞ば。もふ來世でも逢れぬ我子。永劫顔の見おさめ
 と。寐顔をつら／＼打まもり。恩愛深き悲みに。身を刻るゝおもひして。落す涙は五月雨の。
 鏡にあまる如くなり。餘兵衛は元來丈夫にて。男魂失はざる者なれども。かく女々しき線言
 いふは。子をおもふ心の切なるゆゑと。更に哀深かりけり。奥の間には母眞弓。龔のかなしさ
 は。こなたの物音歎も去らず。看經の鉦打おさめ。心の裏にもおもひけるは。餘兵衛錢袋に小石
 を入折／＼我に見せて。我こゝろをやすからしむ。とくよりこれを悟れども。さあらぬけしき
 にもてなすは。我又彼が心を安からしむべくおもへばなり。彼がありさまを見るに。貧苦にい
 たみ瘦衰て。年若けれども氣力なく。ほど／＼命もあやうげなり。まかのみならず孫までも飢
 がちなれば。よく育べうもおぼえがたし。此母が身は年老て。残れる雪の日影待間の命なれば。
 何あしむべき。我一口を減じ彼が絆を断て辛苦をばぶき。生さきある子や孫の命にかはり。冥
 途に到て十字兵衛どの、死路をたづね。露ばかりも苦患をすくひまゐらすにまぐべからずと覺
 悟をきはめ。かねて亡後の經帷子にとおさめおきたる禪衣を取出し。剃刀どもに携て。餘兵衛
 に知られし曉られじと。拔足するも龔の。おのが耳には聞えぬと。外へはもるゝ簀子のうへ。

折から降來る大雨の音にまぎれて忍びつゝ。彼方の二階にのぼりゆきぬ。かゝる時しも笠の下
 に覆面し。蓑打著たる一個の武士。此家に近く歩み來る。其跡より顯かふりに面をかくしたる
 曲者。刀を抜をばめて着來り。こなたの武士をだまし打にせんとおもふさまなるが。電光れば
 身を隠し。暗くなれば又あらはれ出て打んとねらひ。隠つ出つ度／＼すれども。かの武士はこ
 れを知ざる様子にて。いとあやうくぞ見えにける。餘兵衛は泣沈て居たりしが。母の看經の聲
 やみければ。見つけられては妨げとおもひつゝ。やがて心を取なほし。畢竟母の身がはりに
 殺す子なれば歎くべき事にあらざとおもひきり。恩愛の絆となりし守巾着の紐をひききり。刀
 をすらりと振放して。ほど／＼刺殺さんと志たる時。虫が志らすか窓太郎。あなやと寤て目を
 醒し。起上りて泣出し。婆々さまはいづくにおはす。婆々さまと寐々すべし。婆々さまのうと
 さけびつゝ。奥の方へゆかんとするを。心づよくも引戻し。おもひをさせじとおもふにぞ。泣
 さけぶ子を引よせつゝ。手拭とりて目口をふさぎ。引窓の繩たぐりよせて腰に結付。放打に
 おもひしが。獠者にとらはれし。猿の子繫し如くにて。目もあてられぬ姿なり。あなかはひや
 そちが腰に結つけしは。菩提のために讀誦する經卷の紐とおもへ。南無阿彌陀佛ととなへつゝ。
 振上る刀の下にまはる子の其姿は。北音盲に異ならざれば。平日の遊びをおもひ出して。鬼わ
 たしの鬼よりもなほおそろしき我仕業と。おもへば又も刀の手さきたゆみけり。彼方の二階の

暗裏には母眞弓。禪衣を身におほひ。口には念佛手には念珠。剃刀を把上て。吮をきらんとおしあてたり。此方の餘兵衛もおもひきり。南無阿彌陀佛といふ聲もろとも。又振上る刀のひかり。あはやとひらめく電の。目を射るばかりに家内を照し。忽一聲霹靂。絹裂ごとくに鳴響て。頭の上に落るかとおもふばかりにきびしければ。餘兵衛が刀の手の裏もおほえずくるひて。窓太郎が身にはあたらす。腰に結し窓の引繩すつばときり。ぐはらぐはらぐとひらく戸の。裏に降籠雨とともに。小判の山吹散亂して。井手の嵐どうたがへり。彼方の二階に覺悟の母も。電鳴におどろきて。おぼえず刃物を取落し。うつぶしにぞ伏たりける。此雷一團の火炎となりて。彼武士を打んとぬらふ曲者の頭上に落。身軀碎死てげり。餘兵衛是をば露とらす。小判の降しをいぶかりてあふぎ見るに。引窓に這かゝりたる葛葛に財布かゝりて。其裏より亂落たる金なりけり。折しも人のおとなひして。さてもきびしき雷よ。必定此邊に落つらん。命びろひをせし事よ。和主の臍は恙なきかと眩つ。門の戸をひきあけてつと提灯をさし出せしは。米屋薪屋古手屋の輩なり。餘兵衛は抜射を背後にかくしていそがはしく。いひけるはこは聞分なき人ぐよ。すでに昨日おん身等の許にゆき。此月の晦日までといひ延ておきつるに。夜中の遠慮もなきとかと恨いへば。此方は口をひとしうして。いな。我輩は貸をはたる爲には來ず。帳を消に來つるなり。米薪古手の償のこらず受取如此と。いひつゝ矢立の筆把て帳を消。受取の

書付をさし出せば。餘兵衛は益いぶかしみ。此方より其價を償たるおほへもなきに受取しといかなる故ぞとたづねれば。三人の者いひけるは。さてはおん身は老らざるか。今朝奴僕とおぼしき人我々が許に來り。南餘兵衛が債はいかほどあるぞと問る。故。帳を出して見せつれば。のこらず拂ふて歸られたり。何にまれよき仕送を持たるおん身。日來見くだしたる我々も我を折ぬ。これよりのちは氣づかはずいか程も貸まらせん。米薪は更にもいはず。古手なりと新衣なりと。澤山買て給はれかし幸に雨もやみぬ。傘の供してまかりなんと。欲に嘯宿鳥。翼すぼめて歸りけり。餘兵衛は頭をかたふけて。かれといひこれといひ。かへすくもいぶかしさよと。ひとりごちたる時しもあれ。外の方に聲ありて。不審におもふは理なり。こゝあけよ謂を語て聞すべしと戸をあけさせて。彼武士蓑笠ぬぎ捨覆面をかなぐりてまづ。刀を打通る。餘兵衛此人を見るに是則主人山咲庄司雪森なれば。こはそもいかにと驚きつ。刀をおさめて禮をなし。席を拂ひて上座に迎ゆれば。庄司はまづかに座をさだめ。且はやく兒子が繩をといひけるにぞ。餘兵衛はいと面目なげに窓太郎が腰にのこりし繩をとき。目口におほひし手拭を取すつれば。庄司は又財布をどらせ。亂し金を集させ。灯火を取よせて敷をあらため財布を見て眉を蹙。いと不審なる躰なりしが。彼僕の男沙土七を高手小手にくゝりあげて引立つ。走來り。お旦那これにおはしますか。先刻八幡堤にて拙者におん渡しありし金財布を。此

者が奪とらんといたせしゆゑ。奪れじと争折しも。黄昏の暗まぎれに。見せ物師等にや候はん。雷獸を入たる圈を荷て來り候が。刀の光にやあそれけん。彼圈を捨て逃去たる其後にて。彼雷獸にもよほされて忽勢猛なり。圈を破てをどり出。狂ひめぐれる其はづみに。金財布の紐雷獸の首に掛り。其儘天上いたせしゆゑ。取戻さんにも翼はなし。せんすべなさにせめて拙者が分疎の證にと。此者を捕へ願かふりをかながりてよく見候へば。豈はからんや此者は是箕腹蟻右衛門が僕沙土七に候ゆゑ。細打て引立まあり候。金財布を失ひしは拙者があやまり。一言の分説も候はずといひて打しほれ。あやまりいりたる躰なりけり。庄司はこれを聞とひとしく。掌を撲的打。其にて我不審はれぬ。夢平かならず愁るべからず。其財布は此にあり。金の數も五十兩一枚も不足なしといへば。夢平はこれを見て。一旦天上いたしたる其財布がいかにして此にあるやといふかりぬ。庄司又夢平に向ひ。其沙土七には兪議あほし。彼所の松に繫あま。汝守りて逃ざるやうに心をつけよといひてどほざけ。餘兵衛にむかひていひけるは。汝が父十字兵衛は。從來老實なる者にて。阿曾比などに心をうばれ不義の金をつかひ捨べき者にあらざるゆゑ。去年自殺せし始末を疑はまゝあるひ。我腹心の者を暗に都にのぼせ。五條坂につかはして様子を聞せしに。果して我推量にたがはず。兒子餘吾郎富士屋の吾妻といふ阿曾比のために祠堂金石塔料をつかひ捨たる罪を十字兵衛おのれが身に引受て切腹し。我君より賜

たる朝鳥の刀をさへ賣代なして石塔料に志たるよし明白に知たるなり。これによりて我餘吾郎が行方をたづね。手打にもすべく思ひぬれども。さある時は十字兵衛は犬死になる道理なれば。胸をさすりて捨おきぬ。これすこしも兒子をかばふにあらず。唯十字兵衛が志を失ふに志のひざればなり。汝等母子をも速に歸參させ。原のごとく家を立つかはしたくおもひぬれども。是又さあるときは餘吾郎が罪をあらはさなければなりがたく。あらはす時は十字兵衛が心にたがふ。これをいかにともすべからざれば。我心にもあらで金を泥に捨玉を淵に沈おきぬ。志かるに此度君命をかうふり。箕腹蟻右衛門袴田紺九郎等兩人を捕へんために上京せしこそ幸ひなれば。此僕夢平にまうしつけて汝が住家をたづねさせしに。貧げなる様子と聞。暗に汝を救んため。先刻八幡堤にて。夢平に此財布の金五十兩を渡し。汝に與へよとまうしつけしに。今聞ば雷獸のために此金を失ひつるよし。落る所もおほかるべきに。此家のうへに落たるは。正是皇天汝が孝を憐給ひて。あらたに此金を授給ひしに疑なし。孝人に至る則は衆福來るといへるはかゝるたぐひなるべし。今朝米屋古手屋の者等に。汝が債を償せしは。我夢平にまうしつけてさせつるなり。母を養ん爲に子を殺んどおもひつめたる汝が孝心感ずるにあまりあり。皇天の憐給ふも理なり。此金をもつて心の儘に母を養ひ。汝が心を安くすべしといひて彼五十兩を財布におさめて與へければ。餘兵衛は是をおし戴き。さては亡父は忠義のために死し候かとい

ひて喜びつゝ。主人庄司の慈悲深き志を感歎して。落涙袖をまぼりけり。時に隔の障子をひらきて母真弓をざり出。庄司に向ひ。恭しく禮をおこなひていひけるは。ひさしくにて健におはす御容躰を拜しよろこびにたへはべらず。夫十字兵衛不忠をなして自殺いたし候と。今までも恨み居候に。今彼處にておん物語をうけたまはり候へば。まかにはあらぬ忠死のよし。さありてこそと喜ばしくおもひはんべり。我くをおん憐ふかく。債を償たまはるのみならず。許多の金をたまはる事。何をもちか此大恩に報候べきといひて頻に涙を落しければ。餘兵衛は驚。母人は耳が聞え候かといふにぞ。母も心つきて。げにもくといひてうち驚き。今は何をかつむべき。我汝が貧窮を見るに志のびず。一口を減じて貧苦をすくはんとおもひ。二階にのぼりて自害せんとしたるに。今の雷鳴心の臓をつらぬくやうにおぼえしが。さては雷の響に病根を打破りて。我聾のなほりしかといひて。我身ながら不思議におもへば。餘兵衛は聞て益あどろき。そは危かりし事よ。拙者も又母人の爲に窓太郎を殺して一口を減じ候はんと存じ。すでに打んと振上たる刀の手の裏。雷鳴ゆゑに自然と狂ひ。打損じ候といへば。母又いへるは。經帷子と思ひて着たる禮順の禪衣には。觀音の御影もあり。今の雷鳴我自害をといめ。汝が刀を狂はせしも。雲雷鼓掣電。刀尋段々壞の經文にたがはず。日來信ずる菩薩の擁護にうたがひなしといひて。ひたすら歡喜してげり。窓太郎はわきまへなく。直弓が側に立寄て。祖母さま

ねふたいねかしてよと。膝に上りて抱きつけば。やよ窓太郎。御主人さまのあん側なるぞ。お禮をせぬか不禮な奴と。口には呵と心には。此祖母ゆゑに父の手にかゝらんとせし危さ。不便の孫やとおもひつゝ抱きまめて。とかく涙はとまらず。時に又夢平いそがはしく來りていはく。沙土七めはおふせの通彼處の松に繫ちき候が。此處の竹林ぎはに雷死とおぼしき死骸あり。よく見候へば。ほのかに見知たる者のやうにおぼえ候といふ。庄司はこれを聞とひとしくつと立上り。餘兵衛にもしびを把しめて。外の方に出來り。かの死骸を點檢するに。身軀くだけ焼爛たりといへども。袴田紺九郎に疑なし。さては我あどをつけ來り。だまし打にせんとしたるを。今の雷に打れて死したるならん。惶べしくといひつゝ舊のところに歸りて座し。又餘兵衛母子に對ていはく。汝等兩人母は慈悲あり子は孝あり。今の迅雷母の自害をといめ。子の刀の手を狂はしめて。孫の命をすくひ給ふ。都是天の憐をかうふりし所なり。其にかはりて紺九郎が雷に打れて死したるは。彼が不忠を天の罰し給ふ所に疑なし。彼といひ是といひ。天の賞罰正きことかくの如し。善惡報應因果觀面の天理。彰々として毫釐もたがはざるを見よ。孝の天を感せしめたる例勝て計べからず。悪人の雷死せし例も又鮮ず。家貧して孝子顯る世亂て忠臣を識といふ。王良が言宜哉。汝我祿を受たる昔の身ならば。其孝もあらはれまじといひて感嘆轉やまざりしが。又いはく。我汝をはやく歸參させたくおもへども。一旦追拂ひた

る者なれば。私のはからひになしがたし。是我苦き所なり。何とぞ一ツの功を立よ。其功といふは如此箇様なりと。餘兵衛が耳につきて何事か聾ければ。餘兵衛は點頭つゝかしこみうけたまはり候と答けり。かくて庄司は別を告て門外に立出ける時。雨過雲散て一輪の明月皎々とかいやく。恰白日の如なり。此折しも餘吾郎吾妻ととも。此家をたづね來り。餘吾郎且父庄司にむかひ禮をおこなひていはく。我不忠不孝にして。尊顔を拜すさへ而目なし。分説は切腹より外なしと存せしかど。十字兵衛が賣代なせし朝烏の刀を買もどし。これなる餘兵衛に返し與へて。彼が家を立る便にもおもふばかりに今までながらへ候なり。志かるに此吾妻。鮎尾賀堂左衛門といふ者を欺き。かの刀を取もどし候て爰にあり。我吾妻が心を去らず。僞狂人となりて堂左衛門が行方をたづね候に。先刻はからず途中にて吾妻に行あひ。彼が本心を聞。且露助にもあひ。堂左衛門が善心になりて切腹したる事。および兄餘字兵衛どの拙者を憐たまふ事を委聞候へば。いよゝゝ罪おもき者は拙者なり。露助と申すは則ち僕路平がことに候。いざいざ餘兵衛これを受取といひて。朝烏の刀に十字兵衛が位牌をそえて渡しければ。餘兵衛はこれをおし戴ておさめけり。餘吾郎又父に向ひ。十字兵衛が遺しおき候此竹の刀にて唯今切腹つかまつるが。せめて拙者が分説に候なり。いざ餘兵衛介錯頼といひもはてず。竹刀を振放して腹に突立んと志たりければ。餘兵衛は驚おしとむ。吾妻も其手にとりつきて涙を落し。いひ分

なきはおん身ばかりか。十字兵衛どのを失ひし其原をたづねれば。妾が身より事おこれば。餘兵衛どの親子の衆に合すべき顔なし。殊更前ほど途中にて露助がかたるを聞ば。堂左衛門は妾が同胞の兄なるよし。かれといひこれとまうし。妾こそ死ねばならず。皆さまいとまたび候へといひつゝ竹刀を挿取て。おのれが吭につきたてんとするを。餘吾郎またおしといめ。いなゝゝ我から先へ死ねばならずといひて。互にとめつとめられつ死をあらそひしが。庄司は態聲あらゝかに二人を呵。彼竹刀をとりあげて。餘吾郎が目さきにさしつけ。これはを見よ

拙者此度の切腹犬死に相成不申様
御短氣御慎遊され可被下候

かくの如く志るしたるは。十字兵衛汝が性質をよく知て。死したる後まで諫言をくはへんと。忠義の魂を籠残したる書置にあらざるやといひさして。ひそかに落涙したりけるが。又いひけるは。憎しと思ふ汝なれども。是まで其儘さしおきしは。十字兵衛がかばかり切なる志を失ふまじとおもへばなり。志かるに汝今自殺する時は。此書置の如く十字兵衛は犬死なり。志かのみならず昨夜淀瀨我旅宿をたづね來りて物語るを聞ば。兄餘字兵衛汝を家督にしたき願ひにて。すでに剃髪志たるよし。さあるときは猶更に汝死しては餘字兵衛が志を悖のみならず。家相續を斷理なり。若又強て死んとならば。七生までの勘當なるぞ。吾妻事は同家中齋元澁右

衛門の養女にて。原孝のため身を賣たるよしなれば。餘吾郎とは格別なり。汝も今死しては始の孝を失ひて。かへりて養父に不孝となる。これをよく／＼わきまへよ。餘吾郎汝今死んどもも一命をたもち。こゝろざしをあらためて一功を立てよ。其功を立てる仔細は具に餘兵衛にいひふくめおきつれば。彼と心を合せて互に功を立てよ。志かる時は十字兵衛も冥途におきてよろこぶべし。一功立たる其時は歸參をさせ。あらためて吾妻を妻女にいたすべし。いかに／＼といひければ。眞弓餘兵衛等も傍よりことばをそえて自殺をといめけるにぞ。餘吾郎も吾妻も死ぬに死れぬ義理となり。兩人ともにさしうつふきて詞なし。庄司又餘兵衛に向ひ。十字兵衛一且餘吾郎が爲に賣代なしたる其朝烏の刀。再汝が手にもどりしも。反哺の孝ある汝か徳の天に通せしゆゑなるべし。かへす／＼も譽なり。汝笛をつくることをよくするよし。號笛といふは俗にいふ叫子笛なり。これ軍器の一ツなれども。尋常の叫子笛は深山幽谷の濕地に於てこれを吹ばよく音を出さず。汝が工夫をもつて濕地といへどもよく音を出す叫子笛をつくるべし。後日かならず用る時あらんといふ。かゝる時しも傍邊の竹林を少し分て。箕腹蟻右衛門あらばれ出。ものをもいはず刀を抜て庄司を目がけ唯一打と斬つけたり。庄司は速く身をひねり。早足を飛して地上に踞仆。のけさまに倒たるを足下にふみつけ。やをれだまし打とは卑怯至極。我君命をかうふり汝と紺九郎が行方をたづぬるため上京せしに。兩人ともみづから來りて身を失

ふ。皆是天罰の志から志むるところなり。汝紺九郎と心を合せ。月影ヶ谷梅ヶ谷の兩家を亡さんと隠謀を企たること。密書によりて分明なり。殊更汝餘吾郎をすゝめて遊里にいざなひしより事起て。十字兵衛自殺したれば。十字兵衛がためにも讐敵なり。彼が魂を籠残したる此竹刀は竹鎗同然。主君を弑奉らんと事をたくみし大罪人を戮するには幸の刑具なり。不忠の報を思ひまれと叫りつゝ。力をきはめて竹刀を吭につらぬきければ。蟻右衛門は一聲さけび手足をもがき苦む躰。側に見る目もこゝちよくこそ思はれけれ。かくて庄司竹刀を引抜ければ。蟻右衛門は息絶たり。餘兵衛はこゝろえ手拭をとりて刀の血を清むれば。庄司は刀を鞘におさめ。やよ餘吾郎。此竹刀は汝が一生の守となして。短慮功をなさずといふ常言を忘るゝなどいひて與へければ。餘吾郎はち戴てぞ帯たりける。庄司又いひけるは。時刻うつれば我は旅宿に歸るべし。餘兵衛は此蟻右衛門と紺九郎が首を打。あとより旅宿に持參せよ。沙土七は彼等兩人が隠惡の證人なれば。生捕の儘鎌倉に率て歸らん。夢平は其繩つきを引立て我供せよと命じツ、立出れば。餘吾郎吾妻眞弓餘兵衛ももに門あくりして。庄司が背後を伏拜み。感激の涙に袖をぞまぼりける

〇かくて庄司は蟻右衛門紺九郎が首級を携へ。妻淀瀨は堂左衛門が首級を携へ。夢平に沙土七を率せて鎌倉に歸り。主君判官の面前に出て。庄司且かの兩人の首級を實檢にそなふ。

淀瀨は堂左衛門が首級を出して軍用金の賊なることを告。且餘字兵衛が都を殺せし謂をくはしくきこえあぐれば。判官は其志を感賞あり。紺九郎を打とりたる事を梅ヶ谷に傳。沙土七を誅戮す。是等の事をくはしくいはんはくだくしければ。唯おほむねを志るすのみ。庄司が餘五郎南餘兵衛等二人の者に功を立よといへるは何等の功にや。後々の巻を讀得て志らん

(十二)きられたる夢はまことか茂林の闇打

夫は扱あき爰に又。一段の事の端を惹出せり。是いかなる事をなれば。月影ヶ谷判官の息女。今年十五歳に至給ふが。頃日病の床に臥給ひ。一切ものもめさうりければ。祿をたまはる醫師は更なり。世にすぐれたる良醫をめして治術を盡させ給ふといへども。露ばかりも驗なく漸勞れ給ひ。而瘦身ほそりて日に異におもくなりまさり給ふにぞ。父母の君は更なり傳の人々も愁悲ことかぎりなく。病給ふおん容躰。うたがふらくは物怪の所爲にはあらずや。もし志からばいかなる良藥も驗あるべからず。此うへは兎角神佛の冥助をねがふに志くべからずとて。有願の高僧に祈を盡させ。諸社に幣帛を奉て丹精をこらし給ひ。母君は侍女等をかはるく鶴ヶ岡の御社に日參させ給ひけるが。一日一個の侍女かの御社に參詣し。祈念おはりて下向の折

ふし。庭きよめの宮奴等。瑞籬の下に集ひて物語するを聞ば。巨福路坂に太麻の靦女といふあり。寄弦口寄の上手にて。佛教にも通達し。難病奇疾物怪の祟など。其もとをあきらむる事鏡に物の影をうつすが如く。實は神佛ともいひつべしと噂するを。彼侍女聞つけて。これは此社のおほん神社占に託して告給ふならめと喜びつゝ。道を急て館に歸り。おん母君に个様くときこえければ。母君もいと喜び給ひて判官に告きこえ。其靦女とく呼迎よとおふせて巨福路坂へ使を立給ひけるに。太麻の靦女召に應じてやがて館に參ければ。姫の病架に近く呼入給ひ。判官夫婦對面ありて後。寄弦を乞給ふにぞ。靦女つゝしみて且神保をとなへ。梓の弓を打鳴して冥道をおどろかし。目を閉て無心になりけるに。あな思ひよらずや。去ぬる延文四年信濃國苦形にて亡たる。相摸次郎時行の怨靈梓の弓にひかれ出て靦女につき。判官に對していひけるは。我南帝の勅免をかうふりて整懷の旗を飄し。北朝をかたふけて累年の憤積をばらさばやとおもひ立ぬるかひもなく。運命つたなくして汝が爲に亡され。股肱耳目とたのみつる。大佛九郎貞直さへ知具麻川に入水して。底の水屑と成果ぬれば。生殘たる味方の者も。忽心變して皆足利に降參し。今は我輩の亡跡をどふ者だになければ。無縁の鬼となり修羅の眷屬となりて噴吐を合む心止時なく。永劫惡趣をまぬかるゝ事あたはざれば。其恨を散せんため。當家に祟をなし。先汝が娘を取殺して無間地獄にいざなひ去。共に呵責をうけしめ。おひく汝等をも取

殺して。遂に當家を絶すべくおもふなり。とくより志か思ひぬれども。苦形落城の刻汝が手に入たる日月のおん旗當家にひめありしゆゑ。是におそれて近づく事あたはず。むなしく年月を過せしが。近比かのおん旗を鶴ヶ岡の神庫におさめしゆゑに。時を得て祟をなすことを得たり。見よ、娘は更なり汝等夫婦嫡子玉兔之助を始め一族郎等にいたるまで。皆取殺し。無間地獄に墮て怨をはらさんずるぞといふ。其姿に見えずといへども。怒聲は其人に向ひて聞が如くにて。おそろしなごもいふべからず。母君を始此座にありし人、これを聞て大に驚きけるが。判官は半は信じ半はうたがひつゝ。覗女に向ひ怨靈の仔細をいひて詰問給へば。覗女はこれを聞き、妾先試べき事ありとて洗米をとりよせ。梓の弓を載る小櫃めきたる物の上に持散して。みづから姫の枕上に持行。此洗米を手づから拾取てめし給へといふ。姫は侍女等に扶起されてかの器にむかひ。洗米をつまみ取てくはんとし給ひけるに。あな怪し彼米粒忽ち蛭に化して蠢きければ。姫はこれを見て打わななき。あなやと叫て伏給へば。母君を始めかしの侍女等も。身の毛そばたちておそれあひぬ。さて姫を介抱して薬などまゐらせけるに。漸蘇生ことを得給へり。時に覗女いひけるは。怨靈姫を無間地獄にいざなはんといへる言たがふべからず。其故は無間地獄に墮る者は。此世にあるうちより食物蛭に化して食することあたはずといへり。今現に此志るしあり疑べからず。つや、物をめさるも理なりといふ。判官は眼前にかゝる

奇怪を見給ひて疑を決し。此怨靈を静んにはいかにしてよからめどかさねて問給へば。覗女はく。怨靈日月のおん旗をおそるとなればこれをまばらしく借受給ひて。姫の病架に立置。僧衆を請じて大般若經を讀しめ給はし。惡靈得脱して退。姫かならず快験あるべし。其故は帝釋と修羅と須彌の中央にて合戦をいたす時。帝釋軍に勝てば修羅小身を現して藕絲の孔の裏に隠れ。修羅又勝時は須彌の頂に坐して。手に日月を握り足に大海を踏といへり。時行の靈修羅の眷屬になりしとなれば。日月のおん旗をおそるゝは王威をおそるゝのみならず。此理にもよるべきなり。志かのみならず修羅三十三天の上に責上りて。帝釋の居所を追落し。欲界の衆生を悉く我有になさんとす時。諸天善神善法堂に集給ひて般若經を講じ給ふ。此時虚空より輪寶下りて劍戟を雨し。修羅の輩を寸々に割切といへり。されば時行の靈を静玉はんには。般若真讀の功力に去くべからずといへば。判官はこれを感じ給ひ。傍の人におふせて謝物をとらせ給へば。覗女は恭これを受納ていとまを乞ひ。私宅にぞ歸りける。かくて判官は俄に菅元澁右衛門をめし呼給ひ。先達て鶴ヶ岡に奉納せし日月の旗を志ばらしく借受來るべしとおふせければ。澁右衛門はこれを受け給ひ。急ぎ鶴ヶ岡に參詣し。先幣帛を進め。神樂を奏して神慮を慰し。神司に告て彼御旗を借受。みづからは是を携へて歸路に臨時。はやく夜闌にぞ至りける。此夜は雨雲月をかくしていと暗かりけるが。澁右衛門は許多の供人に前後をまもらして極樂寺の切通し

を過ける時。茂林の裏より黒き裝束きたる曲者兩人あらはれ出。前後の挑灯を斬落し。刀を電光の如くにひらめかすれば。供人等は臆してたゞちに逃去もあり。刀を抜て戦もありしが。防かねて皆散々に逃去ぬ。濫右衛門は懐の御旗を大事と守護すれば戦を好まずといへども。彼曲者等順風の落葉急水の游魚の如くに走りかゝりて。鉦をそろへつゝ斬つければ。止ことを得ず抜合せて打合ぬ。其刃音は梢をならす松風に響ひて。いとものすゞき林木原。あたり近き禪院の。鉦鼓の音のひまゝに。鳴まじる宿鳥の聲も。更わたる夜の暗がり。刃さきも志どろの探り打。刀の光り息づかひを心あてに戦は。或は石の地藏に斬つけて火花を散し。或は同士打をして血煙を立。志ばらく時をぞうつしける。濫右衛門は曾劔法に達しければ。ぬらひよりては志と打。身をかはしては丁と斬。二人の曲者にあまた手をおはせけるにぞ。曲者等は敵しがたくや思ひけん。早足を出して逃去ぬ。此時やうく雲散月あはれてあきらかなり。濫右衛門は彼等を打もらしたるをくちをしく思ひつゝ。一息つきたる折しもあれ。茂林の裏に弦音高く飄とひきき。一すぢの箭飛來りて。濫右衛門が胸さかを篋深に射たれば。さしも強氣の濫右衛門もたまりかね。ひとこゑ呀とさけびて後に墮と打倒れ。箭疵の鮮血懐に流れ入て御旗をけがしければ。御旗は忽ち懐を放出て空中にひらめきぬ。かゝる時しも茂林の裏より。兜頭巾に錦の野袴。金拵の腰刀のきらめくを帶たる曲者。二所藤の弓を携へて歩出。空中にひら

めく御旗を手早く把て懐に押入つゝ。莞爾と笑不敵のありさま。唯者とは見えざりけり。時に濫右衛門は息吹かへして刀を杖に起上り。懐をさぐり見て御旗のなきに仰天し。がつくりよはりて又倒ぬ。曲者ほうなづきつゝ。濫右衛門をのけさまに踢かへして彼が刀を拾ひ取。どいめの刃一えぐり。老鷹の音を止て。衣服蛇の昇天を。望むきざしの其骨柄折から撞出す三更の。鐘のひびきどもろどもに。行方も志れずなりにけり。諸此邊の里人等。濫右衛門が死骸を見つけて騒立。たゞちに月影ヶ谷の館に注進しければ。山咲庄司雪森點檢の役目をかうふり。僕夢平に挑灯もたせて此所に来り。濫右衛門が不慮の横死を悲しみつゝ。胸に立たる箭を抜取。箭の根を見ていぶかり居たる所に。はやく人の告げるにや。濫右衛門が妻於破矢兒子動之助どもに夢路をたどるこゝちして走り來つ。むなしき骸にとりつきて。前後不覺に號哭現心もなき躰なり。庄司も共に落涙し。和主等の愁傷さぞあらん。あたら忠義の武士を。可惜可悲といひて。志ばし歎に沈しがやゝありていひけるは。餘の物に心をかけず。御旗ばかりを奪去たる曲者は。なみくの盗賊ならず。察する所南朝に心をよする輩ならんといひければ。動之助涙をばらひ。君父の讐には共に天を載すとうけたまはれば。はやく敵の行方をたづね。おん旗をとりかへし。首とりて亡父の靈に手向たく候へば。此よしを主君にきこえ上給ひて。復讐をおん屍し給はるやうにおんどりなしくだされかしと。母もろどもに願ひければ。庄司いはく。

父母の警に居こと。苦に寐干を枕とし不仕といふ語もあれば。其ねがひもつともなり。早速主君にきこえあげておん眼をたまはるやうにとりなすべし。さりながら敵はなみくの者にはあるまじければ。必かろくおもふとなかれ。いさみ立若鷹は。かへりてあやまつことおほきぞかし。偷起鳥に心をつけ。力草を放つことなかれ。自よくこれを思量せよとこまやかに教訓すれば。其おん詞こそ我爲の錯腹巻拳手脇楯。忠といふ字を兜となし。孝といふ字を戟となし。たとひ敵鐵城に籠石門に隠るゝとも。一念の誠をもつてたづね出し。首ひつ提て立歸らんと。勢ひこめていひけるにぞ。母はよろこび庄司もうれしみ。いさましく。必其猛き心をたゆまずなどいひつゝ夢平を願て眩眼すれば。夢平は其意を悟り。一腰を抜手も見せず。動之助に斬つければ。こゝろえたりと四寸のひらき。下をはらへばひらりと飛て腕首つかみ「コリヤ夢平何をするぞ」「イヤサ若し敵がまづかうせば「かうおさへて」「どこつをひらいてかう斬かけなば」「まづ此やうにと扇のあしらひ。夢平が刀をはつしと打落せば。庄司は空虚を見すまして。かの矢の根を抜とりつ。手裏劍にうちつくれば。かえ草履にて丁どうけとめ「此手の裏では復讐のおん願はかなふまじきや」「ヲ、天晴見事其矢の根こそ敵を探る手がかりなれそれを證據にたづねべし。親父の死骸は勝手次第にとりおかれよ。我は一刻もはやく館に歸りて。復讐の願ひを出しつかはすべしといひ残し。夢平を具して立歸れば。母の於破矢も雪森が深き情を感歎し。

雙蝶記卷之五終

動之助どもろとも。むなしき骸を抱起せば。疵口より激る血のにはほひ鼻をおそひて腥。身上は冷て色變。諸行無常の青嵐に。溢てもろき蔦の花。寂滅爲樂の短夜に。碎て消し苔の露。目もあてられぬありさまなれば。又も歎に沈しが。森の鳥飛わたりて鳴聲し。曉近くぞなりにける。嗚呼此澁右衛門初駕籠の塵兵衛といひし時は貧苦にたへず。後に祿を賜りてやうやく心を安んずといへども。今又此災にかゝりて非命に死す。正是父五大院左衛門宗繁が梟惡其子に報所なるべし。常言に一分の惡をなせば十分の惡報ありといへるも宜なり。豈怖ざらんや

雙蝶記一名霧籬物語卷之六

江戸 山東庵京傳編

(十四) 蟋蟀枕も床も野宿の妖怪

去程に幣元動之助は復讐の願ひかなひて。俄かに行装をととのへ吉日をゑらび。一僕も具せず唯獨り。みづから包を背おひ鎌倉を發足し。おもふ旨やありけん武者修行といひなし。越中國をこゝろざして出去ぬ。楮越中國立山の連山に蛭牙山といふ廣大なる山あり。根は地角に盤まり。頂は天心に接り。遠く觀れば雲痕を磨斷し。近く看れば月魄を平呑し。深嶺幽谷の裏常に雲霧を籠て晴る時なし。山口には鳥獸おほく栖ゆるに。獠者等もおほしといへども半山より奥は人跡たえて其奥をきはめ知者なかりけり。比しも秋のはじめつかた。回國の修行者とおぼしく。笈を負錫杖をつき。鉦を打ならしてかの蛭牙山の半山にのぼり。行暮て宿すべき所なれば。野宿すべきかいかせんとおもひわづらひつゝ。彼方此方を見渡すに。はるかむかしの茂林の裏に一つの社見えければ大ききよるこび。草のかたふくばかりの徑路をもとめ。萩紫苑女郎花のたぐひの草どもいと高く生のびて。露滋き裏をおし分つゝ其處に去て見るに。あは

れにさみしうあれまどひて。人も住ざる古社なり。笈をおろして裏に入りこまやかに見るに。神前とおぼしき處は奥深くしていと暗く。蝙蝠など飛さわぎ。祭祀の具も見えず。いかなる神にかわきまへがたし。軒端かたふき朽目に苔蒸て垣生茂り。月も時雨も漏べきさまなり。葺は崩れて鳥の巢をいとむ處となり。翠簾は破れて蜘蛛の糸をむすぶ便りとなれり。床には落葉敷かさね。塵うづ高くつもりて獸の足跡おほし。高欄瑞籬みな朽て棘の裏に倒れたり。めぐりにはいく年をふるともまねぬ松杉のたぐひ深く立籠。枝葉茂りて社の上に打おほひ。物すさまじさいはんかたなし。修行者は野宿するにはましましならめとおもひつゝ。社の片隅に笈を置。油紙帳を取出して敷物とし。まばらく休息しけるが。松吹風谷の水音耳近くひらくひまゝに聞ゆる。鳥の聲のかれくゝなるいろくゝに鳴虫の音の哀れなる。凄凉寂寞として人めづらしげに豹躑さへ身うちを蝨にぞ。目もあはねば睡もつかず。まばらくありてむかふの方をはるかに見やれば。愁ほどなる火の光六ツ七ツ亂れ飛ぶ。狐のともす火かとおもふに漸々に近くなるを見れば。百姓とおぼしき者大勢明松を前に照し。注連をはりたる棺を昇。幣帛を持此社をのぞみてすゝみ來つゝものいふを聞ば「嗚呼村一番のうつくしき此娘。人身御供になるといふはかばゆい事「あいのう年は八つ親の歎きはいかばかり。何がうまうておん神は。おさない娘を食給ふぞ。悲き目を見る事よと。餘所の哀れを講つゝ。社の前に棺をす。其上に幣帛をさし夾

み。皆くひれふしぬかづきつゝ。おん神に告奉る。おん望みの餼をかやうに供じ奉れば。田畑をあらしたまはぬ様にぬぎ奉ると。いふ間も身の毛そばだちて「やゝ腥き風が吹く。松明を吹消れな。そや風がといひさして胸をひやし。魂をきやして打わなゝき。我先にとあらそひて。こけつまるびつ逃歸る。修行者は社の隅に身をひそめて此やうすを見聞し。さては此社に變化すみておさなき者をとるとおぼゆ。我さいはひに此に宿す變化を退治して諸人の歎を救はばやとおもひつゝ。錫杖に仕籠たる刀を抜かけてなほうかいひてぞ居たりける。漸時うつり夜嵐はげしう吹わたりて颯々ど梢をならし。青葉を吹落しいどものすとき時しもあれ。奥深く神前俄かに鳴動して。足音ひし／＼とひいき翠簾をかなぐる音などして。あらはれ出たる變化の姿。白き薄衣のやうなる物を頭にかづきて。正躰は知ざれども。かの棺のそば近く歩みよる。銀の戟を打曲たるやうなる爪生。鐵の針をうるなみたるやうなる毛生たる手をさしのべて。棺の蓋をめぐりと爬破りけるが。不思議や棺の裏よりも手を出して。變化の手くびを志かど掴み。忽ち棺を踏破りて。前髪ある若者旅裝束にて包を負ひ。白羽の矢を握りてあらはれ出たり。是則ち別人にあらす。髻元動之助氏邦なり。變化は手を振拂ひ。動之助を掴み殺さん勢ひなり。修行者は變化を目がけ。錫杖に仕籠たる刀を抜て唯一打と斬つくる。變化はやく身をかはし。頭をのぞめば身を沈め。下を拂へば飛上る。動之助は生捕らばやと思ひけるに

や。空虛をうかいひ變化の腰に組つきぬ。變化は背後に手をまはし。動之助が襟首つかみ。引のけんぞ志たる所を。修行者が呀と聲かけて打こわ刀。變化の腕を斬落せば。動之助はさつと退。其間に變化はすり抜てかき消やうに失たりけり。修行者は暗裏に動之助を變化と思ひ。又斬つければ飛すさりて抜合せ。丁々志と斬合しが。雨雲の絶間よりもれいづる月のさやけさに。互に顔を見合せて「和主は「おん身は「こははからず「思ひかけずとたがひに驚き刀をひきて鞘におさめ。先修行者いひけるは。和主は何故に棺に入て此處には來つるぞと問ければ。動之助いひけるは。其不審は理なり。我亡父の仇をたづぬるため。武者修行といひなして當國に到り。昨夜此山の麓の村長の家に宿をかりんといひ入しに。主人夫婦をはじめ家内の者。都て歎き悲み居たるゆゑ。何事を愁るぞとたづねしに。近頃此蛭牙山の木枯の森の古社に邪神すみて。月毎に一人づゝおさなき女を人身御供にとる事あり。これを供せざれば村の田畑をわらし。許多の人の難儀になるゆゑ止ことを得ず。いとしき子をとらるゝ者數れず。其とらんと思ふ子のある家には軒端に白羽の矢の立事あり。是其志るしなり。我家にも其矢立しゆゑに。今年八つになる娘を人身御供にそなふるなり。其故にかく歎なりといふ。其矢は則ち我携へたる此矢なり。我夫を聞うたがふ處おほければ。其主人にかう／＼せよといひふくめ。我其娘にかはりて此棺の裏に入。百姓等には娘と思はせ。此處に昇れ來つるが。果して推量にた

がはず。今おん身の斬落したる變化の腕をよく見給へといふにぞ。修行者かの腕を取て月の光によく見れば。是眞の腕にあらず。手覆なす物に怪き物の爪おそろしき物の毛をうゑてつくりたる物なりけり。修行者はこれを見。又かの矢を見。さては眞の變化にあらず。曲者の所爲に疑ひなし。打もらせしこそ残念なれといへば。動之助いはく。いかにもさなり。なみくの曲者とはおもはれず。かうくならんと耳語ば。修行者も何にかあらん耳語ぬ。動之助は打うなづき。路上の説話草裡人ありといへば。かゝる山中といへども容易に密事は語りがたし。拙者は此山奥に分登て様子をこゝろみ候らはん。「志からば互ひに立ち別れ。再會の時ばかりはかやうくと修行者又耳語つゝ。枯木の枝をひろひ集めて松明につくれば。動之助は火燧袋を取り出し。火を打出して松明に燃し。兩人これを分ち取り。たがひに思ふ旨やありけん。動之助は山奥の方。修行者は麓の方。別れくに出去ぬ。かくて動之助は松明をふり照し。木の下露に袖ひちて。山深くのほりゆくに。徑路盤曲したぐひまれなる險阻なり。人跡たえたる深山なれば。梢をつたふ山猿。岩間にすだく鷓鴣も。人をあなどる風情なり。狼の吼聲は山響にひびきてすさまじく聞ゆ。山蛭は肉に喰入て鮮血を吸痛みに堪ざれば。蛭牙山と名づくるも宜也とおもひつゝ。あやうげなる阻をつたひ。苔なめらなる岳橋を渡りなどしてゆくに。峯越の風に松明を吹消れければ。岩根はひ出たる所に尻かけてやすらひ居たるに。松林の裏よりあらくし

き大男二人歩み出て動之助に向ひ雷のおちかゝるばかりの聲していはく。汝は前髪ある弱輩なるが。何等の爲に夜中獨り此山にのぼるや。此山の半より上は人の上るべき處ろにあらざるに。見かけに似ず膽ふとき奴かなといふ。動之助此者等を見るに身材高く。眼は狼のごとく。鼻は野猪の如く。髭は熊のごとくなるが。峯茶をもて編たる頭巾をかぶり。蒲壁手をかけ。岳菅の脛巾をゆひ。山刀の長きを帯。一人は矛をよこたへ。一人は鐮を提たり。なみくの者ならば打驚ろくべきに。動之助は臆したるけしきも見せず。かゝる山中を夜に入て獨上ること。心得なくてなるべきか汝等もし妨せば。我手なみを見すべきぞといふ。かの者どもは阿々とうち笑ひ。いよく膽ふとき奴なり。汝さばかり手なみあらば。我くと勝負を決せよ。萬に一つ我輩に勝ことあらば此山にのぼすべし。若し負なば活しては歸さじといふ。動之助莞爾と笑ひ。我は武者修行のために旅をする者なれば。そは望む所なり。いでく勝負を決すべしといひつゝ立上りて身がまへすれば。先一人矛をひねりて突かくる。心得たりと刀を振。飛上りてははしと打。沈みては丁と斬。風にもまるゝ胡蝶のごとく。雪を持たる柳の枝の弱氣に見えて強きがごとく。柔よく剛を制する手練。凡人ならぬ太刀すぢを。見かねて残る一人も。鐮をさへげて斬つけたり。動之助は二人を相手に小太刀のあしらひ。牛若丸が鞍馬にて。木の葉天狗と戦ひしを。今見るごとき形勢にて。勢ひますく猛かりければ。二人の山人何かは以て敵

すべき。高這してぞ逝去ぬ。動之助は刀をおさめ。かの奴原は山賊ともおもはれず。熊どりの
 猿者にや何にまれいぶかしき者等なり。此山の奥見きはめずはあるべからずと思ひつゝ。清水
 を掬して咽をうるほし。松明も焼盡したれば。月の光に乗じてなほ上りゆくに。いまだ初秋な
 れど。深山のゆゑか。冬の時のごとく。寒風肌をどほして堪がたし。かくてゆき／＼て猪のか
 よふ道だになき所に到りければ。葛葛にどりつき木の根岩角を階に踏からうじてゆくに。やう
 一條の路ある所に出たり。さて四邊をかへりみるに。此處は草木などもよのつねならず。
 時ぢたる岩石なども都て目馴ざる物なり。孔雀石。緑青石。紺青石。石英。琅玕。石牡丹。石
 木賊のたぐひも見ゆ。山中に海石のまじれるも一奇事なり。蟹石。蛤石のたぐひの貝石おほく
 路のかたはらにあり。沙は金色なるもあり五色なるもあり。方解石は鑿々として餅を刻みたる
 がごとく。舍利石は皓々として露の滋に似たり。殊に怪むべきは野曝の白骨を散しおきたる如
 き石あり。是いはゆる野曝石なるべし。是等の玉石奇石。玲瓏たる月の光にかゝりやきければ。
 好景えもいはず。人間を出て仙境に入しかと疑はれぬ。其外見もおよばず聞も傳へざる奇石
 おほかれれば。動之助は奇異のおもひをなし志ばらく四邊をながめてぞ居たりける

(十五) 宿かして名をなのらする化石の鍋蓋

萬仞の青壁劔を削り。千嶺の碧潭藍に染り。碗々たる蛭牙山の奥深く。玉石奇石交りて。たゞ
 む巖をきりひらき。つくり懸たる草屋あり。苦むしたる白石樹は青龍の雲を出るに異ならず。
 なゝめに伏たる黃瑪瑙は猛虎の風を起すが如く。かたへは深き谷川にて。漲音のすさまじく。
 石鍾乳は時ならぬ軒の冰簪とあやまたれ。石燕の飛外は鳥もかよはぬ所なれど。住ば都とおも
 ふにや。篝火といふ此家の娘。あるじの留主に唯獨。灯火に向ひ居て。砧打手のたゆげなり。
 折節來る猿者の。晝狐の髭四郎あるじの留主を見こみにて。簀子の上のし上り。だみたる聲
 していひけるは。コノ娘夜なべ仕事をとりおきて。こちのいふ事聞めされ。あたら花を此様に。
 深山木にして朽さする便なきよ。折／＼來ていふ如く。こちの心にまたがは。此山を連て退
 き。都の花とながむる氣。得心なきかいかにぞと。いひつゝひし／＼と寄りそへば。突倒し。
 あなげがらはし母さまの留主といへば。來ては囁り妾をせむるうるさくよ。母さまに告きこえ。
 辛目を見するぞと。いふをも聞ず又さし寄て。猿が稗を揉やうなる身ぶりをすれば。娘はなほ
 うるさくおもひ。擣衣の杵で頭をはしと打退る。髭四郎は頭を打れてはら立つ。手負猪狼の
 たぐひといへど手捕にする男なれど。戀なればこそ格のやうになほくなれ。よし／＼我いふ事
 をうけひかぬ報には。此家のあるじ雲根の老女のあしき仕業を。縣司に告きこえ。やがて憂
 目を見すべきぞといひつゝ立を引とめ「それを告てすむべきか」「すまぬと思はうけひきた

まへと「いふに娘は口ごもる」「こなたはせきていはいかに」と「いはれて娘は胸に釘。當座をわざむき母に告。いかにもすべしと心をさだめて笑顔をつくり。さばかり深くおぼす心を。無解に聞んも心なし。いかにもそなたに志たがふべしと。いへばこなたは細目になり。それは實かあなうれしと。掌を合して拜つ。志からは後刻に此背後の岩陰に志のぶべし。よき時分これを吹て相圖をど。いひつゝ鹿笛を取出して娘に與へ。灯火消て合點かど。むくつけき山人も戀には心をなやましつ。先酒買ていはふべしと。穴熊の一番鎗を突とめたるこゝちして。獨り喜び歸りけり。娘はあとにはら立顔にて自頭をさぐりつ。今朝結た大事の蟬鬢を。此やうにそこねさしたるにくさよとひとりごち。再砧を打居たり。彼所には動之助志ばしやすらひ居たりしが。遙むかふに火の光ひらめきて。砧を打音聞えければ。かならず人家あるらめどももひつ。火の光を目當にゆきて。彼草屋の門に彷徨。ものゝひまより裏をうかひ見てけるに。十七八ばかりなる美麗娘。紅のこぞめの梅の小枝に春霞立田の山の鶯といふ文字を縹に染抜たる木綿の振袖を着たるが。帯志どけなくひき結び。額髪の顔にこぼれかゝりたるえもいはれず。人の斬首を臺にし。人の腕を杵にして擣衣てぞ居たりける。かく人跡たえたる深山に人家あるすらいぶかしきに。世にすぐれて美麗娘唯獨人の腕首を砧にして。平々たるけしきこそ怪しけれ。これは眞の變化にや。何にまれ宿を乞て試べしとおもひ。門の戸を打たゝ

き。これは道を踏迷て難儀におよぶ旅人なり。一夜の宿をめぐみ給へと聲たかやかにいへば。娘は砧の手をどいめ。いなこゝは人を宿す家ならず。彼處の谷にくだれば麓に到る道あり。とくくゆき候へといふにぞ。なほあなかに乞けるに。娘は其いらへもせず。こちは情の心をもて此にやどさじと思ふに。其心も志らで死地に入を好む。命志らずの旅人やと。口の裏に咬くがほのかに聞えければ。益あやしみ。宿かす事のなりがたくは。少刻のあひだ休せてよとて。なほいそがはしく戸をたゞけば。娘は腹立しげに立上りて歩み出。戸を引あけて月あかりに動之助が容を見れば。玉をわざむくばかりに美麗若衆なれば。忽眷戀の心を起して心頭突々と跳。あからめもせず打まもり居けるが。志ばしありていひけるは。主人の留主といひゆゑありて人を宿しがたくおもへど。おん身ならば妾が命にかえても宿したくおもひはべるなり。いざ給へといひつゝ手を取て裏に迎けるにぞ。動之助は身上の塵を打拂ひ。脛巾をとき草鞋をぬぎなぞすれば。娘はいそがはしく篋の水を石の鉢に汲入て足をあらはせ。何にかあらん黒き石を圍爐裏に打くべて火を燃し。此は深山ゆゑに寒さもはやし。いまだ初秋なれど見給ふごとく妾は綿入を着はべり。おん身は夏衣なれば寒さに堪給ふまじ。いざ火にあたりて身をあたゝめ給へ。あら山に踏迷給ひ。さぞなわびしうおぼされん。飢も志たまひつらんなれど。かゝる石山にて辛菜一房つくり得ざればすゝめ參らすべき物もなし。せめてこれなりとめし給へといひて。

折敷のうへに白き糸のやうなる物を盛て出せり。動之助はもてなしのあつきを謝し之を食ふ。少し甘味ありて忽飢を忘たり。これは何といふ食物ぞと問けるに。娘いはく。他になき物なれば知給はぬも宜也。そは石麪といひて此あたりの岩窟に生る物にて我々が平日の食なりといふ。動之助はこれを聞。よく見れば折敷も石なれば益いぶかり家内をかへりみるに。砧の腕首も石にて。火桶。灯臺。糸車。麻笥。鍋釜の蓋。播磨。播磨。切机のたぐひの雜具。すべて皆石なり。其うちにも石の枕は昔語の一つ家を思ひ出してあそろしければ。轉いぶかしみて其ゆゑを問に。娘いはく。此處は玉石奇石あほければ。奇石が洞とよび候。かしこなる谷底に川あり。よろづの物を其川水にひたしおけばおのづから石に化す。ゆゑに化石谷となづけ候。妾が家の雜具すべて石なるは。皆かの谷川にひたして石にせしなり。若かすれば萬の物かたくなりて破損せざるゆゑなり。今爐火に焼たるは石炭なり。此灯火は燃石といひてよく燃る石なり。松明のかはりにもして燃候といふにぞ。動之助はこれを聞。さては聞およぶ化石谷といふは此處にてありしかとやうく不審はれにけり。さて娘は振袖の袂を口にくはへ背後ながらによりそひて。いとばかしげにいひけるは。いづれの國にや京の女郎田舎の女郎とかいふ石もあるよし。都の花の京女郎も。深山木の田舎女郎も心の實に二ッはあらじ。女子の念は岩をもどほし。思ふ男をまたふては。石にもなると聞はべる。日陰の木々はあろかにて。石に

花咲谷もあり。岩間にたまる清水にも。月影はうつろぞかし。一河の流れも他生の縁。今夜お宿をいたせしも。深きえにしとおぼさずやと。心の裏をほのめかし。人に馴ねばおもはゆく。顔に紅葉の木の葉石。磨あげたる水晶に。緑をこぼす額髪。くれなる匂ふ口紅は。沙の中の珊瑚。顔に袂の隔垣。まだ初戀の咲そめぬ。苔の花の石梅に。色を含みてかわゆらし。動之助は娘が戀を幸に此家の様子をうかがはばやと心にうなづき。落花に心あれば。流水にも情けあり。さばかりにちもひたまはる志さらくあだにおもはずと。靡あふたる糸薄。ひとつに落つる白露に。濡の緒ほころびぬれば。娘はうれしさかぎりなく。動之助が手を取て。一間の裏にもなひ去ぬ。かくて時刻もやうつり。山風はいと烈くぞ吹渡る。此家の主は雲根といへる老女にて。雪をあざむく白髪を肩に打亂し。いく年ふりし女蘿の古松にかへりしごとくにて。面は節木のやうにからびたるが。石綿といふ物をもて織たる衣の裙を高くかへげ。かた手には珥みじかなる弓に獵箭を握りそえ。かた手には兎を提。老を見せざる健さ。谷の險阻をのぼりつゝ。家路に歸り門首より。娘今もどりしぞ娘とよびければ。かへり火は一間の裏を走り出。いつよりもおんかへりのはやかりしといへば。今夜は山風さわがしきゆゑに。鹿も猪も驚ろき走りて手にあはず。化石谷の岩陰にて。やうく此兎一つとりて歸りぬ。酒は晝ほど買てあり。是を肴に寐酒飲んと。いひつゝあたりを見まはして。脛巾草鞋などのとき捨

てあるを見つけ。旅人を留しかといへば。娘は筒の水に手を清めつゝ。されば候道を踏迷ひしとてわぶる旅人を宿しはべりといふ。老女はうなづき。そはよくせしぞ。いかなる躰の旅人にや。我まみえて試べし奥の間にをらば此にもなへといふにぞ。娘は心得つといひて一間の裏に入。動之助を連れて出来り。これは妾が母にはべりといへば。動之助は宿をかりし禮をのべなどするに。老女は動之助が爲躰をつらく見て笑顔をつくり。かゝる山深き栖なれば。萬事たらぬがちなれど。若わびしくもおぼさずば。ゆるやかに旅のつかれを休め給へど。いと戀にいへば。娘は母の詞を幸ひに。のう旅の郎。母も老かまうせば十日も廿日も十年も百年も此におはせ。かならず見捨てて去給ふなど。いふ詞のはしくに。自然と戀はあらはれぬ。動之助も打とけて。母子そろひての厚き情。謝すべき詞も候はずといへば。老女はほゝ笑ておん身はいづくよりいづくへの旅なるや動之助いつはりていひけるは。拙者は原下總の葛飾に住武士の浪人の子なるが。繼母に憎まれて追出され。立寄べき陰なきゆゑ。越後の國にある少の所縁を心あてにゆく旅なりといふに。老女又いはく。そはいたはしき事なり。卒爾なることなれど。我此娘見給ふごとく。身材高く生立ぬれど。いまださだまる婿なれば。明日を忘れぬ此老が亡後は。いかにして世を過べきと。不便に思ふは親のならひ。此山住のいぶせさをいとひ給ふ心もなくば。おん身を婿にといひさして娘を見れば。かゝり火は顔赤くしてはぢらひぬ。動之

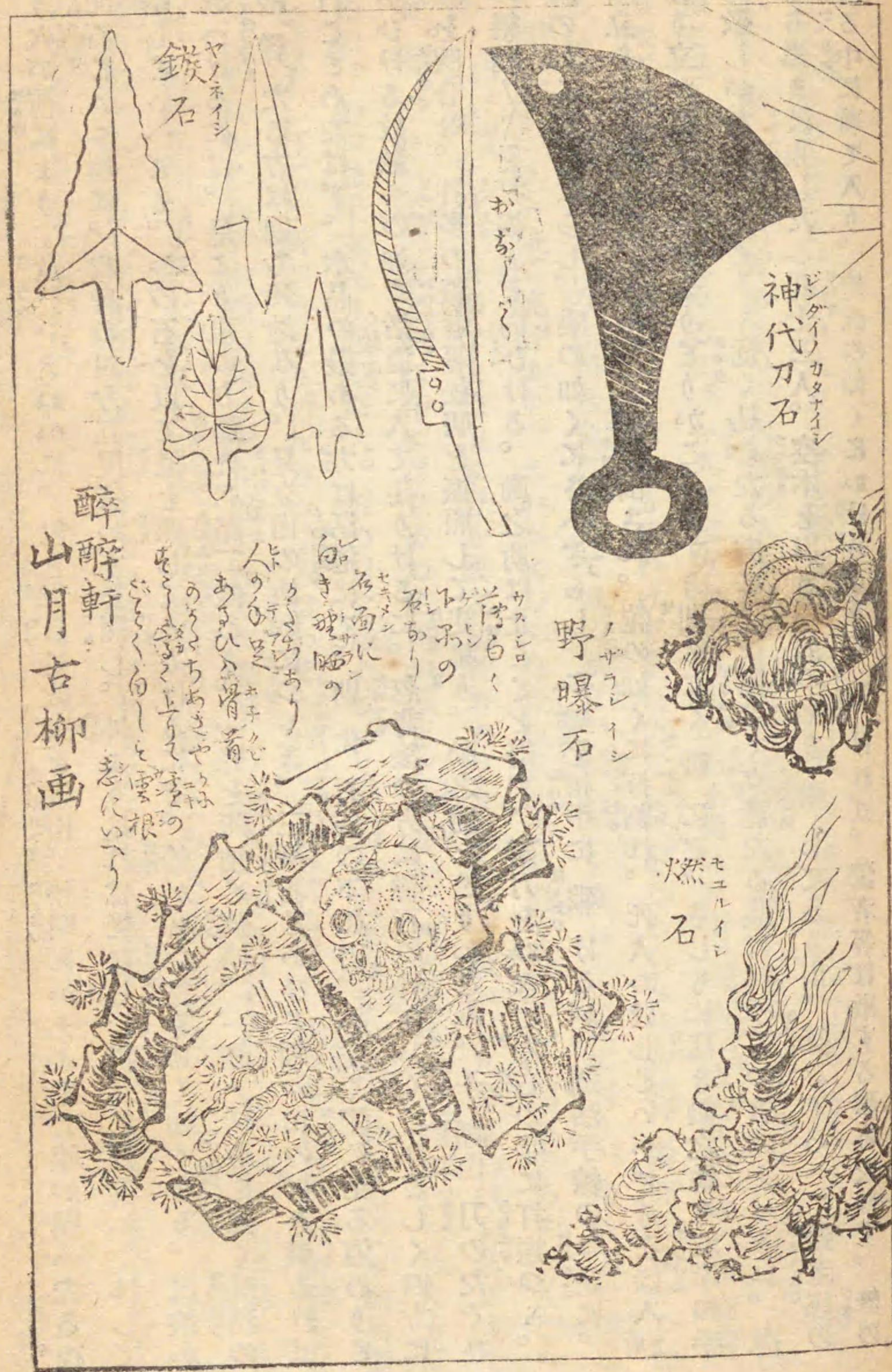
助は老女が詞にまたがひて。なほ様子を探り見ばやと思ふにぞ近くより。そはありがたきまでにかたじけなきおふせなり。今きこえ申せし如く。水鳥の陸に迷ひ。足なき蟹の身のうへなれば。此家の婿となし給はうへなき幸ひなりといふにぞ。老女は喜び。善は急げといふ言われば。今夜假に婚姻の盃をさすべきなり。娘戸棚の酒もて來よ。竈の下を焼つけよ。我は兎を料理して肴にすべしといへば。娘はいどうれしみつゝ。俄に襪襪ひき結て。母とともに立はたらき。石の切机石刀。料理終りて石酒壺。石の盃とりそえつ。松吹風の颯々々を。祝儀の謠に聞なして。三々九度もかりそめに。婚儀はやがてすみにけり。老女は益喜びて。何をがな婿引出にといひつゝあたり見まはして。釜の蓋を手に把あげ。今からは釜の下の灰までも。婿どのにまゐらす。證はこれとさし出せば。動之助はこれを受。心ありげな引出物拙者も何かな納采の志るしと思へど。憂旅なれば一物もたくはへず。せめてこれをと。側にありあふ鍋蓋を把あげつ。破鍋にはひきかへて。筑摩の祭敷もなき。玉の器の娘子に。似合ぬ拙者は此絨蓋とさし出し。互に探る心と心。謎はとけぬうちとけて。これ娘まだ山住に馴ぬ婿どの。かならず夜風をひかさぬやうに心をつけよ。あくまりたれど殘造の亭坐敷は。屏風岩にて風をふせげば。暖なるぞ。かしこへともなへ。婿どのゆるゝかに寐給へといふにぞ。志からばゆるしたまはれとて。動之助は立上り。娘が案内に打連てかしこの一間に入にけり。あとには老女眉を

鑑め。かの若者の爲躰いぶかしく思ふゆゑ。壻に望むにいなみもせず。いよ／＼合點ゆかざるゆゑ。今世にはびこる足利の家の紋。二引兩にたどへたる此釜の蓋は。四海におほふ引出物なりと謎をかけしは。足利方のまはし者ならんと思ふゆゑに。我も足利方に所縁の者なりと思はすべく思ひて與へたるに。彼又中黒の紋にたどへたる鍋蓋を。納采なりと謎かけしは。我を南朝の味方と察し。おのれも南朝に心をよする者なりと思はせて。我に心をゆるさせ。我をを探らん爲の計略ならん。若年に似合ざる即坐の頓智といひ。かゝる深山へ唯獨のぼり來つる大膽不敵。唯者とはおもはれず。別にまたいかなる謀計あらんもあはるべからず。大事は小事よりあやまつなれば。今夜のうちに唯一打と。獨うなづく折しもあれ。相圖の飛礮に石蛤をばつしと打ば。老女は心得立出て戸を引あくれば。燃石に火をともし。門方にひかへし手下の猿者。秦龜の泥九郎。山蛭の血平太。兩人ひとしくいひけるは。先刻此山の半途にて旅の若者に
出あひ。矛と鑼にて戦ひをして試みつるに。劍法を精熟し。まかも早業にて我／＼敵しがたきゆゑに。這々逃退候なり。彼奴唯者とは思はれず。此よし注進仕ると。いふをおさへて。聲高にものいふな。其若者は此方にとめおきぬ。果して我推量にたがはず。いよ／＼足利方のまはし者にうたがひなし。我彼奴を今夜の中に打とらばやとおもへども。若打もらさばかの後造の亭坐敷の軒口に釣おく磔石を打べければ。其方にも貝石の螺を相圖に吹合せ。かの活道をさ

へぎりて打とるべし。若又死地に入ばおのづから死すべければ手をくだすにおよばず。又此方にて打とらば。かねて去めし合せおきたるかの相圖をあぐべきぞ。此通手下の者等に残りなくいひ聞せよと耳語ば。兩人の者は打うなづき。早足を出して走去ぬ。老女は門をさしかため。石の刀を取出して腰におび。灯火を吹消て拔足しつ。亭坐敷に歩みより。梯のうへに二足三足上りしが。いな／＼娘が目を醒しなば必定妨すべければ。宿鳥をさすに去くまじと。巖に下りて床の下にくいり入。石の刀を引抜て。突上る簀子のうへに。あなやとさけぶ聲もろともに流るゝ血しほ。仕すましたりとおもひつ。いそがはしく梯を上り。明障子を踢放して。月影にすかしみるに。おもひもよらぬ手下の猿者。晝狐の髭四郎。朱に染りてのた打つ。旅人も娘も居ねば。ヤアとり逃せしかくやしさとひとりとごとし。かねて用意の雷椎を取上て。掛おく相圖の磔石を打んとせしに。屏風の陰より娘かゝり火走出。其手にすがりてとむれば。老女は眼をいからしつ。さては汝色に迷ひてかの若衆めを逃せしなにくき奴。こゝを放せと突倒して。又も打んと踏出す足に。倒れながら取つきて。手弱き力にとむる娘。老木の松に藤波の。まどひつきたる如くなり。娘は聲をふりたてし。これ母さま妾がいふこと聞てたべ。日來おん身のあしき業。此山に迷ひ來る旅人をとめおき。剛臆をこゝろみて。強者は味方につけ。弱者は打て捨。又剛なれども味方につくをうけひかざれば。手下の者にいひつけて道をさ

へざり殺さすゆゑ。非命に死す者幾人といふ數忘れず。其惡報はかならずおん身にかゝるべしと。平日に妾が諫れども。聞入給はぬ無得心。先刻此髭四郎が妾にたはふれ。得心せずは母人のあしき仕業をうつたふるといひしゆゑ。いつはりてうけひきたる躰にもてなしたるを實と思ひ。志のび來つるを幸ひに。相圖に與し鹿笛を吹。おびきよせて彼旅人を入かはらせ。おん身の手にかけさせしは。訴人の難をのがれたため。旅人を逃せしも。まつたく色に迷にあらざ。生さきある若人を。殺さんとのいたはしく。二つには母人に罪つくらすをいとへばなり。此のところを聞わきて。其相圖の石をうたず。何とぞたすけたまはれど。泣くいへば老女は益々怒りをなし。我心には大望あり。汝等が知事にあらず。彼者を逃しては。我家の様子他に漏れて。大望の妨となるなれば。たすくる事はなりがたし。放せ〜とあらそふひまに。髭四郎起上り。痛手に屈せぬ強氣者。さては我を志のばせしは殺せんためなりしか。にくさもにくしいよ〜訴人になるべしと。いひつゝ岩下に飛下る。折しも下には血平太泥九郎兩人ひとしく來かゝりければ。老女は上より聲をかけ。心變の髭四郎。それ打とれと下知すれば。二人は心得かけべたち。ひとしく石の刀を抜て斬つけたるに。深手に弱らぬ髭四郎。おなじく刀を抜放して。二人を相手に打合ぬ。老女も益氣をいらち。取つく娘を突退て。磬石を打鳴せば。忽ち四方に吹立る石の螺。山響高くひびき合ひていとすさまじく聞えつゝ。遙の山間谷間に許

多の松明かゝりやきて。つらなる星の如くなり。娘は四方を見渡して。獨氣をやみ身をもだへつゝ。案内も忘れぬ此山中の。ゆく道〜をふさがれては。彼お方はかならず打れたまふべし。と歎く涙のひまよりも。圍をどかせ退ぞかする相圖はかねて聞おきしと思ひ出して此方にかげ下。埋火を外の方に持いでつ曲玉壺にたくはへたる。螢砂を掌に握りて。火桶のうちに打入れば火氣にまたがひ螢砂空に高くのぼりけるが。相圖を合する螺の音もやみ松明の光も漸々に消けるにぞ。娘はやう〜安堵して。胸撫おろす時しもあれ何ものとも忘れず。岩の陰よりあらはれ出て娘を捕へ。口をおさへて小脇に抱き行方も忘れずなりにけり。老女はこれを露まらず。螺の音やみ松明消しをいぶかりつゝ。なほ磬石をついけ打に打けるが。下の方を見おるせば。血平太泥九郎の兩人髭四郎に斬立られ。いと危く見えければ。老女は雷棍をなげ捨て大きな吸針石を取上つ。髭四郎がはたらくにまたがひて。上よりこれをつかひけるに。血平太泥九郎の兩人は石の刀。髭四郎が刀は常の鐵刀なれば。吸針石の氣勢にいざなはれて。刀の手の裏狂ふ所を。二人の者は得たりとした〜みかけて斬つたれば。髭四郎はつひに打たれて死してけり。此髭四郎は別人ならず。是則ち前の月餘吾郎が住家の竹林に志のびて餘吾郎を打んとしたる堂左衛門が僕なり。僕獠者なりしゆゑ其後又此業をして。雲根の老女が手下となりしが。鹿笛の音にあざむかれて殺されしは。妻戀鹿を數多殺生したる報なるべし〇去程に動之助はかゝ



り火が情によりて危急をまぬかれ。包を背負て彼家を逃出。松明にかえよとて娘が與へたる夜光石といふ物は。我身の四方五尺ばかりを照し。外より見れば光なし。折ふし月雲かくれして暗しといへども。かの石を以て道を照して走りけるにぞ。恰かも白晝をゆく如くなり。又娘か教へけるには。是より東の方遙先に路二條あり。一條を死地と號け。一條を活道と號く瑠瑪の巖聳たる方は則ち死地なり。是立山の地獄についき。三稜石といひて劍の山の如き巖あれば行ことあたはず。水晶の巖ある方は活道にて。則化石谷の下に出。心安く麓に至る道ありといひける故教への如く活道に入て走りけるに。忽背後の方に磬石の音ひくとひとしく四方に螺を吹合せ。許多の猿者等松明を振照して走集り。動之助をとりかこみ。矛鑢山刀のたぐひの得物くを打振てぞ向ひける。動之助は止ことを得ず。兩刀をぬきて左右の手に打振つ。風の如くに打ならし。雲の如くにさへざらし。多勢を相手に戦けるが。劍法手練の早業に。斬立らるゝ猿者等。瓜の如くに砍倒され。匏の如くに打割れ。死人おほしといへどもなほ入かはり立かはり。四方よりとりかこみてすき間もなく戦にぞ。さしに猛き動之助も双拳四手に敵しがたく。ほどく危く見えたる處に。夜霧深く立籠たる裏に叫子笛の音聞えけるが。忽ち黒き装束したる武士三人。空木を出る荒熊の如き勢して走り出。鎧をそろへて猿者等の群る中に斬て入り。旋風の如くにかけめぐりて戦ければ。猿者等は敵する事あたはず。殊の

子を散すがごとく。四角八方へぞ逃散ける。三人の武士は道暗ければ長追せず。舊所に歸りしに。動之助はいぶかしみ。何等の人なれば我危急を救ひ給はりしぞといひつ。彼夜光石を以て三人の面を照しみるに。一人は南方十字兵衛が兒子南餘兵衛。残る二人は北岩倉の僕露助。山咲庄司が僕夢平なれば。こはおもひかけずといひて益いぶかしみけるに。南餘兵衛いひけるは。拙者が主人山咲庄司君命によりて俄に旅立。我輩を具して當國に到り。今此山の麓なる假名寺といふ寺に旅宿せり。まかるにおん身今夜獨此山に登り給ひしと聞傳てあやうく思はれ。我輩を召。汝等今夜彼山に登り動之助若あやうき事あらば救べしと命ぜられしによりて如此といへば。動之助は今にはじめぬ庄司が厚意を感激し。四人志ばらく休息して居たりけるに。かの血平太泥九郎の兩人。石の刀を扱そはめて。岩の蔭より歩み出。動之助と南餘兵衛をだまし打にと斬つけたり。此方の二人はいそがはしく身をひねり。動之助は血平太が首をはつしと打おとし。南餘兵衛は泥九郎を腰車に斬放し。兩人一度に刀をぬぐひて鞘におさめけるが。南餘兵衛動之助に對ていはく。主人庄司おん身にまみえて密談ありとまうされたれば。一旦假名寺へおはして御對面あるべしといふ時已に東まらみ。山鴉鳴さはぎければ。四人ひとしく麓をさしてぞ下りける

○前に庄司南餘兵衛に對し。深山の濕地といへども遠く音を發する叫子笛をつくれ。他日お

のづからもちうる時あるべしといひしが。果して此時用たちぬ。

(十六)おもしろうて頓てかなしき鵜養の腹切

其積礫を翫て。玉淵を窺ざる者は。未驪龍の蟠所を知らず。其弊邑に習ひて。上邦を視ざる者は。未英雄の纏所を知らずといへる吳都賦を。おもへば越の中國。蛭牙山の崖を背後になし。龜毛川の流にそひ。兎角といへる村中に。閑作といふ鵜養あり。頭に雪は戴ど。面は朱をそぐが如く。古來稀なる七十歳の。翁と見えぬ岩疊作り。營業は朝暮に。龜毛川の鮎をとり。唯殺生を事として。波の滴の腰蓑に。露の命をつなぎ船鵜舟にともす篝火の。消なん後の闇路をも更におもはぬ罪業は。日々に深くぞなりぬらん。栖のかたへに幾年を。經ともあれぬ大木の古松あり。空に注連をひきたるは。様子ありげに見えにけり。比しも七月孟蘭盆の時なりしが。さすがに盆中は殺生の業を休み。靈棚をいとなみつ。菰筵に杉の葉垣。茄子の牛に瓜の馬。板の箆に土器も。土になりたる人の爲め。浄土の風に瓔珞の。ゆらくが如く掛渡す。粟穂稗穗に青飽瓜。濁にままぬ蓮の葉も。露の手向と見えにけり。村中の鵜養等。あるじの招きに寄つどひ。靈棚の前に圓居して。百萬遍を繰念珠の。手つきも常に手馴たる。鵜繩さばくが如くなり。あるじの閑作音頭取。發願以至心歸命阿彌陀佛。念佛衆生攝取不捨と。

鉦打ならず一越調の。聲もゆがめる小屏風に。押散したる追分繪の鬼の念佛に異ならず。老たる若き打交て。調子ちがひの六字詰は。巖にむせぶ谷川の。黄鯉魚の聲かどうたがはれ。尻聲のなき責念佛は。松の嵐に鳴交る。秋の蟬かどあやしまる。欠まじりに退屈の。念佛を奥齒に噛みだせば。いづれも御苦勞これからは。願以此功德平等に。あるじぶりすべしといひて。鉦打ちさめ念珠取あさめて。閑作は皆く打向ひ。闇を好むが鵜養のならひ。月の半は月夜といひ。殊に盆の中はどれもく休みを幸ひ。明の十五日が冥日にあたる亡者があるゆゑ。今日の逮夜に志の百萬遍。ようつとめてくださった。心ばかりの蓮の飯。新酒などまゐらしててもなすべし。あれ見給へ盆中は。鵜籠をひらきて鵜等にも樂をさするが罪ほろぼし。こちらも盆が骨休め。躡躑とも寐まるとも。心まかせに打くつろぎて語りめせ。といひつゝ地獄の釜の蓋。あけて盛だす蓮の飯。薄き新酒の磁罍酒。精進肴とりそえてさし出せば。遠慮會釋もなみ居たる鵜養等。辭宜挨拶もそこく。施餓鬼にあひたる亡者の如く。或は食ひ或は飲み。咽につかへてむせかへるも。鵜養の罪とおもはれぬ。かくて漸時うつりて。暮影に鳴晚蟬も。野邊の鶉に音をゆづり。蘆花の風雪を散し。殘螢の光灯を點じて。日もすでに暮ければ。鵜養等はあくまで食ひいたく酔つ。我家く歸りけり。さて此閑作につかふる下男に。崩簾の吳呂藏といふものあり。此時船に橋さして歸りきつ。岸の柳に船を繋ぎ。櫂をかたげて裏に

入。訛聲して。最早念佛もすみましましたか。おん身獨りでさぞないそがはしくありつらん。今夜は空に雨氣がみゆれば船にも苦をかけました。といへば閑作。唯々それはよく氣がついた。高燈籠にも火を燃し。彼等が飲食に取散したる此器ども、取おさめよ。鵜にも餌を飼魂棚にも灯明たてよ。といひつゝ樽を打ふりて。五升ありし此酒を。滴も残さず飲をつた。寐酒なくは寐つかれぬ。何かの用をまきうたら。一走買て來よ。ついでに豆腐小半丁。線香二把。錢はかしこに出してある。我は少刻休息するぞといひ捨て。奥の一間に入にけり。吳呂藏は何くれどまめやかに立はたらき。門に立たる高燈籠にも火を點し。これであらまし用はすむ。唯一走りといふた所が酒屋へ一里豆腐屋へ半道。菖蒲ヶ池の狼に油断がならぬと獨言し。擧のさきに樽をくゝりて打かたげ。松明をたづさへて。いそがはしげに出去ぬ。夫飛花落葉のはかなさを觀ずれば。妻子珍寶何かせん。生死長夜の夢の世を。驚き悟る人なるか。まだ年若き修行者の。笈を負錫杖をつき。打ならす鉦の音いろは松蟲の。草葉に鳴が如くにて。高燈籠を目當に來り。殘螢の二ツ三ツ風に亂れて露深き。葎の門に歩より。これは回國の修行者なるが。行暮て難儀におよぶ。一夜の宿を御報謝にあづかりたしといひ入たり。閑作は一間を出て門の戸をあけ。今日しも亡靈を祭る日といひ亡ぬる人の速夜なるに。修行者のおはせしこそ幸ひなれ。いざこなたへとむかゆれば。志からばゆるし給はれとて。修行者は裏に入り。草鞋をどけ

ば。閑作は苔井の水を汲とりて足をあらはせ。鹿末の齋飯を調ずる間。回向をたのみ候とて。いそがはしく奥に入ぬ。修行者は笈をかたよせ。魂棚に向ひ居て。先すゑおきたる位牌を見るに。延文四年三月十五日打死。大佛九郎貞直靈。とあるしたり。修行者はこれを見て。或は驚き或は悲むけしきにて。落涙袖をまぼりしが。哀ありて懷より香包を取出して香を焼。鉦打鳴し。南無亡靈頓證佛果菩提。南無阿彌陀佛あみだ佛とどなへつゝ。回向をしてぞ居たりける。時に香氣馥郁として。家内に薰じ。世常ならぬ香なれば。閑作は一間の障子を細目にあけて香の薰を訝む。かゝる折しも蛭牙山の雲根の老女。此門首に來かゝりて。これも香氣を不思議に思ひ。志ばし窺ひ居たりしが。何か心にうなづきて。家の背後にめぐり去。修行者は回向を終鉦を打ちさむれば。閑作は一間を出て修行者の側近く寄り。今おん身の手向給ひし名香は。楊貴妃の身摺といふ香ならずやと問ければ。修行者はいはく。いかにも然り。彼香をき、知たる和主の素性は何人ぞやと問かへせば。閑作はいはく。先おん身の素性をあかさされよ。其うへにて我素性をも語るべし。といふに修行者威儀をつくるひ。我實は相摸次郎時行殿を守育し大佛九郎貞直が一子なり。すぎつる延文四年。信州苦形落城の刻。戰場にて出生したるよし育てたる者物語れり。父貞直打死とは聞しかど。存亡疑しければ。若活ながらへて此世におはすならばめぐり會こともやと。かく修行者に身をやつし。諸國をめぐり尋ねしが。思ひもよらず此

家に祭る亡父の位牌。さては打死にきはまりしと。思へば力も落果て。むなしき位牌を拜事。よく薄き親子の縁。亡父を祭る此家のあるじは。必ず所縁の者ならめと思ふにより。探らんとために焼たる香は亡父の遺物。此香包を見られよとさし出せば。閑作は是を見て打驚き。いざ先これへと上座にうつして両手をつき。さては戦場にて生れ給ひし若君よな。今は何をかつゝむべき。かくいふ拙者はおん父九郎貞直君に仕へし郎等魚淵劍太とまうす者。はからず今夜めぐりあひ奉るも。おん父尊靈の導給ふにうたがひなし。おん父君は知具麻川に入水して。底の水屑と成り給ふ。明は冥日今夜は逮夜。過し昔をおもひ出すもくちをしやと。拳をにぎりていひければ。修行者は落涙しつゝさしうつふきて詞なし。閑作かさねていひけるは。壁に耳あり牆に縫めありとまうせば。端近にてはおん物語りもなりがたし。いざたまへと案内して。奥の一間にいざなひぬ。かくて初更もやゝ過ぎて。雨雲の晴間よりもれいづる月影の。川波てらす岸づたひに荷をになひて。心太を賣商人歩み來つ。此家の門邊に荷をおろし。心太めせちう志やくも入て候。心太の曲突をのぞみ給はし見せまうさんと。聲たかやかにいひければ。此村の鵜養等寄集。心太の曲突とはめづらしき商人。いでのをぞみて見るべしとて取りかこめば。商人は嗽しつゝ。そも我商なふ心太は伊豫の國宇和島の名産なり。漢名はあまたあり。和名は古留毛波又こゝろていともまうすゆゑ。ところてんとよこなまれるなり「孟蘭盆のなかばの

秋の夜もすがら。月にすますや我こゝろてい」と詠たる歌もはべれば。今がもなかの商物に候ぞ。ひやゝかにめし候へ。曲突をのぞみ給はしいで見せまうさんといひつゝ。或空に高く突あけて皿坏に受留。或は背後ざまに突て肩を越させ。或は突て股をくいらせ。或は突上て落る處を箸をもて挟などし。いろくさまく曲を盡して見せければ。鵜養等は興に入さてもおもしろき商人かなといひはやして。我もく心太をうち食。錢を興へて立去ぬ。折しも川風颯と吹て閑作が魂棚の灯明を消す暗まされに。彼商人四邊を見まはし志のび入て魂棚にすゑありし位牌を奪ひ懐におし入つゝ。荷をになひて行方もまればなりけり。時に庭の苔井の裏より。大きな蛇蠢出で。鵜の鳥の雛をくはへ。傍邊の古松の空に入んとせしが。忽ちまち地上に撲的おち。のたうちまはり死てけり。彼修行者は一間の障子を押しあけて。睨もせず此躰を見居たりしが。あの空をこそ怪けれと心におさめて打うなづき。松のもどによらんとせしが。閑作はいそぎまどひて走り出。むかふにまはりておしもどし。さてこそ偽者觀念せよとよばりつゝ。一腰を抜放て斬つければ。修行者は錫杖をどりのべて丁と受留。又斬つくるを受ながし。裏に仕籠し刀を抜て。丁々志と打合ぬ。かゝりける時崩簀の吳呂藏は。買物をとゝのへて家路に歸る其跡より。以前の商人抜刀を背後にかくしてねらひより。肩尖のぞみて斬つければ。吳呂藏は身をひるがへしてこれを避。酒樽を投捨て權に仕籠し刀を抜。拂へば